
IMAGE～ラストイメーヅバトル～

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I M A G E ㄱラストイメージバトルㄱ

【Nコード】

N O 3 6 0 Z

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

——倒して、勝てっ！——壮絶な死闘を繰り広げた『闇の書事件』終結から、10年。体内に『ジュエルシード』を宿したあの男が、二体の最強サヴァントを連れて帰ってきた！ ミッドチルダに機動六課が発足されて、新たな物語が動き出す。原作での理不尽な結末を迎えたナンバーズの運命を変える為に、敢えて原作通りに事を進める。だが、隼樹達が知らぬ裏で、闇は着々と力を付けていた。時空管理局の闇！ ナンバーズの最悪な運命！ 甦る最凶の宿敵！ 次々と迫りくる危機に、隼樹は己の力と仲間達の力を駆使して挑

む！ ※作中に過激なシーンが含まれますので、苦手な方はご注意ください。

始動（前書き）

皆さん、こんにちは。

このたび、『イメージ』の続編を再執筆・掲載する事になりました。今回は、前作のような余計な『ゲーム』や『アンチ・ヘイト色』が無いように描いていきます。

物凄くく久しぶりなので、色々不安もありますが、よろしく願います。

では、本編をどうぞ。

始動

ある無人の世界。荒れ果てた荒野の中で、一ヶ所だけ異様な光景があった。

無人で生物が棲んでいないハズの荒野に、死体があるのだ。それも、一体や二体ではない。様々な種類の生物の死体死骸が、何十何百——いや、万に届こうかと言う異常な数が死体の山を作り上げている。腐り切った死体は腐臭を放ち、荒野を陰惨で惨劇の場に変えていた。

そして、異常な数の死体に囲まれた中心に、一つの建物があつた。王宮のような外装で、高く聳え立つ建物の大広間に、沢山の影が立ち並んでいた。静寂を守り、微動だにしないで大広間の中央に立ち尽くしている。正体不明の影が立ち並び、不気味な程に静寂な間は、通常の空間とは違うどす黒い雰囲気満ちていた。

影の軍団の前には、玉座が据えられている高い壇があった。黒一色に内装された大広間と同色の王座に腰を降ろすのは、一人の少女だった。年齢は十代後半と言った若さで、下ろされた艶やかな黒い長髪、黒く生地薄いドレス、黒いストッキング、黒いハイヒールと上から下まで全身が黒一色に統一されていた。瞳も黒く、目に映る物全てを飲み込む深さと漆黒さ。逆に肌は透き通るように白く、黒の出で立ちの中でよく映えて艶めかしく見える。

眼前の影の軍団を見下ろし、少女は口を開き、静寂な空間に声を響かせた。

「十年……！ 長かった……ココまで力ちからを付けるのに、随分と長い時をかけた……！」

漆黒の美少女の脳裏を過るのは、過去に忌まわしき敗北の記憶だった。

「ようやく我は、復讐と支配の力を得たのだ……！ この力で、あ奴らに復讐する時は近い……！ 憎きあ奴らを葬り去り、全ての世を我が望む漆黒の世界に創り変えてやろうぞ……！」

闇は静かに、その時を待つ。

＊

新暦0075年4月。

ミッドチルダでは、時空管理局の一部隊である古代遺失物管理部・機動六課が正式に発足された。部隊長は、小さい頃に起きた『闇の書事件』で魔法の力を開花させた八神はやてが部隊長を務め、部隊長補佐にはパートナーのラインフォースを側に置いている。部下には、一等空尉となった高町なのはと執務官となったフェイト・テストロッサが着き、他にも優秀な成績を持つ者や将来有望の若手まで揃っている、まさにエリート部隊だ。

綺麗に整っている部隊長室に集まった四人は、機動六課発足の挨拶をするべく、ロビーに足を運んだ。隊舎のロビーは広々としており、壁はガラス張りで外の景色が見える面があつて解放的な空間になっている。ロビーに集まっている部隊局員の数は、約30名程だ。部隊局員の中には、守護騎士のシグナム居達とフェイトの姉であるアリシア・テストロッサの姿も見える。彼等を前にして、はやての部隊長としての挨拶が始まる。堅苦しく長い挨拶は嫌われると言う事で、簡潔に短く挨拶を済ませた。挨拶が終わると、前に並ぶ局員一同から拍手が上がった。

拍手が収まるのを見計らって、はやては再び口を開いた。

「私からの部隊発足の挨拶は以上です。では続きまして、我が機動六課に“民間協力者”として協力してくれる方々を紹介します。

セイバーさんとセイバーオルタさんのお二人です」

はやてに紹介され、若干の色違いをした金髪の少女が一同の前に歩み出た。

一人は、陽の光を受けて煌びやかな金髪を青色のリボンで後ろに結び、端正な顔立ちをした少女だ。瞳の色は碧色で、濡れた宝石のように美しい。凜とした顔つきからは、意思の強さをハッキリと現しながらも、どこか穏やかさも感じられる。

「初めまして。紹介にありました、セイバーです。一年間、よろしく願います」

丁寧な挨拶で、セイバーは名乗った。

「セイバーオルタだ」

次いで名乗ったのは、彼女の隣に立つセイバーオルタだった。淡々とした口調ながらも、“王”としての威圧的なモノが感じられる声をしていた。

髪は金色だが、隣のセイバーと比べると若干薄い感じに見える。着ている衣装も、白い服を着用してるセイバーとは対極の黒いゴスロリ衣装である。肌も美白と称するくらい綺麗で、目力はセイバー以上だ。もう一つ両者の違いを挙げるとすれば、頭の天辺に“アホ毛”が有る無しくらいだろう。実力も違いがあるが、ソレは追々明らかにされる事となる。

紹介を聞いた局員一同は、男女問わず二人を凝視していた。姿がソックリである事もそうだが、何より“存在感”が違っていた。明らかに他を圧倒する気があり、畏怖する者もチラホラと見える。そ

して何より、気高い気品さ漂う美しさに数少ない男性陣は見惚れていた。

ココで挨拶と紹介は終わり、といきたいところなのだが、そうはいかなかった。実は、もう一人民間協力者が居るのだが、この場に居ないのだ。

どないしたものか、と部隊長のはやては頭を抱えた。

その一方で、セイバーはロビーの入り口に目を向けた。

——ヤッペー！ 完全完璧に遅刻だよ……！

ロビー入り口の陰に座り込み、頭を抱える一人の男が居た。

地味と凡人を合わせたモノを絵に描いたような容姿の男で、眼鏡をかけている。彼の名前は、葉谷資隼樹^{はやしゆんき}。体内にロストログア『ジュエルシード』を宿し、セイバーとセイバーオルタのマスターとなつた男だ。

——くっそ！ 今日の挨拶に緊張して眠れなかったのがマズかったか……。いや、一番の原因はセットした目覚ましですが、電池切れで鳴らなかった事だっ……！ 断じて、俺は悪くない！

遅刻の原因は、寝坊と言うベタっちゃあベタな理由だった。

いや、最大の原因は“敢えて原作通りの選択をした自分自身”だ。

——何で？ 俺、今まで学校の入学式、始業式、終業式、卒業式と集まり事には遅刻した事無かったのに、何で今日遅刻なのよ？

何でよりによって、初めての遅刻が今日なんだよ……！ マジあり得ねえ……！

頭をグシャグシャと掻き乱して、隼樹は苦悩する。

そうこうしてる間にも、時間は無情に過ぎていく。今更出ていても気まずいだけであり、時間が過ぎればどんどん出づらくなる。

——どうすればいい？ どうすれば……？

悩んだ時の常套句を心中で呟き、隼樹は解決策を考える。

しばし考えた後、意を決した顔で言った。

「よしっ……！ 今日のところは帰ろう！」

「そうはいきませんよ、ジュンキ」

不意に聞こえた後ろからの声に、隼樹は体を揺らし、顔を引き攣らせた。

そして、恐る恐る後ろを振り向く。

背後に立つのは、腰に手を当て、呆れた表情で隼樹を見下ろすセイバーだった。

引き攣った笑みで、隼樹は挨拶する。

「や、やあ、セイバー。おはよう。今日も綺麗だね」

「ありがとう、ジュンキ。ですが、いくら褒めたところで、見逃しはしませんよ」

「いや、ソコを何とか……！ って言うか、どうして起こしてくれなかったのさ！？」

「起こしに行きましたよ。そうしたら貴方が、「分かった。先に行つて」と言いましたので」

「え……？ マジで……？ 全然覚えてないんですけど……」

どうやら、二度寝してしまったようだ。

愕然とする隼樹の腕を掴み、セイバーは無理矢理立たせて強制的にロビーに連れて行く。

「ちよっ……セイバー！ タイムタイム！」

「言い訳も制止も聞きません。いずれ顔を合わせるのですから、挨拶くらいはキチンとして下さい」

待つよう訴える隼樹を、セイバーは問答無用でロビーに連れ込んだ。

ロビーで待たされた局員一同の注目が、一斉に隼樹とセイバーに向いた。毅然とした態度でセイバーは、隼樹を一同の前に立たせた。完全に退路を断たれた隼樹は、逃げる事を諦めた。自分に視線を注ぐ一同を見渡して、より一層緊張感が増す。ぎこちない動きで一同と向かい合い、挨拶をした。

「えっと、あの……は、葉谷資隼樹です。その、よろしく願います」

ロビーは、静寂を保っていた。登場の仕方が仕方だったので、皆啞然としているのだ。

——ほら〜！ こういう空気になっちゃったあ〜！

微妙な空気に、隼樹は激しく帰りたい気持ちに駆られた。

始動（後書き）

後書きは……ん、特に無いかな。
感想・ご意見など、気軽にどうぞ。
では。

教導

「もう嫌だ……。俺帰る」

ロビーでの気まずい挨拶を終えた後、隼樹は隊舎の自室で落ち込んでいた。

ただでさえ人前で行動するのは苦手なのに、更に大恥をかく事になったのだ。落ち込むなと言う方が、無理である。

そんなに恥ずかしい思いをしたくなかったのなら、機動六課発足や民間協力者にならなければいいじゃん、と読者諸兄は思いだろう。だが、実は彼なりの理由があるのだ。

今回の隼樹の目的は、ナンバーズの完全救済である。原作では、時空管理局トップの歪んだ正義の犠牲者であるにも関わらず、闘いに敗れた敗者と言う事で、半数近くが拘置所に入れられてしまった。その結末に納得いかない隼樹は、敢えて原作通りの流れに乗る事にした。『闇の書事件』では、はやて達が管理局入りを拒むよう仕向けたが、事件後で冷静になって考えて計画を変更する。機動六課は、地上で自由に動ける部隊だ。ソレを設立させたからこそ、なのは達主人公勢はスカリエッティ一味が関わるレリック事件を捜査する事が出来た。一般人には、万が一の逮捕権はあるが、捜査権は無い。それならば、自然と事件に関われる原作の状況にした方が良く、隼樹は考え直したのだ。

問題は、どうはやてを管理局に入局させるかだったが、意外な展開になった。なんと、はやての方から管理局に入局したいと言いだしたのだ。友達であるのはに協力したいと言う、純粋な想いからだった。最初は反対した守護騎士だったが、後にギル・グレアム提督と和解を果たし、局員全てが悪い人間でない事を理解して、主に付き従った。続いてフェイトやアリシアも、同じような想いから入局を決意して、あれよあれよと言う間に凶らずも隼樹が望む通りに

事が運んだ。

そして、隼樹、セイバー、セイバーオルタの三人は、入局こそしなかったが、『民間協力者』と言う事ではやて達に協力する立場となった。ちなみに、隼樹が持つ『イメージ』は希少技能^{レアスキル}として、二人の騎士王は地球出身の例外的魔導師と言う事で何とかごまかす事に成功した。

そんなこんな色んな事があり、現在に至る。

自室に居る隼樹は、未だロビーでの忌まわしい記憶を引き摺っていた。

「はあ……いつそ死のうかな……」

「ジュンキ。落ち込む気持ちは解りますが、いい加減に元気を出して下さい」

隣に座っているセイバーが、励ましの声をかける。

しかし、なかなか隼樹は立ち直ってくれない。両手で顔を覆い隠し、俯いてしまう。

「だって……あんな恥ずかしいの初めてだったんすよ……?」

「全く、つくづく情けないマスターだな、貴様は」

壁に寄りかかってるセイバーオルタは、呆れてかぶりを振った。

しかし、一転して妖艶に笑みで落ち込む隼樹の前に歩み寄り、屈んで目線を合わせる。訝るセイバーが見てる前で、右手を伸ばして隼樹の顎を指先で掴み、顔を上げさせた。

「なんなら、私が慰めてやってもいいのだぞ?」

「え……? な、慰めるって……?」

「勿論、身体でだ……!」

「待ちなさい、オルタっ!」

セイバーは顔を赤くさせ、半ば反射的に声を上げてオルタを睨んだ。

常識を持つ者からすれば、オルタの言動は少なくとも真昼間に言う事ではない。

「貴女は一体何を考えているのですか!？」

「決まっている。情けないマスターを、私が慰めてやろうと言っているのだ……身体を使ってな」

「ですから、ソコがおかしいのです! 他の慰め方を知らないのですか?」

「何だ? 自信が無いのか?」

オルタは挑発的で妖しげな笑みをセイバーに向け、隼樹に体を寄せた。お互いの体を密着させて、女性特有の胸の膨らみを押し付ける。独特の弾力と柔らかさ、体温で迫るオルタは妖艶な笑みの口から濡れた舌を出して、隼樹の首筋を舐めた。

「ひいっ!？」

いきなり首を舐められ、くすぐったさに隼樹は悲鳴を上げた。

オルタの行為に、セイバーは顔を真っ赤にさせ、ワナワナと体を震わせる。

「ジュンキから離れなさいっ!」

「ならば、力づくで奪ってみせろ」

「上等です!」

挑発を受けて、セイバーは甲冑姿に変化した。

コレには、流石の隼樹も落ち込んでる場合ではなく、慌てて止め

に入る。

「ままま、待て待て！ お前達二人が暴れたら、冗談抜きで隊舎が跡形も無く吹き飛んじゃうから！ 俺なら、もう元気になったから！ 喧嘩は止めようよ！ ね？」

「しかし……！ いえ、マスターがそう言うのでしたら……」
「ふんっ。つまらん」

マスターが仲裁に入り、とりあえず両者は矛を収めた。
二人の衝突を防げて、隼樹は本気で心底安心した。

「ん？ 何だアレは？」

ふとオルタの目が、窓の外の光景を捉えた。
隼樹とセイバーも見ると、外の海上スペースに廃墟があった。

＊

海上にある空間シュミレーターで、新人フォワード陣の訓練が行われていた。

ガジェット・ドローンと呼ばれる自律型機械兵を相手にした訓練で、リアリティの高い廃墟が舞台となっている。相手のガジェットには、アンチ・マギリング・フィールドAMFと呼ばれる特殊なフィールドを張る。これは、魔力結合を妨害して、魔法効果を打ち消すモノだ。魔法を駆使して闘う魔導師にとっては、厄介なフィールドで、セイバーの対魔力に似ている。

訓練に挑むのは、青髪の少女のスバル・ナカジマ、オレンジ髪の少女のティアナ・ランスター、赤髪の少年のエリオ・モンディアル、

ピンク色の髪をした女の子のキャロ・ル・ルシエの四人のチームだ。皆まだ新人だが、才能に溢れている将来有望な魔導師達だ。厄介なAMFに苦戦するものの、ティアナの指揮の下、コンビネーションでガジェットを撃破していった。一発の破壊力があるスバルは接近戦で挑ませ、エリオは得意のスピードを活かして反撃の隙を与えず、キャロは召喚魔法で鎖を出して相手の動きを封じたりとフォローを行い、ティアナは『多重弾核射撃』と呼ばれる魔力の外殻で弾丸を覆って放つ魔法でAMFを突き破り、ガジェット本体の装甲を貫いていく。メンバーの能力を活かしたティアナの戦略で、見事に全機破壊する事が出来た。

新人四人の活躍を、教導官のなのはとシャリオ・フィニーノ——通称・シャリーと呼ばれる眼鏡をかけた女性局員の二人が、一つの廃ビルの上から一部始終を見ていた。

新人とは思えない活躍に、シャリーは感嘆する。

「わゝ、凄い！ 全機撃破……！」

「うん。初めての訓練にしては、皆いい感じだね」

なのはも、満足げに頷いた。

「なのは」

不意に後ろから名前を呼ばれ、なのはは振り返った。

自分と呼んだのはシャリーではなく、いつの間にか屋上に現れたセイバー、オルタ、隼樹の三人だった。

「はええっ!？」

突然、隣に現れた三人に、シャリーは驚きの声を上げた。

一方、なのはは特に驚きもせず、落ち着いた様子で話しかけた。

「セイバーさん、セイバーオルタさん、それに隼樹さんも。どうしたんですか？」

「窓から、先ほどは見えなかった廃墟を目にしたので」

「ああ、そうでしたか。ココは、空間シュミレーターと行って、環境を自由に設定してリアルティの高い立体映像を作って訓練する場所なんです」

訪れた理由を述べたセイバー達に、なのはが場所の説明をした。

訓練と聞き、僅かにオルタの眉毛がピクリと動いた。

「つまり、今訓練を行っていると言う訳だな」

「はい。あ、でも丁度ついさっき終わったところです」

なのはが周囲に出してるディスプレイに、視線を向けた。

画面には、無事に訓練課題をクリアした新人四人が、喜び合っている様子が映っている。

「訓練内容は、どのような感じなのですか？」

「さっき終えたのは、ガジェットを相手にした模擬戦闘です。この後、しばらくは基礎をみっちり固めて、個々の能力を高めていこうと思っています」

「基礎、ですか……」

今後の訓練予定を聞いたセイバーは、怪訝そうに呟いた。

基礎固めの目的は、おそらくフォワード四人の基本能力を底上げして、危険な目に遭わせないようにしたいのだろう。しかし、聞けばティアナとスバルは、訓練学校で一通りの訓練は既に受けており、エリオとキャロも保護者であるフェイトの下でそれなりに力ちからを付けている。実際に、四人は自分達の力だけでガジェットを全て破壊し

ている。基礎固めを完全否定する気は無いが、それよりも少しでも多く実戦形式の訓練をするべきではないだろうか。

訓練の内容に疑問を抱くセイバーだったが、担当の教導官がなのはである以上、自分が余計な口出しをするべきではないと判断した。しかし、オルタは違った。

「高町」

「何ですか？」

「午後の訓練は、私にやらせろ」

「えっ!？」

発言した本人以外が、一斉に驚きの声を上げた。

マスターである隼樹は、恐る恐ると言った風に訊いた。

「え……? 一体どういう風の吹き回し？」

「なに、最近体を動かしていないからな。鈍らないよう、動かしておこうと思っただけだ」

薄笑いを浮かべるオルタに、なーる、と隼樹は納得した。

それと同時に、新人達が危ないとも思った。温厚なセイバーと違って、オルタは妙に好戦的な気がある。ちゃんと手加減をするだろうが、オルタ一人に任せるのは危険だ。本人には悪いが。

隼樹の心配を他所に、オルタはなのはに教導の件を交渉する。最初は戸惑ったのはだが、高い実力を有し、何よりフェイトの師匠でもあるセイバーの分身のような存在だ。もしかしたら、自分では教えられない事を新人達に教えられるかもしれない。

「分かりました。それじゃあ、セイバーオルタさん、よろしく願います」

「ああ、任せておけ」

答えるオルタは、ニヤリと口元を歪めて笑った。

ソレを見た瞬間、シャーリーと隼樹は嫌な予感がして顔を引き攣らせた。オルタに背中を向け、声を潜めて囁き合う。

「あの、隼樹さん。彼女、大丈夫なんですか？」

「いや、大丈夫だと思いたいですけど……。うーん、やっぱり不安だ」

不安が拭えない隼樹は、一つ対策を起用する事にした。

「セイバー。セイバーも一緒に参加してくれない？」

「私ですか？」

「お願い……！」

必死に頼み込む隼樹の様子から、心情を察したセイバーは頷いた。

「分かりました。オルタが無茶をしないよう、見張ります」

「ありがとう」

こうして、セイバーとオルタの二強英霊サーヴァントが訓練の教導をする事になった。

＊

午前の訓練を終え、休憩と昼食を済ませた後、午後の訓練の時間となった。

新人四人は訓練用の服に着替え、空間シュミレーターに集まっている。環境は午前と同じく廃墟で、体力と魔力を回復させ、起動し

たデバイスも構えて準備万端だ。

そんな一同の前に立つ臨時教導官は、騎士甲冑を纏ったオルタとセイバーの二人だ。

二人の噂はフォワード四人も聞いてるので、午前の訓練以上に緊張した様子をしている。

固まる一同の顔を見渡して、オルタは口を開いた。

「さて、訓練を始める前に、貴様等に確認したい事がある。青髪の貴様……！」

「は、はいっ！」

指名されたのは、短い青髪でボーイツシュな容姿をした少女のスバルだった。少し上ずった声で返事をした。威圧的な雰囲気放つオルタを前にしてるのだから、無理も無い。

ナチュラルに威圧感を放っているオルタに、居合わせてるセイバーは早くも眉根にシワを寄せた。

そんな周りの気疲れなど意に介さず、オルタは一つ問い掛けた。

「貴様等は基本四人一組のチームで闘うようだが、チームワークの意味を知っているか？」

「え……ええっと……」

いきなりの質問に取り乱すも、何とかスバルは答える。

「はいっ……！ チームワークとは、チームの皆が力を合わせて一丸となって立ち向かう事です！」

訓練校でも、スバルとティアナは教導官からそう教わった。今でも、ソレが正しいと思っている。

しかし、答えを聞いたオルタは、皮肉げに笑い、衝撃の言葉を言

い放つ。

「ふっ……！　やはりな……そんな考えでは、貴様等全員、死ぬな
っ……！　間違いなくっ……！」

「ええっ……！？」

訓練校での教えを完全否定され、スバルとティアナは激しく動揺した。

エリオとキャロも、それなりに驚き、目を丸くしている。

その時、たまりかねてセイバーが口を挟んだ。

「オルタ！　いくら何でも直球過ぎます！」

「だが、私は間違った事は言っていない。そうだろうか？」

オルタの問いに、セイバーは押し黙ってしまう。

言葉は選ぶべきだが、本質は間違っていない。だから反論出来なかった。

それからオルタは、動揺収まらず、チームワークの意味について悩むフォワード四人に言った。

「とりあえず、“真のチームワーク”の意味は頭の片隅にでも置いておけ。

早速、訓練を始めるが……内容は、私が相手をする四対一で行う実戦形式の模擬戦だ……！　その際、私は貴様等を“殺す気”でかかる……！　だから貴様等も、本気で、必死になって、全力で生き残るよう動け……！　相手を倒そうなどと考えるな……とにかく、生き残る事だけを考えろ……！　いいな？」

笑みを浮かべたオルタを見て、フォワード一同は背筋に悪寒を感じた。

今まで感じた事が無い本物の“殺気”と“命の危険”だった。周囲の空気が下がり、冷や汗を流し、恐れを抱いた途端に足は震えだす。

凍りつく一同を前に、オルタは妖しくも恐ろしい笑顔で黒い約束クスカリパーされた勝利の剣を構える。

「さあ、始めるぞ……！」

冷徹な声で、訓練開始の合図をした。

自分（前書き）

言い忘れてました。

リインフォースが生存してるので、本来彼女の消滅後に二世として生まれるツヴァイは登場しません。

ツヴァイファンの皆さん、すみません！

自分

オルタの実戦形式の訓練は、フォワード四人にとって地獄の時間だった。

混じりっ気なしの本気の殺気を当てながら、迫りくるオルタは四人の目には悪魔か戦鬼せんきに見えていた。一応攻撃の際には手加減されてるが、それでも容易にアスファルトの地面を斬り、ビルの壁を破壊し、凄まじい剣圧を放っていた。想像を超えた威力を誇る凶悪な刃に、コレで本当に手加減してるのか、と疑問に思うのも一瞬で、仰天すると同時に圧倒的恐怖を憶える。

ティアナが牽制で放った魔力弾は、オルタの高い対魔力で簡単に掻き消されてしまう。ガジェットのアMFを貫通した多重弾核も撃ったが、通常魔力弾と同様に無効化されてしまい、激しく動揺した。その他にも、全員が一通りの魔法を繰り出したが、全て対魔力の前に無効化されてしまった。魔導師の武器である魔法を封じられては、とてもじゃないが勝ち目は無い。

ティアナとスバルは、機動六課に訪れる前に陸士386部隊に所属して、突入隊フォワードとして危険な任務も、それなりにこなしてきた。しかし、今行ってる模擬戦は、ソレ等がお遊戯のように思える程に過酷且つ危険な状況で、まるで別物だった。

自分達の力が一切通用しないと悟って理解したフォワードの四人は、指示された通り“生き残る”事だけに全力を注ぎ出した。初めて感じる“迫りくる死の恐怖”を切り抜ける為に、四人は知恵を絞り、魔力を最後の一滴まで使いつくす。

最初は様子見をしていたセイバーだったが、オルタが過剰な攻撃を仕掛けそうになった時は、すかさず止めに入った。怪我をしない“ままごと訓練”など生温いが、万が一にも戦闘不能状態にさせる訳にもいかない。

時折セイバーが止めに入りつつ、午後の地獄模擬戦は続けられた。

その様子を、隼樹、なのは、フェイト、アリシア、ヴィータの五人は、心臓をハラハラドキドキしながら見守っていた。

「容赦ねーな、セイバーオルタ……！ セイバーを参加させといて、ホント正解だったよ……！」

「ああ、ああ……！ エリオ！ キャロ！」

二人の保護者であり、過保護な面があるフェイトは、もう気が気じゃなかった。心配し過ぎて、挙動不審になっている。

そんな彼女を、姉のアリシアが落ち着かせようとする。

「フェイト、落ち着いて！ セイバーが付いてるんだから、大丈夫だよ！」

両肩を掴んで、耳元で声をかける。

アリシア・テストアロッサも妹と共に入局して、二等陸士として機動六課に所属している。魔法の才能はフェイトより劣るが、それでもランクは陸戦AAAと言う高い実力を備えている。

取り乱すフェイトと宥めるアリシアの姉妹のやり取りを隣に、なのはも苦笑していた。

「ううー！ セイバーオルタさん、過激過^{かげき}ぎるよ……！」

闘いの厳しさや、戦場においての命の危険性を教える事自体は、なのはも反対する気は無い。

しかし、物事には順序と言うモノがあり、いきなり過激過ぎる地獄模擬戦は、新人の四人には早すぎるように思えた。だが、今の教官はオルタであり、ソレを許したのは他でもないなのは自身だ。故に、意見出来ず、ただ見守る事しか出来ずにいた。

悪魔的かつリアル鬼ごっこ的な模擬戦は、オルタが終了宣言をす

るまで続けると言う、何ともアバウトな決まりになっている。しかも、手加減していても実力差があり過ぎて、オルタが一方的に新人四人を追い詰める戦況だ。傍から見たら、リンチと捉われかねない光景である。

結局、フォワード四人は、全員がオルタに撃墜されてアウトとなった。魔力も体力も全て使い果たし、疲労困憊の状態で地面に倒れている。まだ恐怖が抜けきれず、体は小刻みに震えてる。仰向けになった一同の視界には、夕焼け空が広がっていた。

疲れ切った一同を見下ろすオルタには、全く疲労の色が見えない。汗もかかず、呼吸も全く乱れてないどころか、かすり傷一つ付いていなかった。

「まあ、初めの内はこんなものだろう」

オルタが見下ろす先で、フォワード四人は、切れ切れに呟く。

「し……死ぬ……！ 死ん、じゃ、う……！」

「な、なのは、さんの……訓練も、キツかった、けど……！ セイ、バー……オルタ、さんの……もう、次元が、違う……！」

「キャ……キャロ……。大丈夫、夫……？」

「う、うん……」

激しく呼吸を乱す四人は、もはや喋る事すら辛くなっていた。特にまだ若過ぎる上に女の子のキャロは、一言返すので精一杯の状態だ。

「皆さん、よく頑張りましたね」

立ち上がる事すら出来ない程に疲労した四人を、セイバーは労った。

その一言が、心身ともに疲れ切った四人の心中に、沁み渡っている。たった一言で、これ程嬉しく思ったのは、初めてだった。しかし、そんなフォワード一同に、オルタから戦慄の言葉が告げられる。

「今日のところは終わりだが、これから午後の訓練はほぼ全て私との実戦形式の模擬戦だ。覚悟しておけ……！」

「ええええええええええええっ……！？」

衝撃の予定を知らされ、フォワード四人は最後の力を振り絞って絶望の声を上げた。キャロはもう限界に達したようで、喉を枯らして激しく咽出す。

「待ちなさい、オルタ！」

これには、流石のセイバーも我慢出来ずに声を上げた。

「いくらなんでも、毎日貴女と訓練をしていては、新人達の身が持たない。それに、いつ出勤するか解らないのですよ？　せめて一二日空けるか、それが出来なければ、代わりに私が彼女達の相手をお願いします」

「ふむ……」

聞いたオルタは、セイバーの意見を一蹴したりせず、顎に手を添えて考え込んだ。

そして、この時の新人四人の心中は一つ。

——セイバーさん！ 私達を救ってくださいっ！

救世主に見えるセイバーの意見が通る事を、必死に、そして心を一つにして切に願う。

ややあって、オルタは口を開いた。

「いいだろう。ならば、たまに休日を含みながら貴様と私で交代してやる事にしよう。明日の新人達の相手は、貴様がやるのだぞ？」
「分かりました」

——セイバーさん、ありがとうございますっ！

フォワード四人は、心中にお礼を良い、快哉を叫んだ。明日の休みは取れなかったが、連続でオルタの相手をすると言う最悪の展開だけは免れた。

屋上から見守っていた隼樹達は、フォワード四人が無事に訓練を終えた事に、とりあえず安堵した。

＊

訓練初日から始まった、『騎士王様によるスパルタを超えた超スパルタ模擬戦と言うか、コレただの新人イジメじゃね？ 的訓練』は、たまに休みを含みながらほぼ毎日続けられた。

午後の訓練は、セイバーとオルタの交代で行われる本格実戦形式の模擬戦で、新人達がやる事は基本的には変わらない。とにかく、生き延びる事に全力を尽くす。

オルタ程酷くは無いが、普段は温厚なセイバーも訓練となれば、殺気をぶつけて襲い掛かってきた。対するフォワード四人も、最初は死の恐怖に怯えて体が竦み、動けなくなってしまいう事もあった。だが、訓練を続けていく内に、怯えながらも生き延びる道を模索するようになり、また行動も起こすようになっていった。

射撃魔法を専門にするティアナは、迫りくる相手の顔目掛けて魔力弾を発射して、時間稼ぎの目くらましを作る。エリオとスバルは得意の機動力を活かして、ティアナとキャロをフォローするように

なった。キャロは使役竜のフリードリヒの火炎を使い、ティアナも動き回り、相手の動きや仲間達の状況を観ながら指示を出す。色々と工夫を凝らし、自分の持てる力を最大限に発揮させて地獄の時間を生き抜いていく。

なのはの訓練で基礎を固め、セイバーとオルタによる模擬戦で実戦の恐さを体験しながら実力を上げていった。

当然、そんな激しい訓練にデバイスは耐えられず、実戦用デバイスに切り替える事となった。予定よりデバイスチェンジの時期が早まったが、構わず訓練は続けられた。

＊

そして、地獄訓練が続いて数日が経った。

フォワードの四人は、最初の頃より大分恐れで動きが鈍らなくなり、撃墜されるまでの時間を伸ばしていた。訓練の空間も廃墟や荒野、森林と変えていった様々な場所に対応出来るようになっていく。昼食を済ませて少し休み、午後の訓練に行こうとした時だった。隊舎内で、アラームが鳴り響いた。山岳地帯を走るリニアールでレリックらしき物とガジェットの襲撃を確認して、出動命令が出されたのだ。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人にとって初実戦任務だ。

「皆！ いけるね？」

「はいっ！」

なのはの声に、フォワード四人は力強く答えた。

前日はセイバー達による訓練は休みだったので、体力も魔力も充分に回復している。出動には問題無い。

ふとフォワードの四人は、出動の見送りにきたセイバーとオルタを見つけた。小さく頷くセイバーとオルタに、フォワード四人は敬礼をした。

そして、初出動した。

＊

パイロットを務めるヴァイス・グランセニックのヘリで、なのは達を乗せたヘリは山岳地帯を目指す。フェイトは別件で外に出ていて、飛行して現場に駆け付けるそうだ。新人達の実力を試すと言う事もあり、副隊長であるシグナムとヴァイタは欠員している。

航空型のガジェットが多く接近しており、空の敵はなのはとフェイトの二人が殲滅する事になった。フォワードの四人は、直接リニアルールに移り、車内のガジェットを破壊しつつレリックを確保する事が役目だ。

不意に、スバルが口を開いた。

「何か、あんまり緊張しないね」

「そうですね」

隣に座ってるエリオが、頷いた。

二人だけでなく、ティアナとキャロも初の実戦だと言うのに、不思議とあまり緊張していなかった。いや、実戦に挑む怯えや不安が少ない、と言った方が正しいか。セイバーとオルタの二強による、過激な模擬戦を受け続けてきた影響だろう。

しかし、だからと言って気を抜いてはいけない。

そう思ったティアナが、二人に注意する。

「アンタ達、緊張し過ぎないのはいいいけど、緊張感を持ってなさいよ」

「ご、ごめん、ティア」

「そ、そうですよね。セイバーさん達の訓練でも、ずっとそうしてきましたんですから」

スバルとエリオは素直に謝り、セイバー達との訓練の体験を思い出した。

気を引き締め、任務に挑む緊張感を持つ。

そして、ヘリ後方のメインハッチが開かれた。

「じゃあ、先に出て空の敵は引き受けるから、皆は列車をお願いね！」

「はいっ！」

フォワード四人の迷いや恐れが無い返事を聞き、なのはは安心して空に飛び降りた。そして、空中でセットアップしてバリアジャケットを身に纏い、レイジングハートを構える。飛行魔法で空を舞い、駆け付けたフェイトと二人で航空型のガジェット？型殲滅に動く。

一方、なのは達がガジェットの相手をしてるお陰で、ヘリは無事に降下ポイントに着いた。フォワードの四人は、なのはのように空中ではバリアジャケットを展開せず、ヘリの中で行った。コレも、安全確実に戦闘準備を整える為だ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「行きますっ！」

まずは、スバルとティアナが先行してリニアレールの上に着地した。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「行きますっ！」

続いて、エリオとキャロ、それにフリードも無事に列車に降りた。全員が着地してすぐに、車内に潜り込んでガジェットが動き出す。ガジェット？型の黄色いレンズから光線が放たれ、天井を破って表に出てきた。

その時には、既にティアナが拳銃型デバイス『クロスミラージュ』を構え、射撃体勢に入って待ち構えていた。

「シュートっ！」

オレンジ色の魔力弾が発射され、AMFを貫き、そのままガジェットの装甲を貫通して破壊した。

畳みかけるように、スバルがローラーブーツ型デバイス『マツハキヤリバー』で突っ込み、空いた穴から車内に入り、籠手型デバイス『リボルバーナックル』の突きでガジェットを一撃粉碎する。初陣の緊張による動きの鈍りも見られず、次々とガジェットを破壊していく。

スターズとライトニングは、それぞれ前方車両と後方車両に分かれ、挟み込むように突き進む。

ティアナとスバルは、前方車両から制圧しにかかった。相手のガジェットは、力で劣る分は数に物を言わせて襲い掛かってくる。

——私が道を作るんだっ！

後方のティアナの援護射撃を受けながら、スバルは敵に突っ込んだ。

「リボルバーシュート！」

リボルバーナックルのスピナーを高速回転させ、加速させた衝撃波を放つ。

強力な衝撃波は、眼前に立ち塞がるガジェットの装甲をひしゃげ、本体を破壊した。ついでに、その先にある列車の扉も壊して道を開いた。

一方、後方から攻めるエリオとキャロのコンビの前に、大型のガジェット？型が立ち塞がった。上部から太いアームを伸ばして、攻撃してくる。ソレをエリオは、得意の高速移動でかわし、一気に懷に潜り込む。槍型デバイス『ストラーダ』の刃に魔力変換させた電撃を付与させ、ボディを下から斬り上げるように振り上げた。が、装甲が思った以上に硬く、切り裂けない。刃と装甲の間で、激しい火花を散らせる。

「くっ……！」

苦戦するエリオの前で、ガジェットは強力なAMFを展開させる。効果が強く、間近のエリオの電撃は掻き消されてしまった。

「エリオ君！」

戦況が悪い流れに傾いてる事に気付き、キャロは考える。

——私が何とかしなきゃ！

エリオが敵を押さえてる間に、キャロは車内を見回し、傍で飛んでるフリードを見る。

そして、一つの手段を思い付き、実行を決意する。魔力を高めてAMFに抗い、フリードに指示を出す。

「フリード！ 天井に向けてブラストフレア！」

「きゅく〜！」

フリードは開いた口に火炎を溜め、天井に向けて放つ。火炎の直撃を受け、天井に大穴が空いて空が見えるようになる。

「エリオ君！ 一旦下がって！」

「分かった！」

キャロの指示に従い、エリオはガジェットから離れて大穴から列車の屋根に移った。

先にキャロは屋根に居て、足下にピンク色の魔法陣を展開している。何か魔法を仕掛けるつもりだ。両手にはめられたグローブ型デバイス『ケリュケイオン』の甲部分の球体が、強い輝きを発する。

「竜魂召喚っ！」

魔法の発動と同時に、フリードの小さな体が光に包まれた。

光が収まると、中から現れたのは巨大な白い竜だった。成人よりも遙かに大きな巨体を誇る白い竜は、キャロの魔法によって本来の姿に変身したフリードである。セイバー達との命懸けの訓練の中で、竜を制御する力を得ていたのだ。

フリードの赤い眼は、車内に居るガジェット？型を睨んだ。

「フリード！ ブラストフレア！」

グオオオオオオオオオオオオ！

巨体に見合った野太い雄叫びを響かせ、フリードは口に火炎を溜める。

そして、ガジェットに向けて放射した。オレンジ色の火炎は、大型ガジェットのボディを軽く飲み込んだ。AMFで防ぐので精一杯

のようで、反撃してこない。ソレを見たエリオは、好機と見て動く。

――僕が決めて終わらせるっ！

再び槍先の刃に電撃を付与させ、重力と振り下ろす勢いと腕力を乗せ、ガジェットに斬りかかる。今度はAMFを破り、しかも火炎の熱で装甲が溶けて脆くなり、ストラーダの刃が通った。自分よりも大きな機体を誇るガジェットを、上から真っ二つに両断する。断面で放電を起こし、機体は爆発した。

「エリオ君！」

喜びと安心から、キャロは笑顔で声を上げた。

車両内と外のガジェットは全て殲滅され、レリックもスターズのスバル達が確保した。コントロールも取り戻して、車両を止める事も出来て、無事に任務は完了する。

＊

同時刻のとあるラボ。

一人の男が、広々とした研究室で、リニアレールでの機動六課の活躍を眺めていた。白衣を着た男は、ジェイル・スカリエッティ。広域指名手配されている違法研究者で次元犯罪者だ。彼が眺めているモニターには、今の機動六課の戦闘データが表示されている。

そして、真横には小型のディスプレイが展開しており、一人の女性映っていた。ウェーブのかかった紫色をした長髪の女性は、戦闘機人？1のウーノだった。

『ドクター。追撃のガジェットを送りますか？』

「いや、止めておこう。レリックは惜しいが、機動六課の戦闘デー

タが録れただけで、良しとしよう」

ウーノに答えたスカリエッティは、大型モニターに顔を戻した。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材が揃っている上に……」

一旦言葉を切り、映像を切り替える。映し出されたのは、フェイトとエリオだった。

顔の笑みを深め、スカリエッティは言葉を続ける。

「生きて動いている『プロジェクトF』の残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……！」

しかし、出来る事なら、彼等の戦闘も観戦したかったね」

また画面を切り替え、別の人物が映し出される。大型モニターに並ぶのは、セイバー、セイバーオルタ、そして隼樹の三人である。前の二人は恰好よく剣の構えを決めているが、何故か隼樹だけ漫画雑誌を読んでいる姿だった。

小型ディスプレイに映るウーノが、口を開いた。

『今回は、初出勤で新人達の実力を試す機会であつたらしく、三人は同行なさらなかったようです』

「ふむ……。また機会があるだろうとは言え、やはり残念だね。ミッドチルダの魔導師や魔法とは異質の力を有する三人を、是非この手で隅々まで調べたいものだよ……！」

モニターに映る三人の顔を見て、スカリエッティは不気味な笑みを一層深めた。

＊

無事に任務を終えた一行は、機動六課隊舎に帰還した。帰ってきたスバル達を出迎えたのは、セイバーだった。先頭に居たスバルが、セイバーに気付いた。

「あ、セイバーさん」

「お疲れ様です。無事に任務を終えて、何よりです」

隊舎に残っていたセイバーも、管制室の画面で様子を見ていた。

「はい！ これもなのはさんや、セイバーさん達の教導のお陰です！」

初任務から帰ったばかりだと言うのに、スバルは元気だった。

そんな相棒にティアナは半ば呆れ顔で笑い、エリオとキャロも笑顔を向かい合わせる。

和やかな雰囲気で、セイバーは唐突に言った。

「無事に任務を果たせたと言う事は、皆も“真のチームワーク”を理解したようですね」

「え……？」

セイバーの言葉に、フォワード四人は意表を衝かれたように呆けた顔になる。

——そう言えば、セイバーオルタさんが言ってような。新人達の後ろに立つなのは、彼女の言葉を思い出す。するとセイバーは、メンバーの中からキャロを指名した。

「では、キャラ。真のチームワークについて、貴女の答えをどうぞ」
「えっ……!？」 あの……その……」

急に話を振られ、キャラはどう答えればいいのか解らず、口ごもってしまう。

他のメンバーも答えに窮する中、セイバーは無言で答えを促す。
やがて、キャラは静かに口を開いた。

「えっと……実は、その……私、訓練の時も、今日の任務の時も、チームワークの話を忘れてました……。その……“皆で協力する”とか、あんまり考えなくて……」

それよりも考えてたのは、“私が何とかしなきゃ”とか“私がエリオ君を護らなきゃ”……そんな事ばかりで……」

キャラの言葉に、他の三人も心中で同感と頷いていた。
皆、キャラと同じ考えだったのだ。

そして、キャラの答えを聞いたセイバーは、満足そうに笑った。

「キャラ、正解です」

「えっ!？」

答えたキャラ本人が、驚きの声を上げた。まさか、合っていると
は思わなかったのだ。

スバル達やなのはとフェイトも、意外そうな顔をしていた。
驚く一同に、セイバーは説明した。

「“チームワーク”と聞くと、殆どの人は「皆で力を合わせて立ち向かう」と答えます。ですが、ソレはオルタが言うように間違った認識です。」

“真のチームワーク”とは、『皆が』では無く『自分が』なのです！ 『私が』『僕が』『俺が』と言う意識を全員が持って挑む事が、個々の能力を高めのです。皆が力を合わせるとは、聞こえはいですが、それではただの慣れ合いに終わってしまう。助け合うのではなく、『自分が』助けるんです！

そして、コレはチームに限った事ではありません。今は四人一組、二人一組で闘っていますが、いずれ遅かれ早かれ一人で闘う時が来ます。そんな局面を迎えれば、自分一人だけで頼れる者など他には居ません。だからこそ、『自分が』と言う強い意識が必要なのです。自分の力一つで、戦局は変えられるのですから。

どうか忘れないで下さい。『自分がやる』……単独でもチームでも、そういう気持ちで臨めば、諦めずに困難に立ち向かう事が出来ると言う事を……！」

セイバーの説明が終わると、場は静まり返った。

地獄のような訓練で皆を追い詰めたのは、ただ単に殺気や恐怖に慣れる為ではなく、困難で危険な状況で『自分が』と言う意識を根付かせ、真のチームワークを解らせるのが目的だったのだ。

その事に気付いたフォワード四人は、セイバーに頭を下げた。

「セイバーさん、ありがとうございます！」

「いいえ。私はただ説明しただけで、実際に手助けをしたのはオルタです」

「あの……」

なのはの隣に居るフェイトが、控え目に手を上げた。

「そのセイバーオルタは、何処ですか？」

「え……？」

言われてセイバーは、周囲を見回した。

フェイトが指摘した通り、オルタの姿は無かった。管制室で、スバル達の戦闘を見ていた時には、確かに一緒に居たはずだ。

姿が消えたのは、おそらくスバル達が無事に任務を終えたのを確認した後だ。

その時、ハッとセイバーは目を見開いた。

「しまった……！」

「セ、セイバーさん!？」

一同の声も聞かずに、セイバーは慌てて踵を返して隊舎内に駆けこんだ。

階段を駆け上がり、廊下を走り、壁に並ぶ扉の一つを乱暴に開けた。

室内を見て、衝撃の光景をセイバーは目にして固まった。

「セ、セイバー!？」

「チッ……! 思ったよりも早く戻ってきたな」

驚きの声を上げたのはリインフォース、忌々しげに舌打ちしたのはセイバーオルタ。

二人で何をしていたのかと言うと、答えは部屋の主にあった。リインフォースとオルタは、隼樹を挟み込む形で寄り添っていた。セイバーをフォワード陣の出迎えに行かせ、その隙に隼樹の身体を愉しもうと言う魂胆だったのだ。

「セ、セイバー……! いや、あの、これは……!」

マズイ場面を目撃され、隼樹は顔を引き攣らせる。しかし、既に遅かった。

ワナワナと体を震わせ、真っ赤にさせた顔で、セイバーは大噴火した。

「何をしてるんですか、貴女達はアアアアアアアアアアアアアアアア！」

聖剣を手に、騎士王が暴れ回ったのは、また別の話。

自分（後書き）

主人公の出番が少ない？

主人公の活躍が全然無い？

いいんです。だって、隼樹だもの。

教会（前書き）

今回は、あの女性キャラがちよいやばい事に……。うゝん、大丈夫かコレ？

教会

フォワード隊の新人四人は、今日も早朝から訓練に励んでいた。セイバーとオルタの二人から受けた模擬戦と初任務の成功が、良い刺激になったらしい。以前よりも増して、訓練に熱が入っている。基本的には、午前と午後は正規の教導官や上司であるのはやフエイト達が教導するのだが、週に二、三回の割合で騎士王による実戦形式の訓練は続けられる事になった。こういう訓練は、折角覚えた感覚を鈍らせない為にも、続けていく事が大切なのだ。回数が減ったとは言え、訓練の中身は相変わらず殺気をぶつけてくる厳しいモノである。

初任務を終えてからは、個々の能力^{スキル}アップを目的とした個別指導に入った。なのは、フェイト、ヴィータが参加して全体的に訓練はハードになってきた。森林に変化させた空間スペースで訓練に励む一同を、セイバー、オルタ、アリシアの三人が見学していた。時折、見学している彼女達からも、助言が入る時があった。

例えば、こんな感じである。

なのはは、ティアナの能力アップの為に、射撃型の基本思想と技術を徹底的に鍛えようとした。具体的に説明すれば、定位置に立つて、なのはが動かす的を射撃で撃ち落とす訓練である。

チームの中央に立ち、誰よりも早く中長距離を制する。ソレが、自分やティアナのポジションであるセンターガードの役目だとなのはが語った。

しかし、ココで見学していたオルタが口を挟んだ。

「ソレは賢明な態勢では無いな。確かに、チームの中央に立って戦況を見渡して把握する事は大事だ。が、場合によっては、突っ立っている者は狙い撃ちされる標的以外の何者でもない。ランスターは、高町のような砲撃タイプではなく、小回りの利く二丁拳銃が武器だ。

ならば、狙い撃ちを許さないよう動き回り、敵を制するという戦術も叩き込んでおけ」

オルタの指摘を受けて、なのはは自分とティアナの明らかな違いを自覚した。

なのはは一発のある砲撃タイプだが、ティアナは主に手数と小回りで攻める射撃タイプだ。センターガードと言う位置は同じでも、戦闘スタイルが根本からして違う。

ズバズバ遠慮なしに指摘してくるオルタだが、決して間違っっていない。

教官であるなのはも、時折勉強になる時がある。まだ十九歳と言う若さなのだから、完璧に人に物を教えろと言う方が無茶である。寧ろ、ココで間違いや新たな発見が出来る事は、幸いと考えるべきだ。

こんな具合で、隊長陣も新人達も一緒になって訓練に励んでいた。

＊

機動六課で訓練が行われている頃、隼樹は別の場所に居た。

場所は、ミッドチルダ北部ベルカ自治区『聖王教会』大聖堂だ。かなり大きな教会建物で、数多くの次元世界に影響力を持つ何気に凄い組織でもある。

そのデカイ組織の建物の入り口に、隼樹とはやての二人が佇んでいた。連れて来られた隼樹は、目の前に聳え立つ教会の高さに圧巻する。

「いやゝ、しかしデカイなゝ！」

「そやろ？ 私も、初めて来た時は驚いたわ」

横で驚いてる隼樹を、はやては笑って見ていた。

その時、扉が開いて教会の人間が出てきた。入る際に、巡礼用のケープを手渡され、身に纏うよう言われた。何でも、制服や私服では、教会の巡礼者を不安にさせてしまいうらしい。管理局の中——特に地上本部——には、強い権力を持つ教会を嫌って敵視している者も少なくない。そう言った不仲な関係が、起因しているのだろう。

面倒臭いと思いつつも、隼樹は言葉に従って巡礼用ケープを身に纏った。

そして、はやてと案内の職員と共に教会の中に、足を踏み入れた。今回、隼樹がはやてに連れられて聖王教会なんて所に訪れたのは、理由がある。機動六課の設立に貢献して、後ろ盾にもなっている人物に会いに行く為である。はやてとその人物は知り合いなのだが、隼樹はまだ顔を合わせてはいない。六課も発足されて、民間協力者として協力していく関係となって良い機会なので、顔合わせをする事になったのだ。ちなみに、会った事は無いが、隼樹はその人物が誰なのか見当はついていない。

正体は解っているのに、警戒すべき相手で無い事も解っている。だと言うのに、何故か廊下を歩く隼樹は得体の知れない不安を感じていた。ケープの下顔を顰めて、妙な緊張感を抱く。

——何なんだよ……？ 自分でも解らないけど、何か妙な胸騒ぎと言うか……嫌な予感がするんだよね……。

不安を胸に、隼樹はやてと二人で一つの扉の前で立ち止まった。はやてが手を伸ばし、軽く扉にノックをする。

「どうぞ」

扉の向こうから、綺麗な声が返ってきた。

「失礼します」

一言断り、はやてが扉を開ける。部屋の中に入り、ソコでようやくケープを外せた。

先にケープを外したはやてが、室内で待っていた人物と挨拶を交わす。

「久しぶりやな、カリム」

「ええ。いらっしやい、はやて」

明るい二つの声に、ケープを脱ぎ終えた隼樹が顔を向けた。

ソコには、金髪の美少女が居た。長い金髪は腰まで届いて、窓から差し込む光を受けて煌びやかに光沢を放っている。頭には、紫色のリボンをカチューシャ風に付け、黒をベースとした修道服らしき恰好をしていた。陽の光を背にして微笑んでいるからか、聖母のような温かみがある印象を受ける。

——超綺麗じゃん……！

リアルで見るカリムは、かなりの美少女だった。セイバーに勝るとも劣らない容姿で、彼女とはまた違った魅力が感じられる。

隼樹が見惚れていると、カリムが挨拶をしてきた。

「初めまして。聖王教会騎士団の騎士、カリム・グラシアです」

「あ、どうも。初めまして。葉谷資隼樹です」

丁寧なお辞儀をするカリムに対して、隼樹も会釈する。

「立ち話もなんですから、どうぞお掛けになってください」

「ど、どうも」

カリムに促され、隼樹とはやては近くの椅子に腰をかけた。

あまり彼女のような丁寧な対応を受けた事が無いので、隼樹は余

計に緊張していた。

三人が席に着くと、職員がタイミング良く紅茶を運んできてくれた。

テーブルに置かれた紅茶を見て、隼樹は心中にヤバイ、と思った。実は彼、紅茶が苦手なのである。甘い物は好きだが、紅茶独特の甘みがどうしても受け付けないのだ。まあ、しかし、飲めない程に完全に駄目と言う訳でもないの、残すのも悪いと思い、飲む事にした。カリムとはやてが飲んだ後に、自分も一口飲む。うん、やっぱり好きにならない。

「隼樹さん。はやてから聞きましたが、『イメージ』と言うレアスキルをお持ちのようですね」

「ええ、まあ……」

「もし、よろしければこの場で見せていただけないでしょうか？」

ハア、とカリムの要望に隼樹は頷いた。

能力を披露する事になり、何を実体化させるか考える。ややあって、ベタだけどコレかな、と頭の中で一つチョイスした。

無言でテーブルの上に両手を出し、頭の中で出す物を想像する。イメージ

突如、隼樹の両手が光に包まれ、見守るカリムは目を細める。次の瞬間、彼の手に現れたのは、二振りの双剣だった。中華風のデザインが施された白と黒の双剣は、正義の味方を目指した男が愛用していた『干将・莫耶』かんしょう・もくやだ。過去に生み出した時は、剣の重みに苦しんだが、今回はちゃんと事前に『双剣の重みに耐えられる自分』をイメージしていた。

突然、手に剣を出した現象に、カリムは面食らった。

「話には聞いていましたが、本当に何も無い所から物を生み出せるのですね……！ 驚きました。何でも生み出せるのですか？」

「いえ、何でもって訳にはいきませんよ。魔力量を超えた事象は実

現出来ませんし、物も強力過ぎるのは作れませんから。まあ、万能じゃないって事です」

軽く説明をして、隼樹は干将・莫耶を消した。

彼の能力を整理しよう。実現不可能の例は幾つかあり、その中の一つが『無限の剣製』だ。アンリミテッドブレードワークス現実世界を侵食して、術者の心象風景を現す大禁呪。ジュエルシードの魔力では世界を侵食する事は出来ないで、コレは実現不可能。

次に宝具の精製。セイバーが使ってるような超強力な宝具『約束された勝利の剣』は、あまりに高ランク過ぎて、ジュエルシードでは再現し切れない。干将・莫耶のようなある程度ランクが低い物ならば、実体化は可能。

本人も言っていたが、要するに体内にあるジュエルシードの限界を超える現象は起こせない、と言う事だ。一見チートのようなのだが、決して万能ではない。

「それでも、凄い魔法だと私は思います。他の方には、とても真似出来るような事ではありません」

「まあ……そうです、ね……」

お褒めの言葉を頂いた隼樹だったが、あまり素直に喜べなかった。確かに能力に制限はあるが、『イメージ』は凄い。だが、決して“隼樹本人”の能力では無いのも事実。あくまで偶然体内に宿したジュエルシードの力であり、自分が凄い奴だと思った事は一度も無い。

そんな事情があって、他人に褒められても隼樹は素直に喜べずにいた。

紅茶を楽しみながら（約一名除く）、しばらく部屋で雑談をした。

話題は、セイバー達や、その騎士王様コンビにしごかれたフォワードの四人の事など最近起こった出来事だった。

「それじゃあ、そろそろ戻ろうかな。六課の仕事もせなあかんからね」

時計を確認したはやてが、席を立った。

やっと解放される、と隼樹は心中に溜め息をついた。美少女と話が出来るのは悪くは無いが、男が自分だけと思うとどうしても落ち着かなかったのが本音だ。

隼樹も次いで席を立ち、退室前にケープを被ろうと手を伸ばした時だった。

「あつ、ちよつと待って下さい！」

「はい？」

急にカリムに呼び止められ、二人は退室する動きを止めて振り返った。

「はやて。彼と、もう少し話がしたいから、残ってもらっていいかしら？」

「え？ まあ、隼樹さんには特に仕事は無いから、本人さえ良ければ構わんけど……」

「どうでしょうか？」

カリムが尋ねてきたので、隼樹は考える。

断ってもいいのだが、今後の事を考えると無下にするのは良くないかもしれない。まあ、時間もそんなにかからないだろう。

「解りました。俺は別にいいですよ」

「ありがとうございます」

「ほんなら、私は先に戻ってるから」

ケープを被り、はやては先に退室した。

「それで話って……っ!？」

はやての退室を見届け、振り返った時だった。

急にカリムが、隼樹に抱きつき、身を寄せてきたのだ。二人の身長は同じ位なので、彼の真横にカリムの綺麗な顔が添うような形になっている。胸部には、立派に膨らみのある胸が押し当てられていた。

突然の予想外の展開に、隼樹は動揺を禁じ得なかった。一気に顔を赤くさせ、取り乱す。

「は、はあっ……!？　　ちよっ……カリムさん……!？　　な、なな、何して……!？」

「この聖王教会では、過去に男女の關係に堕ちた事が原因で、ある大事件が起きました。その事があり、以後、教会の者は職員同士の恋愛行為が禁止されたのです」

隼樹の取り乱す様を意に介さず、唐突にカリムが教会の事について語り出した。

——な、何言ってるんだ、この人……!？　　何の話をしてるんだ……?　　教会の人間同士の恋愛が原因で起こった大事件……?

混乱する隼樹の頭に、思い当たる事件が一つ浮かび上がった。

——ああっ……!　　もしかして、『聖骸布盗難事件』か……!？　　ドゥーエが教会のシスターに成りすまして、聖骸布の管理を担当してた司祭を誑かして盗ませたって言う……!　　!

隼樹の考えは、当たっていた。

あの事件以降、教会は職員の恋愛を固く禁じる規則を設けた。そんな規則に縛られ、教会内での男女間では見えない壁が出来ていた。しかも、教会の職員であり、上の立場に立つカリムは、気軽に外出する事すら出来ない。つまり出逢いが無い、教会に閉じ込められた箱入り娘状態なのだ。

流石に外出禁止の件までは知らないが、恋愛に縁が無い状態なのは解った。

でも、だからって俺を選ぶか？　と言う気持ちはあった。俺を相手に選ぶなんてどうかしてるぞ、と言うのが隼樹の本音である。

——くそ！　俺が感じてた胸騒ぎは、コレかあ！

「いや……いや、事情は解らなくも無いですけど……」

「私では、ご不満ですか？」

潤んだ涙目で、カリムが迫ってきた。

その可愛さに、ぐう、と隼樹の心は激しく揺れて呻く。

「いやいや、不満とかそういう事じゃなくてですね、相手はちゃんと選びましょうって言ってるんですよ……！　俺は、もう四人の女性と付き合ってるような、その優柔不断と言うか、節操無しと言うか……とにかく、駄目な男なんですよ……！」

「そんな貴方を誘惑してる私は、もっと酷い女です……！」

自分を卑下して引き離そうとする隼樹だったが、相手は更に上を行っていた。

「聖王教会騎士団に身を置く騎士ですが、私はそんな綺麗な女では無いんです……！　隼樹さん……そんな私を、受け入れてくれますか……？」

問い掛けながらカリムは、顔を近付けて迫ってくる。

壁を背にしてる隼樹は、逃げる事も抗う事も出来ずに、徐々に追い詰められていく。鼻と本能を刺激する甘い匂いを纏った美少女の唇が、隼樹の口を塞いだ。柔らかく、張りのある綺麗な唇を受け、隼樹は目を見開いた。

カリムは体を密着させた状態を保ち、キスを続ける。

「ん……！ んん……！」

初めて味わうキスの味に、カリムは夢中になっていた。舌を相手の口内に突っ込み、唾液と舌同士を絡め合う。口の中で淫らな音を鳴らし、口端からは一筋の涎を垂らしている。

隼樹の背中に回した腕は、力を込めて離さないように強く抱き締めている。捕まってる隼樹は、甘い接吻の味と押し付けられる胸の感触、甘い香りに興奮が昂る。いつの間にか、隼樹も抑え切れずにカリムを抱き締めていた。

「んむっ……！ ちゅぽ……はむ……！ んっ……！」

誰かが部屋に入ってくるかも、なんて危機感も抱かず、濃厚なキスを続ける。

同じく興奮状態のカリムも、顔を真っ赤にさせ、息を荒くして、身体を火照らせていた。

ややあって、ようやくカリムは隼樹から顔を離れた。開いた口から濡れた舌を僅かに出し、赤い顔は艶っぽく惚けている。

「コレが……キスの味、ですか……！ 凄く、良かったです……！」

キスの快感を味わい、満足そうにカリムは言った。指で口周りの涎を拭う仕草は色っぽく、とても教会に身を置く聖職者には見えな

い。

「隼樹さん……！ これからも、私の相手をしていただけませんか……？」

「そ、それは……」

興奮冷めやらぬ隼樹は、頭を掻き乱した。
迷ってる素振りを見せると、カリムが迫ってきた。

「ご迷惑でしょうか……？」

僅かに頭を下げ、濡れた瞳での上目遣いを向けてくるカリム。
目の前の美少女の仕草に、隼樹はドキツとなる。見上げる顔の角度、表情、全てが男の本能を刺激して虜にする完璧なポーズだった。
カリムに迫られ、隼樹はより一層激しく頭を掻いた。

「……女ってズルイですよ、カリムさん」

「では……」

「ん……ま、まあ……たまに、なら……」

「ありがとうございます！」

隼樹の同意を得ると、カリムは一転して嬉しそうに笑って抱き付いてきた。

どうも自分は、女からの押しに弱いようだ。

まいったなく、と隼樹は困り顔で力無く頭を掻いた。

＊

カリムの部屋を出た隼樹は、閉じた扉の前で頭を抱え、座り込んだ。
だ。

——何をどうしたら、こうなった……？

屈んで苦悩する隼樹の前に、人影が現れた。

「どうしたんだ？ 大丈夫か？」

「え……？」

降りかかった声を聞いて、隼樹は顔を上げた。

目の前に居たのは、同じくケープを纏った若い男だった。ミッドには珍しい黒髪で、髪型は短く、顔は整ったイケメンだ。

「ああっ……！」

黒髪の男を見た隼樹は、弾かれたように立ち上がった。

「クロノ君じゃないか……！」

「やあ、久しぶりだな、隼樹……！」

相手の男は、クロノ・ハラオウン。現在、時空管理局の次元航行部隊の艦船艦長を務め、提督の地位に着いているエリートだ。元アースラの一員だったエイミィと結婚をして双子の父までしている、隼樹と違ってシッカリ家庭を持った出来る男である。

親しい感じで接してる二人だが、初めて出会った当時は最悪な間柄だった。何せ隼樹は、『原作でフェイトを傷付けた』と言うあんまりにもあんまりな理由で、十年前のジュエルシード事件でクロノをリンチの如くボコボコにしたのだ。その後の『闇の書事件』でも、険悪な関係は変わらずだった。

しかし、後から冷静になって考えた隼樹は、自分の間違いに気付いた。原作でクロノが牽制目的で放った魔力弾でフェイトを傷付け

たのは事実だが、『この世界のクロノ』は、フェイトを傷付けては
いない。隼樹と言うイレギュラーな存在が介入した事で、その場面
が無くなったのだ。つまり、『この世界のクロノ』は何にも悪くな
いのだ。それに原作での彼の行為は、ジュエルシードを身元不明の
魔導師に奪われない為の局員としての当然のモノだった。自分の間
違いに気付いた隼樹は、流石に罪悪感を抱き、クロノに謝罪する事
を決意する。はやてが入局の意を伝える時に、ちょうどクロノも立
ち合っていたので、思い切って彼に謝った。クロノも、捜査のやり
方が強引だった事や柔軟さに欠けていた事を謝り、互いの非を認め
合う。

それから二人は、友好的な関係になり、現在に至る。

「しかし、キミがこんな所に居るなんて珍しいな。何か用でもあつ
たのか？ ソレに何だが、落ち込んでたと言うか、悩んでるように
見えたが……」

「あゝ、ソレは……」

理由を訊かれた隼樹は、カリムとの出来事を打ち明けようか悩ん
だ。

しかし、一人で溜め込むより、親友に話した方が気も少しは楽に
なるかも、と思い、正直に話す事を決意した。

「クロノ君……キミ、口固いよね？」

「僕が真面目なのは知ってるだろう？」

クロノの笑顔を見て、隼樹は改めて話す事を決めた。
他人に聞かれ^{ひと}ないように、とりあえず教会^{ひと}を出る事にした。

聖王教会を出た隼樹は、全てをクロノに話した。

部屋で起こった出来事を話終えると、クロノは難しい顔になった。

「そうか……騎士・カリムがそんな事を……」

「そうなんだよ……」

外に出た二人は、ミッドのとあるファミレスに居た。二人が着いてる奥の席は、他の席と離れた位置にあって他人に会話を聞かれる心配は無い。

話を聞いたクロノは、しばらく考えて意見を言った。

「僕の考えだが、騎士・カリムは誰かに甘えたいんじゃないかな」

「甘えたい？」

「ああ。いくら優れた騎士で理事官とは言え、まだ若い女の子だ。

仕事のプレッシャーもあるだろうし、教会内には特別仲の良い男の友人は居ない。それ以前に、男女関係が厳しい教会内では、頼れる男の友人すら作れない。だからと言って、局員の男に頼る訳にもいかない。聖王教会と管理局は深い関係にあるが、決して友好的では無いからな。局員との付き合いも、万が一公になれば問題になる」

「ソコで白羽の矢が立ったのが、民間協力者とは言え一応民間人の俺……って事なの？」

「まあ、あくまで僕の推測だがね」

しかし、クロノの推測はあながち間違いでも無いように思える。

思い返してみると、部屋で迫ってきたカリムは何処か寂しそうと言うか、辛そうな感じに見えた。

けどなく、と隼樹は頭を掻いた。

「だからって、いきなりキスは無いだろう？」

「確かに、ソレには僕も驚いてるよ。騎士・カリムも、意外と積極的なんだな」

クロノの言葉に、隼樹は一つの懸念を抱いた。自然と声を潜めて、言った。

「ねえ、クロノ君……。まさかとは思うけど……カリムさんが、俺に惚れてる、な〜んて事は無いよね？」

「さあな。いくら僕でも、ソレは推測のしようが無い」

「いっそ否定してくれよう！」

頭を抱え、テーブルの上に突っ伏した。

悩む隼樹の前で、クロノは壁にかかった時計を見て時間を確認した。

「済まない、隼樹。これから仕事があるんだ」

「……ん？ ああ、分かった。いいよ、行ってきた」

「悪いな。騎士・カリムの件だが、セイバー達に殺されないよう気を付けろ、としか言えないな」

「ご忠告ありがとう。仕事頑張ってるね」

「ああ。また何かあったら、連絡してくれ。それじゃあ」

クロノは席を立ち、店を出て行った。

残された隼樹は、すぐに機動六課に帰る気になれず、もう少し一人の時間を過ごそうと思った。

しかし、彼の女難はまだ終わってはいなかった。

＊

時間は少し遡り、所変わってスカリエッティのラボ。

「失礼します、ドクター」
「ん？」

研究室のデスクに座るスカリエッティの前に、秘書であるウーノがやってきた。

「何だね、ウーノ？」

「実は、少しお暇を頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

ほお、とウーノの要望にスカリエッティは意外そうに反応した。彼の知る限り、ウーノが休みを求めてきたのは、今回が初めてだ。普段とは違う彼女の行動に、スカリエッティは少なからず興味を抱いた。

「何か用事でもあるのかね？」

「はい。少し、私用がありました……」

「ふむ……。いいだろう。特に、これと言って急ぎの予定も無いからね。好きにしまえ」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

丁寧に頭を下げ、ウーノは研究室を出て行った。

接触（前書き）

えー、今のところ気楽な感じで執筆出来てます。この調子で続けられたらな、と思います。

接触

人間、誰しも一人になりたい時があるもんだ。

クロノが出て行った後も、隼樹はファミレスに残って注文した料理を待っていた。

椅子に深く腰をかけて、隼樹は溜め息をつく。機動六課が発足されてから、大変な目に遭ってきた。六課発足の挨拶には寝坊して遅刻するわ、セイバーとオルタが新人四人を鍛えるわ、いきなりオルタとリインフォースの二人に襲われ、更に駆け付けて現場を目撃したセイバーが鬼神の如く暴れ出して、本当に酷い目に遭ってきた。セイバーの暴走は、オルタが何とか止めてくれたので被害は最小で済んだ。そして極め付けは、今日のカリムから受けたキスだ。万が一にも、この事がセイバー達の耳に入れば、半殺しは確実となる。ソレを考えただけで、精神的に疲労が溜まる。

いや、今は考えるのを止そう。何も考えず、心を休めようじゃないか。

好きな人達と一緒に過ごす時間も良いが、たまには一人で過ごす時間も大事だ。周りを気遣ったり、周囲の目や反応を気にしなくて済む。妙に開放的な気分になれるのだ。

こうして一人になるのは、本当に久しぶりである。『こっちの世界』に来てからは、セイバーやフェイト達と一緒に行動してきたので、あまり一人でゆっくりしてる時間は無かった。

今日は、そんな貴重な時間を堪能しようじゃないか。

そんな事を考えてると、店員さんが注文した料理を運んできてくれた。テーブルに置かれたのは、チョコレートパフェだった。伝票も置き、失礼します、と店員さんは去っていく。

目の前のチョコレートパフェを見て、隼樹は自然と笑顔になる。パフェと言えば、子供や女子が食べるイメージが強い。それにセイバー達の前でパフェを注文して食べるのは、何か恥ずかしくて勇気

が要る事なのだ。

「ああ、久しぶりのパフェだ……！ 味わって食べよう」

銀色のスプーンを右手に持ち、パフェの天辺に突き刺す。一口分のチョコクリームを掬い、顔に近付ける。

——いただきます……。――

今まさに、開けた口にチョコクリームを入れようとした時だった。

「あの……」

「あ……？」

不意に聞こえた声に、口に入れる寸前で隼樹は手の動きを止めた。自分にかけられた声だと思い、顔を横に向ける。

案の定、隼樹が座ってる席の隣に一人の女性が立っていた。妙齡の綺麗な女性で、ウェーブのかかった紫色の長髪と切れ目な金色の瞳が特徴で、落ち着いた物腰をしている。

目が合った瞬間、隼樹は思わず顔を引き攣らせた。

そんな彼の反応など意に介さず、女性は尋ねる。

「すみません。相席をお願いしても、よろしいでしょうか？」

「え……？」

動きを固めた隼樹は、すぐに返事が出来なかった。

女性に声をかけられた事に、驚いたのではない。問題はソコでは無く、声をかけてきた女性に衝撃を受けたのだ。

予想外の展開に動揺した隼樹は、冷静さを欠いて適切でない答えを返してしまった。

「あ、まあ、はあ」と曖昧な感じだった。

「ありがとうございます」

女性は笑顔でお礼を言うと、テーブルを挟んだ向かいの席に座った。

店員さんがお冷とおしぼりを持って、席にやってきた。女性はメニューを開いて飲み物欄を見て、コーヒーを一つ注文する。その間に隼樹は、後ろを振り向いて店内を確認した。所々に空席が見られ、わざわざ相席を頼むような状態ではない。

注文を聞き終えた店員さんが去ると同時に、隼樹は前に向き直った。向かいの席に座る女性の顔を見て、引き攣った笑みを浮かべる。

——いや……無い無い……！ 絶対に無いっ……！ そりゃあ見た目“あの人”にクリソツだけど、こんな所に来るなんてあり得ないよ。考えられないよ……！

心中で必死に否定するが、ただの現実逃避に過ぎない事を隼樹は解っていた。姿を見間違えるハズは無いし、声も確かに聞き覚えがある。

すると、隼樹の視線に気付いたのか、向かいの女性はクスリと笑った。

「もしかして、私の事をご存じかしら？」

薄笑いを浮かべる女性に問われ、隼樹は困ったように笑う。

向こうの方も人違いでは無いらしく、シラを切るのは無理のようだ。

諦めた隼樹は、恐る恐ると言った風に口を開いた。

「あゝ、違ってたらすみません。……ナンバーズのウーノさん、ですか？」

「ええ、そうよ」

——やっぱいいいイイイイイ!

正解してしまった隼樹は、心中にシャウトした。

彼の前に現れたのは、スカリエッティの造り出した戦闘機人の一人であるウーノだった。原作には無い彼女の行動に、隼樹は動揺を禁じ得なかった。

——何でウーノが、ファミレスなんかに来るんだよ!? そんなシーン、アニメで見た事無いよ! 着てる服もいつもの制服じゃなくて、私服だしさ。いや、しかし、私服姿のウーノも綺麗だな……じゃなくて! 何? コレは、イレギュラーな俺に対するイレギュラーな行動?

予想外の展開に、隼樹は内心で取り乱す。原作通りの流れの時は問題無いのだが、少しでも想定外の場面に出くわすと、すぐに動揺してしまうのが彼の欠点だ。過去の『闇の書事件』でも、防衛プログラムの思わぬ行動に面食らい、危うく世界を滅亡させてしまうところだった。

しかも、敵を前にして一人の状況など初めてなので、緊張感も高まっていた。

湯気が立つ熱いコーヒーを一口飲み、ウーノが言う。

「そう警戒しないでちょうだい。私は別に、貴方と闘いに来た訳ではないわ」

「え?」

「ココに来たのは、私だけで妹達は連れてないわ。それに、私が戦闘タイプで無い戦闘機人である事も、貴方は解ってるんじゃないかしら?」

「う……!」

どうやらウーノは、隼樹の存在だけでなく、彼が自分達の事をある程度把握していると踏んでるらしい。

それもそのハズ、過去のドゥーエの諜報活動によって、『闇の書事件』で隼樹が管理局のグレアムの行動を読んでいた、まるで先の展開が解っているかのような行動の報告は受けている。それならば、ナンバーズの事も知っている可能性は充分に考えられる。

敵側である上に、美人のウーノを前にして隼樹は委縮した様子で尋ねた。

「えっと……じゃあ、その、何の御用で……？」

「少し貴方と話をしに来たのよ」

美しい笑顔を作り、一拍間を置いてウーノは言った。

「貴方、私達の仲間になる気はないかしら？」

「えっ……！？」

予想だになかった言葉に、隼樹は目を丸くした。

「仲間って……俺が、ウーノさん達の、ですか……？」

「ええ、そうよ。ドクターはセイバー達だけでなく、貴方にも興味を抱いているわ。それに貴方は民間協力者として機動六課と協力関係にあるけれど、管理局の為に協力してる訳では無い。もし、貴方にその気があれば、ドクターだけでなく私達も喜んで歓迎するわよ」

妙に穏やかな声音で、ウーノは隼樹を勧誘する。

誘われた隼樹は、驚きつつも思考を働かせた。確かに、科学者のスカリエッティから見れば、他の魔導師とは違う魔法を使う隼樹は研究対象となる存在だろう。加えて、セイバーとセイバーオルタと言う二つの超強力な魔導師の天敵となる戦力を持っている。その力を欲し、調べたいと思うのがスカリエッティの狙いだと思われる。

自分なりに考えをまとめた隼樹は、答えを言うべく静かに口を開

いた。

「その……折角のお誘いですけど……すみません。お断りさせていただきます」

「そう、残念だわ」

勧誘を断られたウーノは、言葉とは裏腹にあまり落胆した様子は見られない。

「断られたものは仕方ないけど、よければ理由を教えてくださいませんか？」

「理由、ですか？」

「ええ。貴方が断った理由は、おそらく機動六課にあると私は睨んでるわ。管理局には協力的では無い貴方が、私の勧誘を断るとしたらソレしか無いわ。六課に居る子達を護るため？ それとも裏切りたくないからかしら？」

ウーノから断りの理由を問われ、隼樹は答えに窮した。

実は、ウーノがわざわざ休みを取ってまで隼樹に接触したのは、コッチが本当の目的だった。誘いを断られるのは、予想はついていた。それよりも、彼の目的が知りたかった。管理局に協力的でも無く、世界の平和の為でも無いのに、機動六課に協力しているのは何が目的なのか。そしてソレは、こちらの勧誘を断る理由と関係があるのではないだろうか、と踏んでいる。

コーヒーを飲みほしたウーノは、静かに答えを待った。

ややあって、隼樹は答えた。

「まあ、セイバーやフェイト達を裏切りたくないってのもありますけど……。一番の理由はやっぱり、『自分の為』ですかね」

「自分の為？」

「はい。その、詳しくは言えないんですけど、この世界で助けたい人達がいます……その為には、機動六課に居る方が都合が良いと言うか、寧ろ機動六課に居ないと出来ない事で……」

「ソレがどうして、『自分の為』なんですか？」

怪訝そうに尋ねるウーノに、隼樹は言う。

「誰かを助きたい、何かをやりたい……こういうのって、結局は全部自分の願望から生まれてるんですよ。他人の為とか言っても、その中身は『他人の役に立ちたい』って言う自分の願望で、突き詰めればどんな事でも『自分の為』なんです。俺に限らないで、皆自分の欲望を原動力に動いてるんです。私利私欲って、よく悪人に対して使われますけど……俺から言わせれば皆そうですよ。」

だから、俺が『助けたい人達を助けたい』って言う目的も、結局は自己満足なんです」

隼樹の話聞いて、ウーノは考え込む。

欲望を原動力に動く、とはスカリエッティと同じ動機である。管理局の最高評議会によって、『無限の欲望』アンリミテッド・デザイアとして生み出され、自身の尽きる事の無い欲望に忠実に従う。

しかし、ソレはスカリエッティに限った事では無い。隼樹の言う通り、人間は己の欲望を満たす為に動いている。そして、その違いは世間にとって“善”か“悪”のどちらに分類されるかでしかない。スカリエッティの場合は、出生の経緯もあるが、“悪”に分類される。なんと理不尽な事だろう。

善悪の違いこそあれど、隼樹はスカリエッティや自分達と同じく欲望に忠実に従って動いている。いや、欲望に忠実であると、理解と同時に自覚していると解った。やはり、敵対するには惜しい。

とりあえず、ウーノが知リたかった事は一応聞けた。相手は誰かは解らないが、隼樹は助けたい人達の為に機動六課に協力してるら

しい。

「自己満足、ねえ……。分かりました。でも、仲間になれないのは本当に残念だわ。貴方とは、理解し合えそうだと思ってましたから」「すいません」

頭を下げて謝った時、隼樹は衝撃の物を目にした。

隼樹が頼んだチョコレートパフェが、変わり果てた姿になっていた。ウーノと話してる間に、溶けてドロドロになってしまったのだ。

「えー!? うーわ、マジかよー!? 最悪……!」

ショックを受けた隼樹は、しかめっ面で頭を抱えた。ウーノに声をかけられ、その後も会話を続けていたので、まだ一口も食べていなかった。

そんな隼樹の様子を、ウーノは可笑しそうに見ていた。

「うふふ……! ごめんなさい。よろしければ、私の奢りで代えのパフェを注文しましょうか?」

「え……? いや、でも、そんな……」

「私の責任のようなものですし、話に付き合っていたいただいたお礼も兼ねて」

「そ、そうですか……?」

そこまで言われては、女性からの押しに弱い隼樹は断れない。

「じゃあ、すみません。ありがとうございます」

隼樹が礼を言うと、ウーノは意表を衝かれたように目を丸くした。彼女の反応に訝り、隼樹は声をかける。

「ウーノさん？ あ、どうしたんですか？」

「え……？ ああ、ごめんなさい。ドクターや妹達以外から、お礼を言われたのは貴方が初めてでしたので……」

ああ、と隼樹は納得して頷いた。

ウーノは、隼樹からのお礼の言葉を頭の中で反芻させ、微笑みを浮かべた。

「悪くないものですね」

向かいの隼樹に聞こえないよう、小さく呟いた。

彼と出逢って、話をして、お礼を言われて、自分の世界が少し広がったような気がした。

それから、ウーノも自分の分のパフェを頼み、二人っきりで甘いデザートを味わった。

接触（後書き）

次回は、ホテル・アグスタの回……の予定です。
では。

変身（前書き）

今回は、主人公がえらい事になります。
その前に、冒頭から……。

変身

深夜の機動六課隊舎。

部隊局員の皆が寝静まっている時間帯に、まだ明かりの点いている部屋が一室あった。隼樹達が使用している部屋だ。薄暗く調整された明るさの中で、二人の人影が抱き合っている。いや、片方が相手の後ろから抱き付いていた。

「あっ……！」

抱かれている方は、短い嬌声を上げた。

綺麗な素肌の上には白いワイシャツ、下はパンティーのみで下半身を露出したあられもない姿をして抱かれているのは、セイバーだった。いつもは青いリボンで結われている金髪は、下ろして少女らしい印象を強め、普段の高貴溢れる彼女とは別人である。

そんな彼女は後ろから抱かれ、しかも両手で胸を揉まれて快感に身をよじらせ、悶えていた。頬は赤く紅潮させて、息遣いも荒い。目を細めた切なげな顔で、セイバーは声を漏らす。

「ああ……！　じゅ、ジュンキ……！　んくう……！　はぁ……もつと……もつと、してください……！」

「セイバー！　可愛いよ……！」

セイバーを後ろから抱き、胸を揉むのはマスターであり恋人の隼樹だった。右手はワイシャツの下に入れ、左手はワイシャツの上から膨らんでる胸を揉んでいる。

控え目ながらも感触の良い胸と、セイバーが漏らす嬌声を聞いて、隼樹の興奮も自然と高まる。

「ジュンキ……！ ジュンキ……！ ああっ……！」

一際大きな嬌声を上げた瞬間、セイバーの体内に電流が走った。恍惚とした顔を天井に向けたかと思うと、一気に脱力して後ろの隼樹に身を預ける。

そんなセイバーを、隼樹は愛おしそうに抱き抱えた。

「ふんっ。胸を揉まれたくらいで果てるとは、情けない。それでも騎士王か？」

二人の行為を、ベッドに座って見ていたオルタが、鼻を鳴らした。

「いやいや、ソレがセイバーの可愛いところなんだよ。それに普段とのギャップがあるし、慣れてないところも良いんだよ」

セイバーを抱える隼樹が、言った。

本人が堕ちて口を挟めないのを良い事に、二人は好き勝手に喋る。会話が聞こえているのかいないのか、セイバーは赤くなった顔を恥ずかしそうに俯けていた。

すると、オルタが立ち上がり、黒のゴスロリ衣装を脱ぎ出した。

「さて、次は私の番だ。王が直接快樂を与えてやろうと言うのだから、光榮に思え……！」

「ああ、今夜は手短にお手柔らかにね？ 今日、任務があるから」

時刻は、とっくに午前零時を過ぎていた。

隼樹の言う“任務”とは、ホテル・アグスタの警備だった。

＊

そして夜が明けた。

機動六課隊舎から、ヘリが飛び立った。乗っているのは、はやてを入れた隊長陣三名、副官のリインフォースと医務官のシャマルに護衛のザフィーラ、新人フォワード四名に使役竜が一匹、隼樹達民間協力者三名の計13名と一匹だ。パイロットのヴァイスもカウントすれば、14名になる。

これから向かうのは、骨董オークション会場となるホテル・アグスタ。オークションに出品される品物の中には、取引許可の降りてくるロストログアが混ざっている。今回の警備任務は、出品物をリックと誤認して襲撃してくる可能性があるガジェットに備えての事だ。ちなみに、シグナムとヴィータの副隊長二名とアリシアは、既にホテルの警備に当たっている。

ヘリで移動をする中、なのは達はリック事件にジェイル・スカリエッティが関わっている事を皆に説明をした。事件の真相については、既に知っている隼樹は軽く聞き流した。最後に今回の任務内容や警備配置について説明がされて、現場に到着した。

「いいですか、三人とも？」

「は、はい……」

現場に着き、準備を整えて警備に当たろうとしたところで、早くも事件が勃発した。ガジェット襲撃では無いのだが、ある意味こっちの方が大変な事態だ。

場所は、ホテルの裏側。はやて部隊長、なのは隊長、フェイト隊長の部隊の3トップを地面に正座させて、腕を組んで見下ろすのはセイバー。項垂れる隊長陣に、セイバーは厳しい言葉をかける。

「建物内の警備をするな、とは言いません。ドレスアップするのも、オークション参加者の中に自然に溶け込む為と言う事で一応は納得しましょう。ですが、隊長陣全員を中の警備に当てると言うのは、正直いただけません。特になのは——貴女の砲撃魔法は、どう考えても建物内で使用出来るモノではないでしょう？ 犯人と建物内で対峙した場合、大勢の客が居て且つスペースに限りのある会場内でどう対応するつもりですか？

これならば、スバル達新人四人を建物内の警備に当てておくべきです。おそらく、経験を積ませる為に外の配置に着かせたのでしょうか、ソレを加味しても隊長陣全員を建物内に入れるのは、賢い判断とは言い難いです。

スバル達を外に配置するのであれば、隊長陣の中から最低でも一人は一緒に外に出すべきです。はやては部隊長と言う立場もあるもので、建物内の警備も止むを得ません。フェイトのスピードも、建物内で使えない事ありません。消去法でいけば、やはりなのはが妥当でしょう。

いいですか？ 事前に現場の状況や自分達的能力をキチンと把握して……」

ドレス姿で正座をさせてる隊長陣に対する、セイバーの説教は続く。

訓練の時でも、彼女達のやり方に口を挟まなかったセイバーだったが、今回の件は流石に黙って見過ごす訳にはいかないと思った。隊長陣が一人も外の警備をしないのは、明らかにおかしい。ソコでセイバーは彼女達をホテルの裏側に連れて、説教を始めたのだ。

その光景を、少し離れた所で隼樹達一同は眺めていた。

「あゝあ。セイバー、完全に説教モードに入っちゃったよ」

「愚かな。大体、八神達は部隊のトップに立つには明らかに若過ぎる上に、指揮能力が乏しい。経験が足りない現段階では、とても人

の上に立てる器ではない。身の程を知れ」

「本人達に聞こえないからって、ボロクソ言うね、セイバーオルタ。でもさ、セイバーも選定の剣を引き抜いて、王になったのフェイト達よりも年下の頃だったじゃん？」

「だからこそ、三人の愚かさ、未熟さがよく解る」

「あ、なる」

オルタの言葉に納得して、隼樹は小さく頷いた。

経験者は語る、と言うヤツだ。

民間協力者に説教を受けている上司達の姿を、スバル達は複雑な心境で眺めていた。

結局、セイバーの指摘を受けた隊長陣は、はやてとフェイトが建物内の警備を、なのはが前線に出て新人達をフォローする事になった。

そんな事があるながらも、機動六課は配置に着いて警備は始まった。

ホテルの入り口を警備してるのは、スターズ4のティアナだった。彼女の頭は、機動六課と言う部隊について思考を働かせていた。

思うに、六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。隊長格全員がオーバーSであり、副隊長でもニアSランクと言う実力の高さ。他の隊員も前線から管制官まで、未来のエリート達ばかりだ。僅か十歳でエリオは魔導師ランクBを取り、キャロはレアで強力な竜召喚師、コンビを組んでるスバルは潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもある。

そして、特筆すべきは六課の民間協力者だ。八神部隊長の使用デバイスは夜天の書で、シグナム達守護騎士は彼女が保有している特別戦力であり、ソレにリインフォース曹長を加えて六人揃えば、無敵の戦力と言うのがスバルからの情報である。だが、セイバー、セ

イバーオルタは更に上を行く別格の存在と言われている。二人共、剣の腕はシグナムを上回り、まだ見ぬ一撃必殺の威力はなのはの砲撃魔法以上と聞く。二人の素性や能力等の詳細は、一切記録が残っていないのでレアスキル持ちの八神部隊長以上に謎に包まれている。ただ一つハッキリしているのは、セイバー、セイバーオルタ、隼樹の三人が揃えば、無敵を誇る八神勢以上の最強無敵の戦力である、と言う事だ。二人のマスター的位置に居る隼樹の実力だが、訓練にも参加しないで闘うところを一度も目にしていないので、何とも言えない。だが、隊長陣や副隊長陣が信頼を寄せて六課に招き入れたところから察するに、それなりの実力を備えていると思われる。少なくとも、自分よりは。

——やっぱり、ウチの部隊で凡人は私だけか……。

なのはとセイバー達の訓練を受けて、自分は強くなっているだろう。だが、周りの優秀なチームメイトと一緒に受けていると、比べる事が出来ずに自分が強くなった実感がいまち湧かないのが現状だった。それに、教えを受けてる身として失礼かもしれないが、教導官の実力が高過ぎて、拭いきれない劣等感を抱いてしまう。

しかし、だからと言って軽々と他人に相談出来る事ではない。否、元より相談する気など、彼女には無かった。

——凄い魔法が使えなくなっただって、特別な才能が無くても、一流の隊長達が居る部隊でだって闘えるって事を、証明するんだ……！

＊

ホテルの裏側を警備するのは、セイバー、オルタ、それに隼樹だった。

これからガジェットが襲撃してくるかもしれない、と言う時に、隼樹は気楽で居た。唯一の気がかりであるティアナのミスショット

も、現状なら大丈夫と思っているのだ。ティアナのミスショットは、彼女自身が起こしたミスでもあるが、フォローが遅れた上司にも幾ばくかの責任があった。しかし、今回は隊長のなのはが、リインフォースとシャルと共に屋上に着いて、外で何が起きても即座に動けるよう待機している。この態勢ならば、ミスショットは回避出来るハズだ。

それに、ホテルを襲撃してくるのはガジェットのみで、ナンバーズ等は出て来ない。あまり心配する事もないだろう、と思った時だった。

シャルの『クラールヴィント』のセンサーに反応があり、前方から接近してくるガジェット軍を確認する。噂をすれば影、と言うヤツだろうか。

すぐにシグナム、ヴィータ、ザフィーラの三人が最前線に向かい、ガジェット迎撃にかかる。新人の四人は、ホテルの真正面に集まって防衛ラインを固めた。

ココまでは問題無かったのだが、念話でシャルから予想外の知らせを受ける。

（皆、ホテル後方からも敵の反応をキャッチしたわ！ しかも、かなりの数でガジェットじゃないわ！）

「はあ!？」

通達を聞いた隼樹は、思わず声を上げた。

原作では、ガジェットの襲撃はホテル正面側のみだった。だが、後方から、しかもガジェットじゃない正体不明の敵が近付いていると言う。

予想外の展開に、隼樹は舌打ちした。

「んだよ、まさかのイレギュラーな展開かよ……!」

「オルタ! 後方の敵は、我々で迎え撃ちましょう!」

「潰しても構わないのなら、少しは本気が出せるかもしれんな」

セイバーとオルタは、騎士甲冑を纏って戦闘態勢に入る。青い騎士の手には風を纏った不可視の剣が、黒い騎士の手には赤い筋が通った漆黒の剣が握られていた。

二人は振り返り、隼樹に告げる。

「ジュンキ、私達は接近してくる敵を叩いてきます。貴方も万が一に備えて、『イメージ』で肉体を強化させておいて下さい」

「まあ、何体来ようが、ココには通さんがな……!」

「ああ、分かった。二人共、気を付けて!」

「はい、マスター!」

答えた直後、二人の騎士は風の如く速さで森の中に突っ込んでいった。

＊

森の中を突き進むセイバーとオルタは、木々の無い空いた空間に出て足を止めた。

二人の超人的な視力は、既に敵の姿を捉えていた。剣を構える二人の前に現れたのは、影の軍団だった。文字通り影のように全身が黒く、目で確認出来るだけで三十体ほど見える。だが、シャマルからの通達では、その倍は居るとの事だ。おそらく、奥の方に控えているのだろう。

眼前の敵を前にして、二人の騎士は顔を陰しくさせた。

「魔力は感じるが、生气は感じられない。傀儡くぐつの類でしょう……!」

「ならば、消しても構わんな」

敵が人間じゃないと解った途端、オルタは妖しい笑みを浮かべた。無闇に周囲を更地にする訳にもいかないから全力は出せないが、その代わりに相手を潰しても問題は無い。闘いの中で込み上げてくる破壊衝動のようなモノを抑える必要が無く、彼女は機嫌が良かった。殺気を膨らませるオルタの横で、セイバーは陰しい顔つきをしていた。

——しかし、この影から感じられる魔力……。まさか……。謎の影から感じる魔力に、セイバーは覚えがあった。

＊

ホテルの前方と後方で戦闘が行われてる中、離れた場所に一人の女が居た。

頭に白いカチューシャを付け、青黒いゴスロリ衣装を着た少女だ。年齢はスバルやティアナと同じ年位だろうか。しかし、ソレにしては胸の発育が良く、程良い膨らみをしている。茶色がかった長い黒髪、幼さが残る顔は無表情で、黒い瞳は何処か一点を見つめている。木々の隙間を通ってくる風に長髪をなびかせ、少女は静かに呟く。

「遠隔召喚……！」

直後、少女の前に召喚魔法陣が展開された。身に付けてる衣装と同じ、青黒いを光を発している。

光が収まった魔法陣から現れたのは、ホテル裏側で待機していたハズの隼樹だった。突然の出来事に動揺して、周囲を見回す。視界に捉えたのは、彼をココに移動した張本人である少女だった。

見た瞬間、隼樹は警戒して後ずさる。

「だ、誰……？」

しかし、少女は隼樹の問いには答ええないで、頭上に魔法陣を展開させた。

隼樹が、少女の頭上に出現した魔法陣を見た時だった。魔法陣の中から何かが物凄い速さで放たれ、標的に直撃する。打撃音が鳴り、衝撃を受けて後方に吹き飛ぶ標的は、他でもない隼樹だった。

後ろの太木に叩きつけられ、隼樹は地面に倒れた。

「ぐう……がぁー！ あああああああああ……！ いでえええ……！ いってええええ……！」

苦痛に顔を歪め、激痛を負った胸部を押さえてのたうち回る。直撃を受けた胸部に痣が出来て、骨折したような激痛を味わう。もしも、セイバーのアドバースで『イメージ』による肉体強化を施していなかったら、今の一撃で死んでいたかもしれない。

——ぐああああああああ……！ ちつくしょうー！

あのクソガキ、いきなり攻撃してきやがった……！

初めて味わう激痛に、汗を滲ませ、歪めた顔で少女を睨む。

隼樹の睨みを受けても、少女は全く動じる事なく無表情で言った。

「安心して下さい、じゅんにーさま。死なない程度に手加減しておきました」

——誰が“じゅんにーさま”だ、コラッ……！

激痛に耐えながら、隼樹は心中に悪態をつく。

一体何が起こってるのか？ この女は何者なのか？ 何が目的なのか？

様々な疑問が頭の中を飛び交うが、まずは傷の治癒が先だ。いきなり攻撃された事に対する怒りもあったが、あまりに痛みが強過ぎるので、何とか治癒を優先する判断が出来た。

しかし、傷を治したと同時に、腕ごと上半身にバインドをかけられて拘束されてしまう。

「ココでは殺さないわ。でも……ふふ、すぐに死ぬ事になると思うけど……！」

初めて少女が、笑った。人の死を愉しむような、無邪気で残忍性が垣間見える冷たい笑顔だ。

その瞬間、隼樹は本能的に危険を感じ取った。コイツは、ヤバイ。今すぐ逃げなければ、本当に死ぬ事になる。臆病者故の危機察知能力が、少女の危険性と命の危機を感じた。生存本能に従い、隼樹は『イメージ』の能力で脱出を試みる。肉体強化した自分の身体をイメージして、魔力を純粋な力に変換させる。

直後、無理矢理バインドを破壊した。

自由の身となった隼樹と少女が動いたのは、同時だった。

隼樹は後ろに飛び退き、少女は頭上に魔法陣を展開させた。先ほどと同じように、魔法陣の中から何かを発射する。だが、今回は外れた。何とか隼樹は、草木が生い茂る場所に身を隠した。

——くそっ……！ どうすればいい……？ どうすれば……？

『イメージ』で興奮を鎮め、冷静になって考える。

転移魔法は使えなくは無いが、発動の際にどうしても魔力光まりよくこうが発して位置を相手に知らせてしまう。バレたら、その瞬間に狙い撃ちされる。だからと言って、森の中を移動すれば草木に触れる音で感付かれてしまう。

そう考えると、もう闘うしかない。

だが、ココで大きな問題がある。

相手が、『女の子』である事だ。

野郎相手なら、何も気にせず攻撃する事が出来る。しかし、相手が女子となると、妙に手が出せない。女の子を傷付ける事に、どうしても躊躇してしまう。しかも、可愛い美少女なので、余計に手が出せない。

——くっそー！ 誰だよ、“女を傷付ける男は最低”とかのたまつて、世間に浸透させた奴は……！？ お前をぶん殴ってやりてえよ、チクショウ……！ 俺が男じゃなけりゃあ……っ！？

その時、隼樹の脳裏に、ある閃きが走った。

同時に、雨のように飛来物が迫ってきた。肉体強化してるとは言え、受ければ痛みを伴い、無傷では済まない。

回避を選んだ隼樹は、立ち上がって駆け出す。後ろでは、飛来物が地面に突き刺さる恐ろしい音が鳴る。

そして、手足をバインドで拘束された。しかも、先ほどよりも強度が増している。バランスを崩して、また隼樹は地べたに倒れた。

「もう逃がしませんよ……！」

頭上に魔法陣を展開させた少女が、歩み寄ってくる。氷のように冷たく、寒気を抱くような笑みを張り付け、隼樹を見下ろす。

気絶させる為に、隼樹の頭目掛けて魔法陣から飛来物を発射する。他にも手足を完全に使用出来ないよう潰す為に、飛来物の雨を降り注いだ。

着弾した瞬間、場は砂煙に包まれた。

「ふふ……おやすみなさい、じゅんにーさま……！」

「何がおやすみだよ……！」

「えっ！？」

返事が返ってきた事に驚き、少女は咄嗟に後ろに下がって距離を離れた。

煙の中で、倒れていた人影が立ち上がる。

「男だから攻撃出来ないって苦心してたけど……簡単な解決法があったわ……！」

煙の中から聞こえる声に、少女は違和感を憶えた。

明らかに隼樹の声で無いどころか、“男の声”ですら無いのだ。そして砂煙が晴れ、人影の正体が見えた瞬間、少女は驚愕して目を見開いた。

「私……女にな……ちまえばいいんだよ……！」
「誰……？」

少女は、我が目を疑った。

砂煙の中から現れたのは、隼樹とは丸っきり別人の金髪美少女だった。

仕置（前書き）

今回は、かなり過激な内容になっています。
まずは、オリキャラ相手に女の子となった主人公の恐ろしさを……。
苦手な方はお気を付け下さい。

仕置

ゴスロリ衣装を着た少女——アリスは、目を見開いて半ば咄然としていた。

葉谷資隼樹を捕える目的で、機動六課が警備するホテル・アグスタ付近にやってきた。スカリエッティの駒であるガジェット襲撃に合わせ、セイバーとセイバーオルタを隼樹から引き離す為にかげびとを投入させた。そして思惑通りに事は運び、召喚魔法でターゲットを自分の元に召喚する形で攫う事に成功する。

ココまで予定通りであり、多少の抵抗も想定内だった。

しかし、コレは全くの計算外だ。

目の前に居たハズの男の隼樹が、女に変化したのだ。それも、とびっきりの美少女に——。

太陽の光を受けて煌びやかな光沢を放つのは長い金髪、切れ目で燃えるような紅い瞳、誰もが振り向く端正な美しい顔立ち、抜群のプロポーションを誇る身体に薄着にミニスカートの挑発的な出で立ちと言う完璧な美少女になっている。ハッキリ言って、『葉谷資隼樹』と言う“地味男”の面影は微塵も残っていない。全くの別人に変身していた。まるで、狐につままれたようだ。

美少女に変身してしまった隼樹は、激しく動揺するアリスを前に変身した自分の身体を確かめている。

「へえ〜！ 初めてにしては、上出来じゃん！」

女性化した自分の姿に、隼樹はご満悦の様子だ。女に変身すると同時に性格も変えたようで、口調も男の時と違っている。しかも、声まで女になっていると言う徹底ぶりだ。

「でも、コレはちょっとやり過ぎたかねえ……」

そう言って隼樹は顔を下に向け、自分の胸元を見た。視線の先にあるのは、シャツを突き破らんばかりの大きな二つの膨らみ。とにかく女に成る事で頭が一杯だったので、体型のバランスを考えていなかった。結果、胸が爆乳クラスの大きさになってしまったのだ。ちよっと動くだけで、揺れを起こし、体に軽い振動が伝わってくる。代わりに、股間にあった男の勲章が無くなって下半身も妙な感じだった。

「まあ、いつか。別にずっとこのままにいる訳じゃないしね」

体型については深く考えず、気を取り直してアリスと向き合う。相手もハッと我に返って、警戒心をもって身構える。頭上には魔法陣を展開させたままで、いつでも攻撃可能な状態だ。

ビビりな性格が排除された女版隼樹は、不敵且つ妖艶な笑みでアリスを見つめる。

「覚悟しなよ、お嬢ちゃん……！ 女同士になった事で、あたしはアンタを攻撃する事に躊躇しないからさ……！」
「くっ……！」

逆に追い詰められたような心境になり、アリスは険しい顔で魔法陣から飛来物の雨を発射した。

冷静で勝ち気な性格に変化した隼樹は、すかさず障壁を張って防御する。飛来物の雨を降り注がれ、障壁に衝突して轟音と震動が森に広がる。

そして、半透明の障壁で受け止めてる事で、飛来物の正体が判明した。

「鉄球……！？」

隼樹を襲う飛来物の正体は、魔力弾では無く、黒光りする鉄球だった。

アリスは無機物召喚によって、貯蔵してある鉄球やその他の武器を飛び道具として利用しているのだ。鉄球に回転と魔力強化による加速を加えて、威力をコントロールして相手に撃ち込む。通常の魔力弾を撃つよりも、魔力消費は低く抑えられる戦法だ。

しかし、そんな細かな工夫は、今の隼樹にはどうでも良かった。

——あんのガキンちょ……！ か弱いあたしの身体に、こんな危なっかしい物叩き込みみやがったのか！？ ふっざけんじやないわよ！ このあたしが、どんだけ痛い思いしたと思ってんのよ、あのガキンちょ！ 絶対酷い目に遭わせてやるよっ！

怒りを燃やすと同時に、先ほどやられた復讐を誓う。

反撃のチャンスをうかがうが、鉄球の弾切れが来る様子が無い。容赦無く撃ち続け、オマケに槍や鉄パイプ等の新たな武器まで使ってきた。

アイツの武器庫の中身は無尽蔵なのか？ と苛立ちを抱いて思った時だった。

撃ち続けられる飛来物の中から、軌道を変えた幾つかの弾が見えた。ハッと後ろを振り向けば、背後から複数の鉄球が迫っていた。

「チッ……！」

半球状の障壁をイメージして、隼樹は全体的に護りを敷く。間一髪で防御が間に合い、鉄球を弾いた。

どうやら敵は、なのはのアクセルシューターのように、弾の軌道を自分の意思で操れるようだ。よく見れば、全方位から弾の雨が降り注がれている。これでは、手も足も出ない完全な亀状態だ。それに、いくら頑丈な障壁でも、受け続ければ耐えられずに破壊されてしまう。現に、全方位攻撃なんてとんでもない攻撃を受けて、障壁

が揺れている。

「上等じゃない……！」

しかし、隼樹もやりたい放題を許すばかりではない。冷静になり、頭の中で反撃の画をイメージする。ああして、こうして、とブツブツと呟き、イメージが固まった。

——よしっ……！ いっちゃやるか！

男の時と違い、すぐに実行に踏み切る事を決断した。

頭の中で固めた戦術を、『イメージ』で実現させる。障壁の中で引きこもっていた隼樹の体が、突然、発光した魔力光に包まれた。攻撃を続けるアリスは、何か仕掛けてくると察して警戒心を強め、身構える。

次の瞬間、光が収まると同時に障壁の中から、隼樹の姿が消えた。

「えっ……！？」

アリスが驚く目の前で、主を失った障壁が消滅する。

その時、アリスは背後から“何か”を感じた。

本能的に、反射的に後ろを振り返った少女の前に居たのは、不敵な笑みで拳を構えた隼樹だった。

「遅いっ！」

防御や回避の間を与えず、素早く隼樹は構えた拳で突く。

鋭く放った突きは、アリスの腹に思いつきりめり込んだ。『イメージ』で強化されて突いた拳は、敵の体温に包まれ、肉を押す感触がした。

「がはっ……！？」

痛みに目を見開き、アリスは後方に吹き飛ばされる。突きの威力で飛ばされたアリスは、衝突した後ろの太木を折り、転がるように地面に倒れた。

「う……！　ぐっ……があ……！」

打撃を受けたアリスは、すぐに起き上がる事が出来なかった。叩き込まれた拳は、内臓にまで衝撃を与え、ダメージを負わせていた。ちよつとでも体を起こそうと動かすだけで、内側から抑えようの無い痛みに襲われ、苦痛に顔を歪める。骨が折れてないのが、唯一の幸運だ。

しかし、女に変身した事で、本当に隼樹は少女への攻撃の躊躇を無くしていた。

早く体勢を整えて、反撃しなければやられる。そう思い、自分を奮い立たせて、ようやく倒れた体を起こした。

だが、その時には手遅れだった。

痛みに耐えて上体を起こした直後、アリスの首に腕が絡み付いて絞められる。

「んぎっ……！？　きはっ……あっ……かはっ……！」

突然の異変に虚を衝かれて混乱して、呼吸まで閉ざされてアリスは苦しむ。

「ほーら。つかまえたよ、お嬢ちゃん……！」

背後からアリスを締め上げるのは、不敵且つサディスティックな笑みを浮かべる女版隼樹だった。

振りほどけないよう、腕はガッチリと首を絞めている。勿論、『

イメージ』による強化を施してある。

「うゝあっ……！ いっ……あぎっ……！ くる……しい……いい
っ……！」

必死に逃れようともがくアリスだが、首を絞める腕はビクともしない。

逆に、もがけばもがく程、文字通り自分の首を絞める事になり、苦しみが増していく。氣道を圧迫されて、呼吸困難に陥るアリスは、見開いた目から涙を流し、開かれた口からは溜まっていた涎を垂れ出す。更には、括約筋の弛緩により、スカートの中で失禁まで起こしてしまう。パンツが濡れて、生暖かい液体が足下の地面に広がる。後ろで絞め続ける隼樹は、アリスの状態に気付いてSっ気を全開させた。

「アンタ、失禁してんの？ そんなに苦しいの？ もっとキツく絞めてやろうか？」

「いい……い、やあ……！ こお……こおんな、の……うう……聞いて、な、い……！ うええっ……！」

「は？ 当たり前でしょう？ 誰からあたしの事聞いたのか知らないけど、あたしがこの姿になったのは今回が初めてなんだから。テンションも上がってきて、妙に気持ちいい気分だよ！」

隼樹が女に変身した事は、アリスにとって完全に誤算であり、そんな情報は全く聞いていない。

しかも、外見だけでなく中身も別人に変わっており、アリスを苦しめる事を愉しむ完全なサディストと化していた。苦しみに悶え、失禁までしたアリスの姿に、興奮して顔を赤く紅潮させている。

「いいわよ、アンタの表情……！ 苦しそうで、凄く可愛いよ……」

！失禁までしちゃってさ……。このまま管理局に渡して、拘置所に送るには勿体無い位だよ……！

ねえ、アンタ……名前、何て言うんだい？」

首を絞める腕の力を少しだけ緩め、喋りやすくさせた。

アリスは空気を求めるように濡れた舌を突きだし、必死に声を絞り出す。

「ア……アリ、ス……！」

「ふーん。アリスって言うんだ。名前も可愛いじゃない。

じゃあ、アリス。よく聞きな。もし助かりたければ、あたしの奴隷になりな。奴隷になるなら、あたしを『お姉様』と慕って、あたしの足を舐めるんだ。そうすれば、アンタはあたしが護ってやるよ。逆らうんなら、このまま容赦無く絞め落としてイカせてやる……！

ホラッ、どっちにするか決めな？」

「うう……か……はっ……！」

涙と鼻水、涎の三つの液体で、グシャグシャになった顔でアリスは悶える。

力を振り絞って、アリスは答えた。

「な……な、るう……！ 奴隷、に……なり、ます、からあ……助け、て……！」

「ククッ……！ そうやって助けを乞う顔も可愛いじゃない！ ますます気に入ったよ……！」

アリスの両手にバインドを仕掛け、体の自由が利かないように縛る。それから腕を首から離して、アリスの前に立つ。

目の前のアリスは、解放されたと同時に激しく噎せて、咳き込む。

とにかく空気を求めて、呼吸をする。

そんなアリスの眼前に、綺麗な素足が差し出された。

「ホラッ、舐めな……！」

足を出して、ドSな笑みを浮かべる女版隼樹。

アリスは、半ば放心したような虚ろな顔で、差し出された足を見つめた。

「……は……はい……。じゅんねーさまぁ……」

答えた後、アリスは顔を近付け、口から小さな舌を出した。濡れた舌で、足の親指を舐める。ペロペロ、と犬のように舐め、次に指の付け根部分を舐め回す。

「んあっ……！」

その時、隼樹の頬に朱がさした。

——ヤバッ……！ コレ、くすぐったくて、ちよつと気持ちいい……！ 癖になっちゃうかも……！

初めての快感に、隼樹は興奮してきた。

「そうよ……！ もっと舐めな……！ いい？ あたしが上！ ア
ンタが下！ 分かった？」

「ん……。は、はい……。じゅん、ねーさまぁ……！」

こうして謎の襲撃者は、女になった想像者の奴隷となった。

＊

リインフォースは、ホテルを囲む森の上を飛行していた。

先ほど、召喚魔法で裏側に待機していた隼樹が、さらわれてしまった。シャルが召喚魔法の発動元を割り出して、ホテルをなのは達に任せてリインフォースが助けに飛んだ。

そして、シャルが割り出したポイントが見えて、地上に降り立った。リインフォースの前に居るのは、アリスを抱える女版隼樹だった。

隼樹は、少し驚いた顔になる。

「リインフォース……！」

「何故私の名を……？ お前は誰だ？ その女の子をどうした？」

相手が女の子になった隼樹とは露知らず、リインフォースは警戒心を抱く。森の中で、半ば放心状態となってる少女を抱えてる姿を見れば、誰だって怪しく思う。

すると隼樹は、リインフォースが女の子になった自分に気付いてないと解った。

「ああ、そうか。アンタ、あたしに変身した場面見てないもんね。あたしだよ、あたし」

「だから、誰ですか？」

「だーかーらー、隼樹だってば」

「は……？」

相手の言葉に、リインフォースは怪訝そうに目を細めた。

「嘘ならば、もう少しマトモな嘘を吐いたらどうだ？ 女のお前が、隼樹の訳がないでしょう」

「まあ、聞きなつて。あたしは、『イメージ』で女に変身したんだよ。相手が女の子だと、男のまんまじゃ闘^やり難くくてさ」
「え……!？」

言い分を聞いたリインフォースは、相手の女の子の魔力を確かめる。魔力の感覚は、隼樹のソレと同じだった。

魔力は指紋と同じで、魔力光や感覚が皆違うのだ。

ソレに気付いたリインフォースは、僅かに動揺を顔に表した。

「え……? ええっ……!? ほ、本当に隼樹なのですか……!?
「そうだって、言ってるだろう? アンタのだ〜い好きな、ヘタレな葉谷資隼樹だよ……!」

別人と化した隼樹の言葉に、リインフォースはハツとなる。自分が隼樹を好きな事、隼樹がヘタレな事を知っている人物は限られてくる。局内に知れ渡ってはいるが、少なくとも外部の人間が知るハズが無い。何より、先ほど『イメージ』と言う能力の名を口にした。それに、さらわれた隼樹と犯人が居るであろう場所に居るのだ。抱えられてる少女が犯人だとすれば、残った金髪の美少女が変身した隼樹と言う事になる。『イメージ』を使えば、性格を変えたり、肉体老化を防ぐ事が出来る。ならば、“性別を変える”事も可能だろう。

そこまで思考が至った時、リインフォースは改めて驚き、目を大きく見開いた。

「ま、丸つきり別人じゃないですか!？」
「そうだよ。可愛いだろう?」

「いえ、可愛いとかそう言う問題では無く……。姿どころか声と性格まで変わって、完璧に女の子に……。しかし、コレはコレでアリかもしれない……」

何を想像したのか、リインフォースの頬が若干赤く染まった。
彼女の反応を気にせず、寧ろ可愛い物を見るような目で見ながら
隼樹は言った。

「それでさ、このガキンちゃんんだけど、六課で保護する事にして
くれない？」

「え？ ですが……」

「別にコイツ自身がホテルに何かした訳じゃないし、あたしだって
結果的にこうして無事な訳だしさ。大目に見てくんない？」

「むう……。分かりました。貴方が、そう言うのでしたら、主にそ
うお伝えします。と言うか、貴方本当に別人ですね」

「イケてるだろ？」

軽くウィンクして答える隼樹に、不覚にもリインフォースは顔を
赤くして目を逸らした。元が隼樹であると解ると、妙に意識して心
臓がドキドキしてしまう。

——うう……。！ 隼樹、可愛いです……。！

「ホラッ、さっさと戻るよ！」

「あっ、待って下さい！ って、その姿のままで戻る気ですか！？」

「いや、アンタの反応が面白かったからさ、他の奴等の驚く様も
見たくなってね」

「本当に別人ですね、今の貴方っ！」

不安を抱きながら、リインフォースは女版隼樹と共にホテルを目指
した。

*

「いや、誰っ……!？」

「あははははははははは……!」

ホテル前に集まった六課メンバーとセイバーが声を揃えて驚き、予想通りの反応に隼樹は笑った。

案の定と言うか、女に変身した隼樹を見て、皆も最初は誰だか解らなかった。あのセイバーとオルタでさえ、変身したマスターに気付かなかったぐらいだ。ラインで繋がっているとは言え、一見しただけでは本当に別人の美少女で、リインフォース同様に魔力を探つてようやく隼樹と知り、驚愕した。

ガジェット軍の方は、六課メンバーが見事に殲滅した。途中で召喚魔法によってガジェットがホテル前の防衛ラインにまで入ってきたが、新人四人に加えて隊長のなのも参戦した事で、危なげなく全機破壊した。

セイバーとオルタの方も、謎の人影の軍団を全て倒した。数が多かったが、戦闘能力はそれ程高くは無く、特に苦戦する事も無かった。

隼樹が墮としたアリスは、寝かせて先にヘリに乗せている。何はともあれ、大きな被害も無く戦闘は無事に終わった。

「ジュンキ。いい加減、男の姿に戻ったらどうですか？」

「え〜？ もうちょっといいじゃない」

「……貴方の為に言ってるんですよ」

困り顔でセイバーは、頭痛を堪えるように指で眉間を押さえた。そこへ、スバルの声が上がった。

「『イメージ』って、そんな事も出来るんですね。凄〜い……!」

「だろ？ 何なら、アンタを男の子に変えてやろうか、スバル？」
「あっ、いえ、結構です！」

ニヤつく隼樹に、慌ててスバルは両手を振って断った。

「そう？ じゃあ、エリオを女の子に……」

「だ、駄目っ！ エリオに変な事しないで……！」

隼樹の矛先がエリオに移ると、すぐさまフェイトが庇った。過保護故に必死な様子である。

すると、すぐに隼樹の標的が変わった。

「まっ、別に無理矢理やる気は無いけどさ。それにしても、シグナムやリインフォースもそうだけど、フェイトも良い胸してるわよね」
「え……？」

「ふふん。でも、あたしには劣るわよねっ！」
「ひゃっ!？」

語尾を強めて言うと同時に、隼樹はフェイトの胸を掴んだ。

「わああああ!？」

「何するの隼樹さんっ!？」

何の前触れも無い隼樹の悪戯に、一同は激しく動揺して声を上げた。

そして、狙ってやったのか、それとも『イメージ』の効力が切れたのか、突然光に包まれたかと思えば隼樹は元の男の姿に戻った。ちなみに彼の手は、フェイトの膨らみを掴んだままだ。

「え……?」

気まずい沈黙の中で、隼樹は引き攣った笑みで声を漏らした。
そして、恐る恐る顔を上げれば、完熟したトマト並に真っ赤にさせたフェイトの顔があった。
事態の悪さと身の危険を感じて、隼樹は弁明しようとする。

「い、いや、違うんだ、フェイト……！　コ、コレは俺のせいであ
って俺のせいじゃなくて……」

「隼樹のスケベっ！」

「ぶがっ!？」

哀れ隼樹は、フェイトがフルスイングしたバルディッシュを顔面
に受け、後方に吹き飛ばされた。

＊

「ふふ……！　面白い方法で返り討ちにしたな、隼樹の奴め……！」

薄暗い室内で、静かに笑うのは漆黒の美少女。目の前に出してい
るモニターには、先ほどの隼樹とアリスの戦闘映像が流れている。

「女相手なら、もしかしたら楽にイケるかと思ったが、そうもい
かないか……」

残念そうな言葉とは裏腹に、顔に落胆の色は無い。寧ろ、楽しん
でいるようにさえ見える。

「まあ、コレは余興のほんの一部だ。復讐は、まだ始まったばかり

「……まだまだ本番はこれからだ……！」

自信

もう嫌だ、と隼樹は部屋に引きこもっていた。

原因は言わずもがな、ホテル・アグスタでの一件だ。『イメージ』の能力で女の子に变身して、襲撃者である少女を倒した。だが、その行動は問題だらけだった。まず、襲撃者であるアリスを失禁に至るまで締め上げ、更には足を舐めさせて奴隷にすると言う女王様っぷりを発揮して、最後はフェイトの胸を掴むセクハラ行為の直後、図ったように元の姿に戻ってしまった。ティアナのミスショットを回避した代わりに、隼樹が辱しめを受ける羽目に遭った。

あの後、隼樹は酷く傷付いて部屋に引きこもった。バルディッシュで殴られた顔よりも、激しい羞恥心によって心が粉々に粉碎されたのだ。扉には鍵を閉めた上に『イメージ』で強化を施し、誰も入れない密閉空間を作り上げた。コレでセイバーのもう一つの宝具でもあれば、完全完璧の難攻不落、攻略不可能な引きこもり空間が実現出来るのだが、無い物は仕方ない。

セイバー達が部屋の外から声をかけ、フェイトが暴力を振るった事を謝ってくる。だが、隼樹は耳を塞ぎ、ベッドの中に潜り込んで答えようとしなない。死にたい程に恥ずかしくて、今は誰とも顔を合わせたくないし、話したくもなかった。

廊下で説得を試みていた一同も、隼樹の気持ちを察して、今はそっとしておく事にした。オルタだけが、扉を破壊する強行突破に出ようとしたが、他の皆が全力で止めて何とか事なきを得た。

一人部屋に引きこもる隼樹は、頭をグシャグシャと掻き乱す。

——ああ、もう！ 何であんなバカな事したのかな……？ こんな事なら、女になるんじゃないかった……！ そうだよ……後から考えれば、別に俺自身が女になる必要ねーんだよ……！ アーチャー達を出したみたいにな、一時的に代わりに闘える女を想像して出せば良かったんだ……！ ああ、俺ってホントバカ……！

悶々とした気持ちで、後悔しながらベッドの上を左右に転がる。その時、腹の虫が鳴って空腹感を覚え、喉の渇きにも気付いた。

「ああ……そういや、戻ってから夕飯食ってなかった……」

ベッドの中から顔を覗かせ、隼樹は呟いた。

あまりの恥ずかしさに、隼樹は食事も摂らずに自室に直行して引きこもり、現在に至る。羞恥に悶え、落ち込んでいても減るモノは減るもんだ。

仕方ない、と空腹に従って隼樹は部屋を出ようとして、立ち止まった。このまま部屋を出て、廊下等でセイバー達とバッタリ遭遇したら、激しい羞恥心に駆られて逃走を図るだろう。飯は食べたいが、誰にも会いたくない。

どうしたものか、と室内を歩き回って悩む隼樹の目に、窓が入った。

「あつ、ココから出ればいいんだ」

スツカリ夜となった今の時間帯に、外を出歩く者は居ないだろう。それに外からなら、ガラス張りの壁から食堂内の様子をうかがい、人の有無を確認する事が出来る。まさに、一石二鳥だ。

そうと決まれば、後は実行あるのみ。窓を開けて、『イメージ』で体を浮かせて、ゆっくり静かに地面に降り立った。

誰にも見つかる事無く、無事に部屋を出れた隼樹が、早速食堂を目指して移動しようとした時だった。

静かな夜の隊舎の庭で、音が聞こえた。いや、聞こえてくる。

誰か居るのか？　と思ひながら隼樹は、極力足音を殺して物陰まで移動して、そっと音の出所を覗いた。

ソコには、隼樹にとって避けたかった未来の一つが、現実化していた。

「え……!？」

驚き顔と言うより、しかめっ面に近い表情で隼樹は呟いた。

何と、隊舎裏の庭で、一人自主練に励むティアナを発見してしまったのだ。自分の周囲にスフィアを幾つか配置して、クロスミラージユを向けて狙撃の訓練をしている。かなりの長時間で続けているらしく、顔色が若干悪く見える。

ティアナの訓練を目撃した隼樹は、訳が解らなかった。直接は見えないが、ホテル・アグスタでティアナはミスショットをしていないハズだ。ソレがどうして、原作通りに無茶な自主練をしているのか、全く解らなかった。

「何で……？」

「覗きとは良い趣味してるじゃねーか」

ぼやきの直後に声をかけられ、弾かれたように隼樹は後ろを振りかえった。

後ろに立っていたのは、パイロットのヴァイスだった。

「ヴァイスさん……。もう、おどかさないでくださいよー！」

「へへっ、ワリーワリー」

顔の前に手を添えて、謝りのポーズを取るヴァイス。

女性比率が圧倒的に高い機動六課のような場所は、男にとって夢のような所であると同時に肩身が狭い空間でもある。それ故に、自然と男の友人と言うか、親しい間柄を求めるのだ。

ヴァイスもその一人で、数少ない男同士で仲良くやっている間柄だ。

実は、隼樹はヴァイスの事をあまり好きでは無く、寧ろ嫌ってい

た。理由は、ナンバーズのデイドをライフルで狙撃したのを根に持っていたのだ。しかし、クロノ同様に『この世界のヴァイス』は、デイドに何もしていない。逆恨み行為を繰り返さない為に、隼樹は怒りを抑えて接した。それから六課の環境もあって、自然と逆恨みの感情は薄れていき、今ではそれなりに親しい関係になっている。相手がヴァイスと解り、隼樹は落ち着いて本題に入る。

「あの、ランスターさん、何時から自主練してるんですか？」

「任務から帰ってきて、そんなに間を空けてねーから……四時間だよ、四時間」

「いっ!?! 四時間っすか!?!」

まんま原作通りの展開じゃねーか、と隼樹は心中に呟く。

「何でそんなに……今日の任務で、何か失敗でもしたんですか？」

「いや、俺が知ってる限りじゃあ、失敗はお前さんの変身くらいだな」

「その話は止めて下さい! いや、ホントにつ……!」

聞いた瞬間、隼樹は自分の顔が熱くなったのを感じた。

やはりと言うか何と言うか、変身の件はヴァイスも知っていたようだ。誰かから聞いたのか、それとも映像で見っていたのか。正直、どっちでもいいが。

「すまねえ。ちょっとからかった。」

んで、本題のティアナだけだよ……任務じゃあ、特に目立った、と言うかミスらしいミスは何もしちゃいなかったよ。ただ、俺がさつき止めようと思って話してみたら、自分は凡人だから人一倍訓練しねーと駄目なんだとさ」

——ああああっ！　そういう事かアアアア！　完全に見誤ったアアアアアア！

ヴァイスから事情を聞いた隼樹は、内心にシャウトした。

ティアナのミスショット回避は、原作にあった撃墜事件の根本的原因ではない。それよりも重要なのは、ティアナの心の問題だ。ティアナは幼い頃に、管理局で魔導師をやっていた兄のティーダ・ランスターを亡くしている。違法魔導師を追っている最中に、魔法を受けて、逃走を許してしまう。すぐに犯人は取り押さえられたが、運が悪い事にティーダが受けた傷は致命傷となり、殉職してしまった。更に、当時の心無い上司が、犯罪者を取り逃がすとは局員としてあるまじき失態であり、例え死んでも捕まえるべきだった等と暴言を発したのだ。コレにより、ティアナの中で兄の魔法は役立たずで無い事を証明する事が全てとなり、努力してきた。

だが、そんな自分の努力を嘲笑うかのように、どんどん周りに優秀な魔導師が現れ、強い劣等感を抱く事になった。見返す目的と劣等感と二つの要素が、彼女を無茶な行動に駆り立てているのだ。

改めて彼女の問題点に気付く隼樹の前で、ヴァイスは頭を掻いて言った。

「俺が言っても聞かなくてな。お前さんの方から、ガツンツと言ってくれないか？」

「いやいや、ヴァイスさん。俺が他人に物事を強く言えないの解ってるでしょう？」

「例の『イメージ』ってヤツを使えば、性格を変えられるじゃねーか」

「んー、出来なくは無いつすけど、あんまり説教染みた事は返って逆効果になりかねませんし……」

ウーム、と野郎二人は腕を組んで考え込む。

自分達で無理なら、他の人に頼めばいいんじゃない？　と思った時

だった。

ハッと気付いた隼樹は、間延びした声を出す。

「あゝ」

「ん？ 何か良い案でも思い付いたか？」

「はい。至極常識的な解決法を見つけました」

解決法を見つけた隼樹は、早速ヴァイスに話した。

＊

ロクに休憩もせず、ティアナは自主練を続けていた。

才能も凄い魔力も無い自分は、こうして地道に人一倍トレーニングするしかない。そう自分に言い聞かせて、奮い立たせ、限界が迫っている体を無理矢理に動かす。

そうして自主練を続けていると、

「ティアナ」

不意に後ろから名前を呼ばれた。

聞き覚えのあり過ぎる声に、ティアナの体は硬直したように動きが止まった。心臓の鼓動は早鐘のように鳴り、緊張状態になる。

ゆっくりとティアナは、後ろを振り返った。

「……なのは、さん」

「ちよつといいかな、ティアナ？ 一旦休憩して、私とお話しない？」

隊舎裏に現れたのは、高町なのはだった。

隼樹が思い付いた解決法とは、上司であり教導官であるなのはに知らせる事だった。上司に部下の無茶な現状を知らせて、話し合わせる。言われてみれば、なんだそんな事か、と思う常識的な方法である。

なのはは、普段と変わらない笑顔を向けてくる。

逆にティアナは、気まずそうな顔をなのはから逸らした。悪い事をしてる場面を、教師に見つかってしまった子供のような反応だ。隊長の言う事には逆らえないので、ティアナは自主練を中止して、二人で近くの木に背中を預けて座り込む。

「ヴァイス君から聞いたよ。四時間も、ココで自主練してたんだってね」

「……はい」

答えるティアナの声は、小さかった。溜まっていた疲労もあるが、なのはに自主練を見られた事が一番堪えていた。内心でティアナは、叱られる事を覚悟した。

しかし、なのはの口からは、思っていたような叱りの言葉は出てこなかった。

「あのね、ティアナ。最初に言っておくけど、ティアナは凡人なんかじゃないからね」

「え……？」

意外な言葉に、ティアナは呆気に取られた顔になる。

笑顔のまま、なのはは続けた。

「確かに、スバルはパワーがあって潜在能力もある、エリオもBランクを取れる程の実力を持って、キャロも竜召喚のレアスキルがあ

る。うん、確かにティアナの周りに居る皆は凄いよ。

でもね、一番凄いのはティアナなんだよ？ お世辞抜きで、本当に。だって、ティアナが居なかったら、セイバーオルタさん達の訓練の時やホテルの任務の時も、上手いかなかったもん」

「どういう事ですか？」

「訓練が上手くいってるのも、任務でフォワード四人が全員無事に警備を終えられたのも、ティアナの的確な指揮があつてこそなんだよ。セイバーオルタさん達の訓練で、最初はすぐに撃墜されてたけど、段々冷静さを保ててきたティアナの指揮で撃墜されるまでのタイムが徐々に伸びてきてる。ホテルの時だって、皆が勝手な行動をしないように指示を出してた。こういうのは、ちゃんと皆の能力を把握してたり、チームのリーダーとしての意識が無いと出来ない事だよ。

私が言っても説得力無いかもしれないけど、別に派手で強力な魔法や才能が全てじゃないからね。幾ら凄い魔法やレアスキルを持つてても、ソレを上手く使えなきゃ意味が無い。だから、皆の力ちからを活かした指揮が出来るティアナは、皆に負けない位に凄いんだよ。

それに、幻術や射撃しか出来ないって思ってるかもしれないけど、相手の目をくらませる幻術は威力の強い魔法以上に強力な武器に成りえるんだから。ソコにティアナの射撃が加わると、相手からしたら本当に厄介な武器なんだよ」

オルタ達による実戦形式の訓練で、新人フォワード組が生き延びるタイムを伸ばしていつてる要因は、なのはが語ったようにティアナの指揮が大きい。彼女の指揮が無ければ、タイムは伸び悩んでいただろう。それに、彼女の幻術は相手に本物か否かの判断の時間を要させ、隙を作る重要な役目も果たしている。

その事は、直接模擬戦で相手をしているオルタとセイバーがよく知っている。

なのはも、自分の訓練の中でティアナの指揮能力と魔法を評価し

ていた。

「本当なら、こう言った事は訓練が終わった後にでも話してあげれば良かったんだけど、言わなくても自分で解ってるって勝手に思い込んでたから……。だから、ティアナが、一人で遅くまで無理して自主練をする事には、私にも責任があるんだ。ごめんね」

「あっ、い、いえ……そんな……」

「それでね、ティアナ自身ちゃんと解って欲しいんだ。自分がチームの中でどれ程重要な存在なのか、どれだけ皆を助けているのか。ティアナが皆を助けて勝利に導いてるんだよ。って、セイバーさんの受け売りみたいになっちゃったけど、実際にそうだからね。ティアナの頑張りとは、何よりもちゃんと結果に出てる！それに、私だけじゃなくて、セイバーさんもオルタさんも、皆ティアナの事を認めてるんだよ？ティアナの凄さは、私達が保証する！だから、自分に自信を持てね」

「なのは、さん……！」

話を聞いたティアナの目から、自然と一筋の涙が流れた。上司の名前を口にした声も、僅かに震えていた。

初めて、自分の事を認めてくれた。その事がたまらなく嬉しくて、涙を堪え切れず、泣き出す。今まで努力してきた事が、自分の力が認められる事が、こんなに嬉しいと心に染みて知った。

そんなティアナの頭に、なのははそっと手を添えた。

「訓練で、何か不満とか意見があったら、遠慮なくいつでも言ってね？ 教官として応えられるように、私も頑張るから」

「……はい」

「うん。それから、自主練をするのはいいけど、無理は駄目だからね？ 体調管理も立派な仕事のひとつだし、何より皆が心配するから」

「……はい」

嗚咽しながら、ティアナは返事をした。

—— よっしゃアアアア！ 撃墜ルート回避イイイイ！

こっそり物陰から二人の様子を眺めていた隼樹は、内心にシャウトしてガッツポーズを取った。

ティアナの問題が解決したのを見届け、自室に戻ろうとして食堂を目指した。

「あっ、そうだ」

隼樹が去った後で、なのが思い出したように言った。

「ちゃんとヴァイス君と隼樹さんに、お礼言っておいてね」

「え……？ 隼樹さん、ですか？」

泣き止んだティアナが、怪訝そうに訊いた。なのはに話をしたヴァイスは分かるが、隼樹が出てくる意味が解らなかった。

「直接私を呼びに来たのはヴァイス君だけど、私を呼ぶ事を考えたのは隼樹さんなんだよ」

＊

翌朝。

目を覚ました隼樹は、着替えと髭剃り、洗顔を済ませて朝食を食べに行こうと窓を開けた。まだ皆に会う事を気まずく思い、昨夜と同じ方法で部屋を出る。

「よっこいしういちろう……っと。あ、“よっこいしういちろう”って言っちゃった」

浮遊して、隼樹は地面に着地した。

さて食堂に行こうとしたところで、

「あの……」

「えっ!？」

不意に声をかけられ、隼樹は慌てて振り返る。

後ろに居たのは、訓練用の服を着たティアナだった。

「おはようございます」

「お、おはよう……」

——ええっ……!？ 何で？ 何で、こんな朝早くに隊舎裏にテ

ィアナが居るの!？

気まずさを抱き、隼樹はぎこちない笑顔になる。

「えっと……ランスターさん、どうして、こんな時間に、こんな所に……？」

「その……隼樹さんに伝えたい事がありました……。皆と会うのを気まづく思ってる貴方なら、こっそり窓から出てくるだろうと思っ
て待ってました」

——俺の行動読まれてるウウウウ!

ティアナの読みに、隼樹は内心にシャウトした。

行動を読まれていた事に動揺する隼樹の前で、恥ずかしそうに頬を赤くしながらも、ティアナは意を決して言った。

「隼樹さん……その、昨夜はありがとうございます!」
「え……?」

いきなりお礼を言われ、隼樹は呆氣に取られる。正直、感謝されるような事をした覚えは無い。

「ありがとうって、何の事……?」

「なのはさんから聞きました。私の無茶を止める為に、なのはさんを呼ぶようヴァイス陸曹に頼んだって……」

「あ、ああ……」

——あの女、何余計な事喋ってんだよ!? 今度は、アンタを女版俺で仕置きしたろかっ!?

なのはに対してお仕置きを考えるが、そんな事をしても、また自分が恥ずかしい思いをする事は目に見えている。それに、まあ、お礼を言われて悪い気はしない。

しかし、ソレでも一応ティアナに言った。

「でも、俺は何もしてないよ。たまたまランスターさんが無茶してるのを見つけたから、なのはに伝えるようヴァイスさんに頼んだだけだ。実質、ランスターさんを助けたのは、なのはだよ」

「そんな事ありません! 確かに、なのはさんの言葉に私は救われました。でも、あの時に隼樹さんが私を見つけて、なのはさんと呼ばなかったら……きつと私、今でも無茶を続けてたと思います。だから、本当に感謝してます」

「そ、そうか……」

妙に気恥ずかしくなり、隼樹は照れ隠しするように頭を掻いた。会話が途切れると、妙に気まずい空気になって、二人共黙り込んでしまった。

ややあつて、ティアナが沈黙を破った。

「あの、これから朝食なんですよね？　よかったら、一緒にいいですか？　実は、私もまだなんです」

「え……？　あ、ああ、うん。いいよ。じゃあ、行こうかランスタ―さん」

隼樹は頷き、ティアナと並んで食堂を目指して歩き出す。
不意に、ティアナが言った。

「あの……」

「ん？」

「その、“ランスタ―” って呼び方やめてもらっていいですか？

何だか、他人行儀な感じがして……」

「じゃあ……ティアナ、さん……？」

「はい。そっちでお願いします」

ティアナをファーストネームで呼ぶのは初めてなので、隼樹は妙に気恥ずかしく思った。

——何だか不思議な人ね。何もしてないと思えば、実は何かしてる……何かしてると思ったら、実は何もしてない……。自分で思っているってなんだけど、よく解らない人ね……。

並んで歩くティアナの心中で、隼樹の印象は『よく解らないけど良い人』となる。

今回の一件で、二人の距離が少し縮まった。

自信（後書き）

今回は、自分なりにアンチにならないよう工夫して『ティアナの回』を書きました。

他の二次創作だと、オリ主がなのはや仲間達と対立したり、模擬戦でティアナを撃墜した後になのはをボコるのが主ですが、今回はなのはでティアナ励ましです。彼女の言う、純粋な話し合いです。まあ、一方的に喋らせちゃいましたが。

もうね、過剰な撃墜もシャーリーが開いた気分悪い説明会自体嫌いなので、そのルートを潰しました。ある意味アンチですが。あつ、シャーリーは好きなキャラですけどね。眼鏡っ娘。

んで、最後のティアナと主人公の短いやり取りですが……フラグなんて立っていないよ？ フラグ？ 何それ？ おいしいの？ だって、ティアナはお礼言っただけだし、頬が赤くなったのもただお礼言うのが恥ずかしかっただけだし。断じて恋愛フラグは立っていない！ つと、ちよつとムキになってしまいました。

次は、聖王争奪戦ですかね。

では、感想・ご意見お待ちしてます。

同盟

ティアナの問題が解決して、隼樹と皆の間にあった気まずさも払拭された時だった。

朝早くから、隼樹は部隊長室に呼ばれた。

部屋に入ると、デスクに座るはやてに笑顔で迎えられる。

そして、部屋に居るのは、隼樹とはやての他にもう一人居た。青黒いゴスロリ衣装を着たアリスだ。入室した隼樹に、ペコリと会釈をした。つられるように、隼樹も頭を下げ返す。アリスが居合わせていると言う事は、呼ばれたのはアリスの件だろうと察した。

部隊長デスクの前に二人が揃ったところで、はやてが話し始める。

「もう察しはついてると思うけど、隼樹さんと呼んだのは彼女の件や。アリスちゃんは、機動六課^{ウチ}で保護する形で預かる事に決まったで」

「そうか」

やっぱり、と思いながら隼樹は答えた。

はやての話は続く。女版隼樹が、完膚なきまでに攻めて屈服させたアリスは、ホテル・アグスタから連れて来た際に事情を聞こうと六課で形式的な聴取をした。だが、自分の名前や魔法以外に関する事は、何一つ覚えていないと言う。隼樹を襲った目的、自分の意思なのか誰かに指示されたのか、黒幕が居るのなら仲間は何人いるのか、ソレ等の重要な情報は一切分からないの一点張りだった。

聴取を行ったはやて、立ち合ったなのはとフェイトの三人は、二つの可能性を考えた。

まず一つは、アリスが嘘を吐いてる可能性。最初に疑うべき事だが、アリスが嘘を吐いてるようには見えなかった。考え込む表情、悩む仕草、ソレ等の挙動に演技臭さが無い。長年執務官として多く

の犯罪者を検挙してきたフェイトの目から見て、嘘の可能性は低いと判断された。

もう一つは、記憶を消去された可能性。アリスの背後に黒幕の存在があり、洗脳して操って、六課に捕まった事で洗脳を解いたと同時に情報漏洩を防ぐ為に記憶を消去した。彼女が嘘を吐いてないとするれば、コレが一番可能性が高い。ガジェットの襲撃に合わせたような謎の影の襲撃、そして隼樹を連れ去ろうとした行動から、背後に何者かが糸を引いてるのは明らかだ。

洗脳の可能性を考え、女版隼樹の保護要望と襲われた隼樹が特に罰を求めない事を考慮して、アリスは機動六課で保護される事になった。

「それでな、アリスちゃんは保護する事に決まったんやけど、実際に面倒を見るのは隼樹さんをお願いするから、よろしくな」

「ええっ!？」

全く予想だにしていなかった決定に、隼樹は露骨に驚く。

子育ての経験も無いのに、子供の相手など出来ない。当然、隼樹は反論した。

「ちよっ……ちよっと待ってよ、はやて! 六課が預かるんでしょ? 何で俺が……?」

「確かに、六課で保護する言うたけど、局員で面倒を見ると言うてないで。それに、民間協力者とは言え、隼樹さんも立派な六課の一員や。何より、その子を拾ってきたんは隼樹さんやから、面倒みる義務はあると思うんやけどな」

語るはやての顔は、笑顔だった。まるで、この状況を楽しんでいるかのような。

そんなはやての笑顔に若干の苛立ちを抱きつつ、隼樹は言葉を詰

まらせた。六課の一員と言うのはあながち間違いではないし、女版
とは言え隼樹がアリスを拾ってきたのもまた事実な訳で。

それから、とはやては、チラッとアリスを一瞥する。傍で話を聞
いてるアリスは、無表情で大人しくしている。

「アリスちゃん、警戒してるみたいで私等には心開いてくれてない
みたいなんや。せやから、隼樹さんに頼るしかないんよ。お願いや、
隼樹さん！」

顔の前に合わせた両手を添えて、はやては頼んできた。

うーん、と隼樹は悩みながら頭を掻く。視線を隣に向けると、ア
リスも見つめ返していた。お姫様カットで揃えられた前髪が、幼さ
の残るアリスの可愛さを引き出している。目が合った瞬間、隼樹は
気恥ずかしくて顔を前に向き直した。

苦悩した末、隼樹は諦めたように言った。

「分かりました。俺が面倒見ます」

「ありがとうな！」

引き受けてくれた隼樹に、はやては笑顔でお礼を伝えた。

話が済んで、二人で部隊長室を出ると、廊下で待っていたセイバ
ーとオルタが寄ってきた。隼樹の傍に立ってるアリスを一瞥して、
セイバーが尋ねる。

「ジュンキ。はやてからの話は彼女に関する事ですか？」

「うん。俺がさ、この子の面倒見る事になっちゃったんだよ」

「ジュンキがですか？」

聞いた瞬間、セイバーはオーバーな位に驚いた。

まあ、彼女の反応も無理からぬこと。グータラなイメージが強い隼樹が子供の面倒を見るなど、想像し難い上に柄では無い。過去に幼い頃のフェイトと同居した経験があるが、その時だって握り飯を作ったくらいで、その他はフェイト自身や使い魔のアルフ、セイバーがこなしていた。

オルタから見ても、隼樹は子供の面倒を見る柄では無かった。

「貴様が面倒を見る事になるとは……無謀だな」

「ストレートな意見ありがとう。つか、俺だって不安なんです」

あまりに直球な意見に、隼樹は少し拗ねてみせる。地味男が拗ねてみたところで、全く可愛くないが。

その時、今まで沈黙していたアリスが口を開いた。

「黙って聞いていれば、勘違い無さならないで下さるかしら？ 私
が、この男の面倒を見るようなものです」

「え？」

怪訝そうに眉根を顰める一同に、アリスは続ける。

「眠りにつく前に、じゅんねーさまから言われました。「男のあたしは弱いから、アンタが護ってくれよな」って……。だから、私はじゅんねーさまのお言葉通りに、じゅんにーさまを側で護りするのよ」

「そんな事言ったの、女版俺っ……!？」

隼樹には、女の子になった時の記憶が無い、と言うよりあやふやなのだ。女になった、酷い事をした等おぼろげにしか覚えていない。アリスの口から、自分を護るよう女版の自分が命じたのを知って、

隼樹は複雑な思いを抱く。

そして、アリスの発言に、セイバーとオルタが対抗意識を燃やした。隼樹の護る剣であり、恋人である彼女達が黙っていられる訳が無い。

「ジュンキには私達がついています！」

「雑魚に務まるモノではない……！」

「あら？ 女の嫉妬は醜いわよ……？」

クスクス、と可笑しそうに笑うアリス。

挑発的とも受け取れる少女の笑いに表情を陰しくさせ、大人気なく睨みを利かせるセイバーとオルタ。

三人の間で、バチバチと激しい火花が散る。

静寂ながらも踏み込む事を許さない争いに、小心者の隼樹はただ静かに見守るだけだった。

＊

機動六課隊舎の食堂。

局員が集まり、朝食を摂っている。普段は平和な時間なのだが、今朝は少し違った。

あるテーブルで、他を寄せ付けない空気を漂わせているのだ。席に着いているのは、セイバー、オルタ、アリス、そして引き攣った笑顔の隼樹の四人だ。重苦しいオーラを放っているのは、当然二人の騎士王とゴスロリ少女である。『隼樹を護る女』と言うポジションを譲るまいと、対抗心と敵意を剥き出しにしている。お陰で、同じ席に着いてる隼樹は、落ち着いて食事も出来ない。しかし、当の本人達は黙々と料理を食べていた。

重苦しい空気の中、隼樹は念話で助けを求める。

（ザッファイー！ ヘルプミイイイイイ！）

（……すまん。我では助けられん）

（裏切り者オオオオオオオ！）

ほぼアッサリとザファイーラに見捨てられ、隼樹は念話でシャウトした。友情って儚いよね。

他の局員も、我関せずといった様子で食事をしていた。

その中には、フォワード四人や副隊長陣も含まれている。

「何だか、アソコだけ空気が違いますね……」

「隼樹さん、何だか辛そうにしていますし……」

「ああ。だが、間違っても助けにいかうとはするな。ミイラ取りがミイラになるだけだからな」

エリオとキャロの二人に、シグナムが厳しい言葉をかけた。二人が心配する気持ちも解るが、あの場は下手に介入するところらまで被害を喰ってしまう性悪空間なのだ。副隊長として、部下の犠牲を防ぐ義務があるシグナムは、隼樹には悪いが二人に釘を刺した。

ハア、と頷くエリオとキャロは、別の事に関心を向けた。

「それにしても……」

「お二人共、本当に沢山召し上がりますね……！」

二人が注目してるのは、セイバーとオルタの食事量だった。

料理が山盛りに積まれていた何枚もの皿が、あっという間に二人の口に吸いこまれ、胃に収まっていく様には圧巻した。エリオとスバルの前衛組はカロリーを多く消費するので、かなり食べる方である。しかし、騎士王の二人は、その更に上を行っていた。次々とお

かわりを頼んで、厨房の食材を食べ尽くさん勢いである。初めて二人の食べっぷりを見た時は、大食いのスバルとエリオも啞然となった。親友の大食いに慣れていたティアナでさえ、目を丸くして驚愕する程だった。

今でも驚きが抜けないエリオとキャロに、同席してるヴィータが言う。

「エリオとスバルは前衛組って事や毎日訓練で体動かしてるからだけど、アイツらの場合は単純に純粹に“大食い”なだけだからな。隼樹も前に、『食王』『腹ペコ王』なんて異名を付けてたっけ」

二人の食べっぷりを見て、エリオとキャロはヴィータの言葉に頷いた。

一方でシグナムは、隣の席で食事をしてるリインフォースに話を振った。

「それにしても、お前が“あの輪”に入らないとは意外だな」

「確かに、恋人として、隼樹を好いてる者として加わりたい気持ちはあるにはある……。だが、私が加われば、更に隼樹の精神に負担をかける事になる」

不参加は、自分なりに隼樹を想っての行為だった。

一ヶ所は不穏な空気だったが、他は割と平和な朝食の時間となった。

＊

食事を済ませた隼樹は、セイバーとオルタに連れられて自室にや

ってきた。

何でも、大事な話があるそうだ。アリスを同席させるか、セイバー達は少し考えたが、今回の件に一応関わりがあると言う事で部屋に招き入れた。

ベッドに腰を降ろす隼樹の隣に、さり気なくアリスが座る。その事に、セイバーとオルタは僅かに眉根を顰めたが、今から話す事は真面目で重大な事なので、今回は見逃す事にした。

若干の陰悪なムードを感じつつ、隼樹は遠慮がちに尋ねた。

「それで、話って何？」

「はい。実は、先日のホテル・アグスタの件で気になる事がありました」

「気になる事？」

片眉を上げる隼樹に、セイバーは続ける。

「ホテルの後方から接近してきた、謎の襲撃者の集団です。黒い影のような人型をしていました。数は多かったですが、単体での戦闘能力はさほど高くはありませんでした。おそらく、スバル達でも充分に倒せる位です」

「その雑魚キャラ集団が、どうかしたの？」

「はい。実は……」

そこでセイバーは一旦言葉を切り、より一層険しい表情を作った。やや雰囲気が変わり、室内も緊張感が漂い始め、間を取った後に続ける。

「影から感じた魔力が、あの防衛プログラムと酷似してるのです……！」

「えっ……!!？」

衝撃の事実を聞かされ、隼樹は動揺を禁じ得なかった。

防衛プログラムとは、はやてが所有している『夜天の書』を『闇の書』に変貌させた原因の恐ろしい殺戮プログラムである。『闇の書事件』で隼樹達と壮絶な死闘を繰り広げ、セイバーの聖剣によって細切れにされ、消滅したハズの過去最凶の敵だ。

「いや……いやいや、ちょっと待ってよ、セイバー！ そりゃあ、おかしいって……！ だって防衛プログラムは、セイバーが斬って倒したじゃん！」

「確かに。私の剣で、奴を斬り捨てました。ですがジュンキ、よく思い出して下さい。私に斬られた防衛プログラムは、その後どうなりましたか？」

「どうって……」

問われた隼樹は、必死に記憶を辿る。

あの時、隼樹の目の前で防衛プログラムはセイバーに斬られた。ソレは間違いない。そして、斬られた後の防衛プログラムは――。

「確か……塵になって消えたような……」

「そうです。あの時、私は防衛プログラムが消滅したのだとばかり思っていました。ですが、今回のホテルの一件でソレは疑わしくなりました。

ジュンキ……もしも、あの塵と化した現象が消滅ではなく、防衛プログラムが意図的に起こした事だとしたらどうでしょう？ 自分の身を護る為に、消滅を偽って離脱する為の逃亡手段だったとしたら……」

「まさか……！？」

「ジュンキ。防衛プログラムが、そのまさかをやる者だと言うのは、貴方も解っているハズです……！」

セイバーの鋭い眼差しと声を受け、隼樹は口ごもってしまう。

彼女の言う通り、防衛プログラムはまさかやる奴なのだ。隼樹
と言ったった一人の人間を消す為だけに、数百キロ範囲で反応消滅
アルカンシエル
を起こす魔導砲を利用しようとした悪魔なのだから。

動揺が収まらない隼樹に、セイバーが言う。

「現段階では、防衛プログラムが生存している可能性がある、と言う推測の域です。魔力の感覚が酷似していたと言う印象的な事だけで、決定的な証拠がある訳ではありません。現状では、確証を得るには、まだまだ証拠が足りませんから……。この事は、任務を終えた当日にはやてには話してあります。ですが、まだ他の皆には話していません。私の考え過ぎ、勘違いと言う事もありますから、軽々には不安を与えるような事は言えない。防衛プログラムの生存確認はまだですが、一応気を付けて下さい……。！」
「分かった……。！」

セイバーの言葉に、緊張した面持ちで隼樹は答えた。

＊

スカリエッティのラボ。

広いスペースを誇る研究室で、スカリエッティはご満悦な様子で笑っていた。理由は、ラボに訪れた客と同盟を結び、能力提供を受けた事だ。彼女の手が加えられた作品が、驚異的な能力向上を見せたのである。

上機嫌な様子のスカリエッティの前には、能力向上をしたガジェットと戦闘機人のデータが表示されていた。

「素晴らしいよ……！ キミが手を加えただけで、まさかここまで飛躍的に能力を向上させるとはね……！ 実に面白く、興味深いよ……！」

スカリエッティは振り返り、後ろの椅子に座ってる協力者に顔を向けた。

「防衛プログラム……！ いや、今は黒龍こくりゅうだったね……！」
「ふふ……！」

椅子に座る協力者——漆黒の衣を纏った美少女の名は、黒龍。十年前の死闘で、隼樹とセイバー、フェイト達の前に敗れ去った凶悪プログラムだ。長い時の中で力を付け、黒龍と新たに名前を持ち、姿も変えて復讐の機会を待ち焦がれていた。スカリエッティに背中を向けたまま、黒龍は妖しい笑みを浮かべる。

「我に不可能は無いっ……！」

影のかかった笑みには妖艶さの他に、邪悪な本性が滲み出ている。研究室の隅から、ウーノが厳しい顔つきで黒龍を見つめる。彼女を快く迎えたスカリエッティと違い、ウーノは危険を感じていた。

本当に、この女と手を組んで大丈夫なのだろうか。

言い知れぬ危機感を抱くウーノの脳裏に、ファミレスで仲間を誘った男の顔が過った。

開幕（前書き）

今回から、物語りは中盤戦に突入です！

開幕

世の中が理不尽なのは当たり前。

人間は自分達で“悪”を生み出しておきながら、“正義”を語って都合の悪いモノを排除しようとする。そして、犯した罪から目を逸らす。

欲望、願望、力、ちから金、ありとあらゆる物を手に入れ、欲求を満たそうと平気で他者を犠牲にするのだ。しかし、いざソレが自分に回ってくると、何とか逃れようと足掻く。全く、ふざけた生き物だ。

黒龍と新たに名乗って復活を果たした防衛プログラムは、広域次元犯罪者であるスカリエッティのアジトに身を置いていた。目的を達成させるには、手駒が必要だ。それに、スカリエッティは強力なロストログアを所有している。コレを利用しない手は無い。

スカリエッティの狙いは生命操作技術の完成とその空間作りだが、管理局排除と言う共通の目的から、難なく手を組む事が出来た。何体かの戦闘機人ナンバースからは警戒されているようだが、気にする事ではない。仮に何か仕掛けてきても、返り討ちにしてやろう。

場所は、研究室。黒龍は足組みをして椅子に座り、スカリエッティは小型モニターに映ってるウーノと何やら話をしている。特に聞き耳を立てる事なく、黒龍は手に持っているティーカップの中身を、口に含んだ。

話が終わったようで、スカリエッティが踵を返して歩み寄ってきた。

「ウーノからの報告では、近々、例の『マテリアル』がココに届くそうだ。もし本物ならば、アレを動かす“鍵”となるだろう……！」
「そうか……！」

静かにお茶を味わう黒龍の後ろで、スカリエッティは喜びを露にして笑っていた。

失敗が続いた中での唯一の成功例であり、ソレが遂に自分の手元に届くのだ。コレが嬉しくない訳が無い。物が手に入る前から、楽しみで仕方ない。何事も、始まる前や手に入れるまでが、テンションを高める時なのだから。

対照的に落ち着いた物腰をしている黒龍は、ティーカップを手近な机の上に置き、懸念を話す。

「輸送の途中に、何事も起きなければいいがな……」

「ああ、そうだね。だが、例えばアクシデントが発生したとしても、何ら問題は無い。キミが強化してくれた、私の作品を使って回収に向かわせればいい。アレは、必ずココにやってくるさ……！」

確信に満ちた声で、スカリエッティは断言した。

話を聞き終えた黒龍は、椅子から腰を上げた。

「少し出てくる……」

靴音を鳴らして、研究室を出た。

薄暗い研究室を後にした黒龍は、出入口となっている洞窟の穴から外に出る。夜空には、宝石のように輝く星々^{ほしほし}が、点々と散りばめられていた。穢^{けが}れの無い、純粋な美しさだ。

星空を見上げ、黒龍は呟いた。

「我と言う存在を生み出したのは、人間だ……！　そして、今の我を作ったのは、隼樹……お前だ……！」

正義も偽善も語らぬだけ、隼樹^{やっ}はまだマシな方だが。

「全て壊す……！ 殺して、奪って、破壊して、貴様等の全てを無に帰^きしてやろう……！」

突然吹いた風に黒い長髪をなびかせ、黒龍は憎悪に満ちた声を吐いた。

自分達で生み出した“悪”に殺されても、別に構わないだろう。人間共に、文句を言う資格などありはしない。因果応報と言うヤツだ。

＊

陽は再び昇り、真昼間のミッドチルダ。

首都・クラナガンには、今日も沢山の人が街中を行き交っている。近未来的な高層ビルが立ち並び、窓ガラスに日差しが反射して見た目的にも明るくなっていた。異世界ではあるが、街の中身は然程地球と変わりはない。ショッピングモールがあったり、ゲームセンターがあり、映画館もあり、道路には車も走っている。

機動六課のフォワード四人は今、クラナガンに来ていた。午前の模擬戦は、第二段階クリアの見極めテストだったのだが、新人四人は誰一人落ちる事なく合格となった。なのは達の訓練に加え、たまに行われるセイバー達との模擬戦も続いているのだ。コレで不合格だったら、それこそ大問題である。まあ、何はともあれ合格した一同は、デバイスリミッターを一段解除する事となった。そして、午後から丸一日は休みとなり、皆大喜びで街に繰り出した。実は、今まで午後の訓練が休みの時はあるにはあったのだが、前日のセイバ

―達との模擬戦での疲れが抜けきれず、部屋で寝てる事が殆どだった。オルタ曰く「限界までしごくっ！」だそうだ。しかし、今回は前日の模擬戦が休みだったので、疲労も深刻で無い新人一同は、久々に街に遊びに出たのである。なのは達隊長陣は、隊舎で待機となっている。

そして、クラナガンに出たのは、新人達だけではない。

場所は、クラナガンにあるパチンコ店。

台の前に座り、打ち続けている目の前で、釘に弾かれる銀玉が虚しく外れ穴に落ちていく。全ての銀玉が一番下の外れ穴に飲み込まれ、打っていた男は頭を抱えた。

「はあゝ！？」 あり得ねえゝ！ また負けたあゝ！」

敗北したのは、六課の民間協力者の葉谷資隼樹だった。

彼の後ろには、四人の女性が立って勝負の様子を眺めていた。白いシャツに青いスカートを履いた金髪の女性は、隼樹のサーヴァント・セイバー。その隣に居る黒いゴスロリ衣装を着たセイバーそっくりの女性は、彼女を黒化^{こくか}したセイバーオルタだ。青黒いゴスロリ衣装を身に付けてるのは、隼樹が保護しているアリスと言う名の少女である。最後の一人は、過去に隼樹の『イメージ』で蘇生したアリシア・テスタロッサで、フェイトの姉的存在だ。

完敗したマスターの後姿を見て、セイバーは呆れ顔になった。

「ジュンキ。もう気は済んだでしょう？ そろそろ……」

「いや、まだだ……！ まだ終わらんよ……！」

「こうやって人は破滅に進むのだな」

隼樹の諦めの悪さに、オルタは厳しくも的を射た意見を言った。そこへ、やんわりとした口調で、アリシアも止めに入る。

「でも、もう結構なお金使っちゃったから……。セイバーの言う通り、ここら辺が切り上げ時じゃないかな？」

「いや、次こそ勝つ……！」

険しい顔でパチンコ台を睨み、ブツブツと呟きだす。

「信じるんだインスピレーション……！ 感じるんだイマジネーション……！」

「貴方、『イメージ』使う気ですか！？」

隼樹の呟きを聞いたセイバーが、目を丸くしてシャウトした。自分のマスターは、何と『イメージ』によるイカサマと言う凶行に走る気のようなだ。

流石にソレはマズイと、セイバー達が止めようとしたが、先にオルタが彼の服の首根っこを掴んで、強制的に台から引き離れた。

「いい加減にしろ、クズが……！」

「だあああああ！ 待つて待つて待つて！ あと一回！ あと一回だけエエエエエエ！」

声を上げる隼樹だが、オルタは問答無用で店の外に連れ出す。

その様子を、セイバーは呆れ、アリシアは苦笑いを浮かべて見ていた。

「惨めね……」

最後にアリスが、小さく毒舌を吐いた。

パチンコ店を出た一行は、クラナガンの街中を歩いていた。パチンコで大敗して金をスツた隼樹は、落ち込んで足取りも重い。情けないマスターに溜め息をつき、セイバーは口を開いた。

「ジュンキ、しっかりしてください。今日は、この後やる事があるのでしょう?」

「う、うん……そだね……」

敗北のショックが抜けきれない状態で、隼樹は頷いた。

フォワード四人が第二段階クリアを果たし、午後は休日で街に繰り出す今日はイベント日でもある。この後、『聖王のゆりかご』なる古代兵器を動かす鍵となる少女を巡る戦いが起きるのだ。本当なら、まだ介入する気は無かったが、セイバーから防衛プログラム生存の可能性を聞いて、事情が変わった。万が一の事態に備えて、自分達も介入する事にした。

ちなみに、防衛プログラムの件を知っているのは、隼樹、セイバー、オルタ、事件関係者のアリス、部隊長のはやての五人だけだ。まだ推測の域を出ていないので、周りの皆に余計な不安や動揺を与えたくないのである。

これから起こる今日の事件や防衛プログラムの事を考えていると、休日を楽しんでいたスターズの二人から緊急連絡が入った。エリオが物音を聞き、路地裏でボロボロの衣服を着て倒れてる少女を発見したのだ。

アリスアのデバイスで受けた報告を聞いて、隼樹の顔つきが変わった。間違いなく、ヴィヴィオだ。

「来たあ……!」

コレが、新たな闘いの始まりだった。

幻惑

倒れてる女の子を発見した事で、休日返上で緊急に動く事になった機動六課。

隼樹達や隊長陣が現場である路地裏に駆け付け、医務官のシャマルが女の子の容態を診る。診断の結果、疲れて眠っているだけで異常は見られなかった。地下水路を長い時間歩いていたようで、しばらく目を覚ましそうにない。

女の子は、外見から年齢は五、六歳と推測される。長い金髪で、顔や素肌は汚れて灰色の衣服もボロボロになっている。更に、腕には鎖が巻かれており、先にはロストログアの『レリック』の入ったケースが繋がれていた。レリックの方は、発見したキャロによって早々に封印されて、ガジェットに感知されないようにしてある。しかし、鎖の長さから、繋がれていたケースは二個と考えられ、残りの一個は地下水路にあると思われる。

女の子とレリックケースはヘリで搬送する事になり、フォワード四人は現場調査も兼ねて地下水路にあると思われるレリック搜索に当たる。

なのは達が指示を出し終えたところで、六課のロングアーチから連絡が入った。地下水路と海上に、それぞれガジェットが出現したのだ。数は地下にはグループに分かれて約二十機、海上方面はソレ以上とのこと。海上で演習中だったヴィータが向かい、フェイト、リインフォースの二人も海上を飛行しているガジェットの対応に飛ぶ。

なのはは、搬送ヘリの側を飛行しながら護衛に当たる事になった。そして、隼樹達も動く。フォワード四人が居る路地裏で、今後の行動を考える。

「よし、じゃあ……俺とセイバー、アリスの三人はフォワード四人

と一緒に地下に……！ セイバーオルタとアリシアは地上で万が一の時の為にヘリの護衛をお願いします……！」

「うん。分かった！」

「敵は殺しても構わんのか？」

「いや、駄目に決まってるでしょう！」

物騒なオルタの問いに、思わず隼樹は声を荒げた。目線に向けてくるフォワード四人から少し離れて、潜めた声で話す。

「だ・か・ら、ナンバーズは殺しちゃ駄目だって言ったでしょう？俺の目的は、あくまでクソ脳髓共の犠牲にさせないように、ナンバーズを助ける事なんだから！」

「チツ……！」

「あっ！舌打ちした！今、舌打ちしたよ、この娘！^こ どんだけ殺^やりたいの……！？」

少々の不安は残るものの、後は常識人のアリシアに任せる事にした。

フォワード四人はバリアジャケットを纏い、甲冑姿となったセイバー達と共に地下水路に降りる。

オルタとアリシアも、地上からヘリの警護に着いた。

＊

地下水路に降りた一行は、捜査協力する事になった管理局の女性捜査官と通信で会話をしていた。

捜査官の名前は、ギンガ・ナカジマ。ラストネームから解る通り、スバルの姉である。髪の色は酷似しているが、長髪に青いリボンを

付けた姉の方が大人っぽく女性的な印象を受ける。スバルのシューティングアーツの先生であり、年も階級も二つ上なのだ。

大好きな姉と一緒に働けると知って、スバルは嬉しそうにしていた。笑っていると、気を引き締めなさい、とティアナに注意されてしまったが。

ギンガの話では、地下道でトラック横転事故が発生して、現場にはガジェットの残骸と何か重い物を引き摺った跡、それに壊れた生体ポッドが残されていたそうだ。生体ポッドの大きさは、およそ五六歳の子供が入る位のサイズだと言う。話を聞いた一同は、路地裏で保護した女の子の事を思い出して、彼女であると心中で確信する。そして、ギンガが言うには、同じような物を別件で見たそうだ。

人造魔導師計画の素体培養機。ギンガの推測では、女の子は人造魔導師の素体として、人工的に造られた可能性が高いらしい。

魔導師や局員でも無いセイバーも、人造魔導師の事は知っていた。彼女の弟子であるフェイトも、『プロジェクトF』と言う技術で人工的に生み出された人造魔導師なのだ。

人造魔導師の話が出た時、エリオが若干思いつめたような顔をしたが、幸か不幸か誰にも気付かれなかった。

その時、キャロのケリユケイオンが、球体を光らせて反応を表す。

『動体反応確認。ガジェットドローンです』

「来ます！ 小型ガジェット六機っ！」

キャロの言葉を聞き、全員が足を止めて戦闘態勢に入る。

＊

セイバー達が地下で戦闘を始めた頃、海上ではフェイト、ヴィー

タ、リインフォースによるガジェット殲滅が行われていた。リミッターがかけられているとは言え、機械に遅れを取られる事無く、圧倒して次々と撃墜していく。既に半数以上が、彼女達の手によって海に沈められた。この調子でいけば、割と早く海上の方は決着が付きそうだった。

しかし、相手はそう簡単には終わらせてくれそうになかった。

「アレは……増援か!？」

周囲のガジェットを破壊し尽くしたヴィータが振り向いた先に、新たなガジェットの群れが見えた。猛スピードで、こちらに接近してくる。

フェイトの周囲にも、増援のガジェットが飛び交う。その数は、50、60とこれまでとケタ違いに増えている。隊舎のロングアーチの方でも『実機』と確認しており、何より現場に居るフェイト達も視認していた。

フェイト達は、魔法を撃ってガジェットを撃ち落とそうとする。が、中には攻撃がすり抜ける機体があり、幻影が混じっている事に気付く。

「幻影と実機の構成編隊……!」

幻が混じっていると知った三人は、一旦攻撃を中止して守勢に入った。

ここまで派手な引き付けを言う事は、地下かへりに主力が向かってる事になる。しかし、だからと言って、海上ヨコを放り出す訳にはいかない。防衛ラインを突破されたら、街に被害が及ぶのは目に見えている。それに、地下とへりには、それぞれ頼もしい騎士が付いている。

だから、自分達の役目は、敢えて敵の策に嵌まってガジェットを

食い止める事だ。

ヴィータとリインフォースも、自分達が成すべき事を理解していた。

「ココから先には行かせねーぞ！」

「はい！」

ガジェットの群れを睨み、再び戦闘を開始した。

その頃、フェイト達が交戦してる地点から離れた上空に、人影が佇んでいた。

足下には、魔法陣のような緑色の術式が発現している。

雲の上に佇む人影の正体は、女性だった。長い茶髪をヘアバンドで左右に分け、可愛い顔には丸眼鏡をかけている。全身に青と灰色を基調としたボディースーツを着用しており、身体のラインを浮かせている挑発的な格好に、背中には白いケープを羽織っている。彼女は、ナンバーズ？4のクアットロだ。

目の前には中型モニターが開かれ、ガジェットと交戦しているフェイト達の姿が流れている。ソレをクアットロは愉しそうに、それでいて小馬鹿にしたように笑う。

「うふふ……！ 流石は、エリート揃いの機動六課の中でも超エリート
の隊長陣……！ でも、リミッターが付けられてる今の貴女達
如き、黒龍お姉様から頂いた能力を使うまでも無いわぁ……！」

クアットロは笑みを浮かべたまま、右手を前にかざした。

「このクアットロのIS『シルバーカーテン』——嘘と幻のイリュ
ージョンで、もう少し躍ってもらいましょう」

＊

一方、地下でもガジェットとの交戦が行われていた。
海上と違い、相手のガジェットは全て実機である。

突っ込んでくるガジェット？型の群れに、ティアナが魔力弾を撃ち込む。当然、向こうはAMFを張って防いでくる。だが、ソレは予想通りの行動だった。ティアナの魔力弾は、本体にこそ届かないが、AMFを破って魔法が通る状態を作った。その隙を狙って、スバルとエリオが拳と槍でボディを貫き、ガジェットを破壊する。地下水路で爆発が起こり、破片が飛び散る。

新人達は、危なげなくガジェットに勝利した。

闘いの様子を観ていたセイバーは、微笑みを浮かべていた。

「皆動きに淀みが無く、良いコンビネーションでした」

「お上手ですね」

アリスも素直な感想を口にした。

「えへへ。コレも、セイバーさん達の教導のお陰です！」

笑顔で答えるスバルに、セイバーは心中に喜びを抱く。十年前にフェイトを鍛え、なのはに勝利した時も同じ気持ちだった。教え子の成長は、師にとってこの上なく喜ばしい事だ。

全機破壊を確認して、キャロが言った。

「ケースの推定位置まで、後もう少しです」

うん、とスバルが頷いた直後だ。

突き当りの曲がり角で、突如爆発が起こった。メンバーは即座に反応して身構え、油断なく曲がり角を見据える。爆発の際に生じた粉塵が晴れていき、中から一人の女性の姿が現れた。女性は、左手に籠手型デバイス『リボルバーナックル』、両足にローラーブーツ型デバイス『ブリッツキヤリバー』を装着している。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

女性を見た瞬間、スバルは弾かれたように名前を呼び、ティアナも笑顔で声を上げた。

彼女が、スバルの姉であるギンガ・ナカジマ。二人に笑顔を向けて、近付いてきた。

「一緒にケースを探しましょう。ココまでのガジェットは、殆ど叩いてきたと思うから」

「うん！」

ギンガの言葉に、スバルは笑顔で答えた。心から慕う姉と出会って、更に元気が増している。

エリオとキャロは、そんな仲良し姉妹の様子を後ろから眺めていた。すると、ギンガに笑いかけられ、敬礼で挨拶をした。

それからギンガは、スバルとティアナの後ろに居るセイバーとアリスに気付いた。

「スバル。その人達は……」

「ああ、紹介するね。こちらは、セイバーさん。なのはさん達と一緒に、私達の教導をしてくれてる民間協力者。それで、この子は六課で保護してるアリスだよ」

紹介を受けたセイバーが、ギンガの前に歩み寄り、会釈した。

「初めまして、セイバーです」

「ああ、貴女がセイバーさんですか！　こちらこそ、陸士108部隊所属のギンガ・ナカジマ捜査官です。貴女の事は、妹のスバルからメールで聞いてます。いつも妹がお世話になってます」

「いいえ」

セイバーとギンガは、笑顔で挨拶を交わす。

ふとセイバーは、何か忘れてるような気がして、後ろを振り返った。その時、視界にある人物を捉えた。

「あ……」

「え……？」

セイバーの眩きにつられ、皆も彼女の視線を追った。

通路の隅っこに、蹲ってる隼樹の姿があった。冷たい床に『の』の字を書いて、眩く。

「ああ、そうだよ……。俺は皆と比べて地味だし、セイバーのような強さも無いし……アリスのような魅力も無い……目立たなくて、存在を忘れられて当然さ……。だから、ぜんぜん気にしてないさ……。そう、地味こそ俺のアイデンティティなんだから……」

一人空気と化していた隼樹は、完全にいじけていた。

シリアスな感じが、一転して気まずい空間に変わった。

哀しみの漂う背中を向ける隼樹を見て、ギンガは苦笑いを浮かべる。

「え、ええっと……スバル、あの人が、隼樹さん？」
「う、うん」

スバルも場の気まずさを感じて、引き攣った笑顔で頷いた。
どう声をかけようか困惑する一同の中で、アリスだけが平然と言った。

「惨めね……」

「容赦無し!？」

フォワードメンバーは、思わず声を上げた。

サーヴァントのセイバーが、静かに隼樹に歩み寄る。

「ジュンキ、元気を出してください。貴方の良いところは、私が解っているつもりですから」

「……ありがと」

背中を向けたまま、隼樹は静かに礼を言った。

セイバーのお陰で何とか隼樹は立ち直り、新たにギンガを加えて一行は奥に進んだ。

途中でガジェットの群れと遭遇したが、厳しい訓練を経たスバル達の敵では無く、見事なコンビネーションで撃破していった。彼女達の活躍で、今のところセイバーも力をちから温存出来ている。

そして一行は、難なく目的地に到着した。レリックのある場所は、狭い通路と違って広い空間になっていた。一行は、手分けしてレリックを探索する。

やがて、フリードを連れたキャロがレリックケースを発見した。
駆け寄り、慎重にケースを持ち上げる。

「ありましたー!」

声を上げ、場に居る一同に知らせた。

何とか先にケースを確保出来た事に、皆ホッと安堵した。場の空気が僅かに弛緩した、その時だった。

地下空間に突如、壁を蹴る音が鳴り出す。

音に気付いた一同は、再び気を張って身構える。

「何、この音……？」

辺りを見回すが、何も見えない。空間は薄暗いが、全く視認出来ない程では無い。

壁を蹴る固い音が途切れたかと思えば、変わってバシャバシャと水の上を駆ける音が鳴った。

耳を澄ませて音の出所を探るセイバーが、いち早く顔を向け、音に合わせて飛沫を上げる水流を見つける。

危険を察したセイバーは、一瞬の間に“見えない敵”に斬りかかるよりもキャロの護りにつく事を判断した。自分達と同じように地下にやってきたのなら、狙いは十中八九リックだ。

次の瞬間、キャロの前に“見えない敵”が跳躍し、自分の前に生じた四つの魔力弾を発射した。反応する間も無く、攻撃を受けようとしたキャロの前に、セイバーが割って入り、

「はああああっ！」

両の手で握る不可視の剣を振るい、対魔力で掻き消した。

「セ、セイバーさん！？」

「キャロ！ ジッとしてて！」

キャロをその場に置き、セイバーは跳んで迎撃に向かう。

奇襲に失敗した不可視の敵も、宙から突っ込む。互いに視認出来ない得物を振り抜き、二人は交差する。一瞬一撃の後に、セイバーはキャロの傍に着地した。

後ろに居るキャロが、心配そうに声をかける。

「セイバーさん……！」

「大丈夫です。心配いりません」

「セイバー！」

隼樹達も駆け寄り、セイバーとキャロの元に集まった。

集合した一同の前で、不可視の襲撃者が姿を現した。

全体的には人の形をしているが、容姿は別物だ。顔には赤く光る鋭い四つ目、首にはマフラーのような物が巻かれており、鎧のような黒い塊に覆われ、腰の辺りから尻尾を生やしている。人間と昆虫を合わせたような怪人に、フォワード四人とギンガは息を飲んだ。すると、怪人の後ろから人影が現れた。紫色の長髪の少女で、キャロと同じ年位に見える。黒いドレス衣装を着て、両手にはグローブ型デバイス『アスクレピオス』がはめられている。

少女の名前はルーテシア・アルピーノ。一応、スカリエッティの協力者である。

「ほら〜！ だから言っただろう？ ガリユーだけじゃ厳しいってさ！」

ルーテシアの背後から、更に別の少女が出てきた。

掌サイズの小さな身長で、長い赤髪に腰の辺りから同色の翼を生やして、妖精と言うより小悪魔の方がシックリくる容姿をしている。彼女は、烈火の剣精・アギト。融合騎である。

「この騎士の相手は、“コイツ”にやらせればいいんだよ！」

デカイ声を出して、アギトは後ろを指差す。

目の前の敵に注意を向けつつ、一同はアギトが示した方を見た。足音を鳴らして、誰かが近付いてくる。

そして、目で姿を確認した瞬間、一同は驚愕した。

「えっ……!？」

闘いの場において、冷静沈着でいるセイバーでさえ、思わず目を丸くして声を上げた。

暗闇の中から出てきたのは、銀色の鎧を纏った騎士だった。金髪を青いリボンで後ろに結い、凜とした顔をした少女騎士は見間違えるハズも無い――。

「セイバー……!？」

度肝を抜かれた様子で、隼樹は騎士の名を呟いた。

ルーテシア達の前に歩み出たのは、もう一人のセイバーだった。フォワード四人とギンガの動揺も大きく、二人の騎士を交互に見る。我が目を疑いたくなる光景だ。

「セイバーさんが、二人……!？」

ルーテシア側に居るセイバーが不可視の剣を構え、隼樹側に立つセイバーを見据えて、口を開く。

「貴女の相手は私が務めましょう……!」

最初こそ動揺したセイバーだったが、すぐに心を鎮め、同じように不可視の剣を構えた。以前に自分の身からオルタが出現した経験

があるので、いち早く平静に戻れた。

驚愕していた隼樹も、目の前に立ちはだかる“もう一人のセイバ―”の正体を直感的に察する。

「はは……！ あの野郎、やりやがった……！」

他の皆も冷静になるよう努めて、戦闘態勢を整えた。

＊

廃棄都市。

地下に居る隼樹達の真上辺りの廃ビルの中に、黒龍の姿があった。椅子に座って足組みをして、目の前に出しているモニターの映像を眺めている。映し出されているのは、隼樹達が居る地下の様子だ。同じ姿の騎士が対峙して、両陣で今まさに戦闘が開始されようとしている。

モニターを前に、黒龍は静かに笑う。

「ふふふ……！ 十年前の我とは違うぞっ……！」

投影

廃棄都市区域の地下で、激しい戦闘が繰り広げられていた。

「うりゃあああああ！」

炎属性のアギトは、宙に浮いて上から火炎弾を相手に向けて放つ。スバル達は咄嗟に後ろに跳び、直撃を避ける。着地したメンバーの前には、火炎を受けて発生した水蒸気と粉塵が立ちこめて視界が悪くなっていた。

その時、先頭に立つギンガが気配を察したと同時に、煙の中から昆虫怪人——召喚獣のガリユーが突っ込んできた。振り上げる右腕の手首上部から、鋭い刃が突き出る。いち早く気配を察していたギンガが、左拳を構えて迎え撃つ。

「はああああああっ！」

突き出す拳と刃が衝突して、激しい衝撃と火花を生じさせる。小競り合いは長くは続かず、エネルギー同士のぶつかり合いで爆発を起こして、両者は爆風を受けて後ろに飛ばされる。

二人に目立った外傷は無く、すぐさま構えを取った。

「やあろオオオオオオ！」

宙に佇むアギトが、再び火炎弾を放つ。

しかし、フォワード陣も避けてばかりではない。ティアナが二丁のクロスミラージュを構え、迫りくる標的を狙って魔力弾を撃つ。軌道を読んだ精密射撃で、見事に狙った火炎弾を相殺させた。こういう時の為に、毎日訓練してきたのだ。

「ちつくしょう……！」

自分の攻撃が難なく防がれ、アギトは露骨に悔しがる。

ティアナ達の目的は、あくまでケースの確保だ。しかし、相手も同じケースを目的としているようで、そう簡単に逃してくれそうにない。だが、どうにか出来ない相手では無いのも事実だ。スバルとギンガ、エリオも加わればガリユーは押さえる事が出来るだろうし、アギトの火炎弾もティアナの射撃で撃ち落とせる。気がかりがあるとなれば、ルーテシアだ。彼女の魔法がどれ程のものなのか、未知数であるが故に油断は禁物だ。

それに、もう一つ問題がある。自分達が相対してるモノより、ずっと大きな問題が――。

「ティア……！ セイバーさん達、大丈夫かな……？」

「正直分らないわ。けど、闘ってるのはセイバーさん達だけじゃなくて、私達も同じよ。だから、自分達の闘いに集中するわよ！」
「うん！」

ティアナの言葉に、スバルは力強く頷いた。

厳しい訓練の中で、スバル達は“何が何でも生き延びる事”を学んできた。他人の心配をしてる暇があるなら、まず自分の身を考えて。それで生き延びる事が出来たら、初めて他人を助けに行け。自分が生きていなければ、助けに向かう事すら出来ないのだから。

逞しく成長した妹の^{スバル}顔を見て、ギンガは嬉しくなって顔が綻んだ。それから直ぐに気を引き締めて、眼前の敵と向き合う。

＊

「はああああああつ！」

気合いと共に不可視の剣を振り下ろし、眼前で閃光のような火花を散らす。

ティアナ達から離れた所で、セイバーも自分の偽者と闘っていた。二人の剣のぶつかり合いは、薄暗い地下空間で眩しい点滅を繰り返す。普通ならば、目に見えない剣の軌道など読めないが、自分の太刀筋故にセイバーは対応出来ている。剣の長さも把握しているので、攻撃の間合いも解る。

だが、両者には違いがあった。

互いに神速の域に達する剣戟を繰り返して、激しく打ち合う。空気を振動させ、甲高い金属音を響かせ、激戦の有り様を地下空間に広める。

「くっ……！」

剣を交えるセイバーは、僅かに表情を険しくさせた。

初撃に剣を交えた時から、ある懸念を抱いていた。ソレが、多く打ち合わない間に確信へと変わった。

一見すると、二人のセイバーは互角の闘いを演じている。だが、実際は違う。二人の実力は互角ではなく、紙一重で偽者が上なのだ。その証拠に、セイバーは僅かだが押されている。力負けだけでなく、剣戟の速さも偽者が上回っており、徐々に防戦一方の形になっていた。本人同士の本来の実力が互角ならば、考えられる可能性は魔力供給だ。マスターからの魔力供給の量が、偽者の方が僅かに上回っている分、本物より力を増していると考えられる。

嵐のような激しい剣戟の中で、偽者は横薙ぎの一閃を奔らせる。対するセイバーは剣を縦にして防ごうとするが、僅かに力負けして押され、体勢を崩されてしまう。

「ぐっ……！」

「はあああああああっ！」

相手の体勢を崩したところで、偽者は上段から不可視の剣を振り下ろし、豪快な一撃を放つ。

咄嗟に後ろに跳び、間一髪でセイバーは剣戟を躲す^{かわ}。だが、避けきれずに額から一筋の血が流れる。

厳しい戦況に、セイバーは冷や汗を垂らした。強化された自分を倒すには、どうすればいいのか。単純に魔力供給の量を増やしたとしても、一時的対処に過ぎない。すぐさま、相手も量を増やすハズだ。確実に相手を倒す方法で無ければ駄目だ。

しかし、セイバーの思考は、偽者の猛攻によって強制的に中断される。

「はっ！」

「はあああっ！」

劣る実力を気力で補い、セイバーは剣戟の嵐に身を投じた。

「セイバー！」

「じゅんにーさま！ ジッとして！」

パートナーの危機に声を上げる隼樹を、前に立つアリスが制した。セイバーが偽者に苦戦している一方で、隼樹とアリスはガジェットの群れに囲まれていた。小型の？型と大型の？型が数十機で、黄色いレンズからの光線や太いアームで攻撃を仕掛けてくる。

隼樹が『イメージ』で全方位系の障壁を張って攻撃を防ぎ、アリスが頭上に展開させた魔法陣から鉄球を飛ばして返り討ちにする。

前回の女版隼樹との戦闘では、前方にしか攻撃を向けられない欠点を衝かれたアリスだが、今回は壁を背にして後方の隙を無くした状態を作っていた。

アリスの攻撃は鉄球による投擲なので、加えている魔法をAMFで無効化されても鉄球本体はガジェットボディに撃ち込まれ、破壊していく。しかも、一度撃ち出された鉄球は、貯蔵庫に戻して再び使用する事が出来る。鉄球自体が破壊されない限り、無限に近い状態で発射し続けられるのだ。

アリスの後ろに立つ隼樹は、険しい顔で頭を掻き乱す。

「くっそー！ 防衛プログラムの奴、『イメージ』でセイバーを作りやがって……！」

防衛プログラムは、過去の死闘で隼樹の『イメージ』を蒐集して自分のモノにしている。一度セイバーを取り込んでいたので、想像するのは容易だった。

アリスの後ろでセイバーの闘いを見守っていたが、実力の差から徐々に押されている事に気づき、冷静さを欠如させる。

「じゅんにーさま……！」

その時、ガジェットの相手をしているアリスに声をかけられた。

「じゅんねーさまのお言葉通り、貴方は弱いよ。だったら、出来る事なんて限られているでしょう？」

「あ……」

アリスの言葉を聞き、隼樹は目を見開く。

お前は“想像する者”だ。現実で敵わぬならば、想像の中で勝て。

かつて、アーチャーに言われた言葉が脳裏を過った。
大切な事を思い出した隼樹は、心を落ち着ける。

「そうだ……そうだった……。ありがとう、アリス……！」

「貴方を護るのがじゅんねーさまからの命令で、私はソレに従って
るだけよ。ソレに、貴方が死んでしまったら、じゅんねーさまに会
えなくなるわ」

「それでも、ありがとう……！ この闘いが終わったら、アイツに
会わせるよ……！」

隼樹の礼を聞いたアリスは、小さく顔を動かして横目で後ろを見
た。すぐに、プイツと前に向き直ってしまったが。

アリスのお陰で冷静になり、自分のやるべき事を見出し、隼樹は
思考を働かせた。

——考える……！ まず考えるんだ、俺……！ 俺に出来る事な
んて、想像して作る事だけだっ……！ なら考えて、セイバーを助
ける方法を見つけるんだっ……！

必死に頭を働かせ、この戦況をひっくり返す方法を考える。相手
は、『闇の書事件』でのセイバーをコピーしたような奴だ。しかし、
ソレだけでは本物のセイバーが押されてる理由にはならない。おそ
らく、多くの魔力供給によって実力を上げているのだろう。

——なら、俺も供給量を上げるか？ いや、駄目だ……！ そん
な事しても、相手が同じ手に出たら意味が無い……！ 単純に力を
上げる以外の手を考えるんだ……！ 何か無いか？ 何か……！？
オリジナルにあって、コピーに無いモノ。

そこまで思考が至った時、ハッと隼樹は気付く。

——そうだ……！ セイバーには、まだもう一つ見せてない宝具
がある！ ソレを使えば……！

勝機を見出したかのように思えたが、すぐにかぶりを振った。

——いや、駄目だ……！ アレは強力過ぎる宝具故に、ランクが
ケタ違いに高過ぎる……！ とてもじゃないけど、俺の『イメージ』
じゃあ再現出来ねえ……！

体内のジュエルシードが再現出来る武器には、ランクの限界がある。
隼樹が見つけた切り札を使えば、戦況をひっくり返す事が出来る
だろうが、作れなければ意味が無い。

こうしてる間にも、セイバーはどんどん追い詰められている。早
く何とかしないと、取り返しのつかない事になってしまう。

——くそっ……！ どうすればいい……？ どうすればいいんだ
よ、アーチャー……！？

かつて絶望の淵にいた自分を奮い立たせてくれた男を、頭の中に
思い浮かべた時だった。

体に閃光が走った。

ある方法を見つけ、目を見開く。

「そうだ……！ その手があった……！ 要は作り手だ……！」

逆転の手を思い付いた隼樹は、早速『イメージ』を発動させた。

セイバーは、自分の偽者との激戦を続けていた。

重い剣戟が振動となって手に伝わり、僅かに防御の動きを鈍らせる。
だが、太刀筋が自分である事が救いとなり、致命傷は避けられ
ている。偽者も、このままでは相手を倒せないと悟ったようで、剣
を引いて後ろに跳び、セイバーから離れた。

そして、両手で掴む不可視の剣を、高々と頭上に構えた。次の瞬
間、剣を中心に台風のような暴風が地下空間に吹き荒れる。

「うわっ……！？」

「な、何……！？ この風は……！？」

離れて闘っていたティアナ達とルーテシア達も、あまりの強風に動きを止めた。

偽者の構えから、セイバーは何をしようとしてるのか察し、驚愕して目を見開く。

「まさか、宝具を使う気ですかっ……!？」

不可視たらしめている風の鞘『風王結界』を解く事は、聖剣の力の解放——即ち宝具の使用を意味する。

しかし、まさか地下で使用するとは、思っていなかった。セイバーの宝具『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}は、強力過ぎる故に地下空間では使えない。使用すれば、地下を崩して仲間を危険な目に遭わせてしまうからだ。しかし、偽者の目的はあくまでセイバーを倒す事のようで、ルーテシア達を気遣う様子も無い。どうやら、防衛プログラムに生み出されただけあって、内面でもオリジナルとは若干の違いがあるようだ。

しかし、問題はそんな事より、偽者の宝具にどう対処するかだ。セイバーは、苦渋の決断をした。

「ならば、私のエクスカリバーで完全相殺させますっ……!」

同じ技を放つ事で、相殺して掻き消すのがセイバーの狙いだ。

しかし、少しでも威力が違えば、相殺し切れずに地下空間を崩してしまう可能性がある。強過ぎても弱過ぎても、地下を崩す結果に成りえるのだ。が、セイバーの中では、完全相殺以外に手段は無かった。

覚悟を決め、同じように不可視の剣の封印を解こうと、両腕を上に掲げた時だった。

「セイバー！ 撃つなアアアアアア！」
「えっ……！？」

突然上がった隼樹の声に、セイバーは聖剣解放を躊躇した。
すると、彼女の前に一人の男が割り込んだ。赤銅色の髪、白と青を基調といったシャツとジーンズを着た男の背中が目に映った。

男は、セイバーに背を向けたまま声を上げた。

「俺がアイツの攻撃を防ぐ……！ その隙に、お前の剣で決めるんだ……！」

「貴方は……！？」

訝るセイバーの問いには答えず、男は静かに目を瞑り、精神を集中させる。

「トレース・オン
投影開始っ……！」

鍵キとなる呪文を呟き、男は魔術回路を総動員して投影を開始した。
作り出すのは、迎え撃つ剣では無い。
あらゆる攻撃から、主を護る無敵の盾だ。

「エクスカリバアアアアアアアアア！」

偽者の聖剣から、凄まじい威力の魔力光が放たれる。

男は取り乱さず、慌てる事無く投影を続ける。

ソレは、本来彼女セイバーが持っているべきだった、失われた宝具。

そして俺——衛宮士郎えみやしろの中に持つ唯一無二の護りの宝具にして、
彼女が夢見た理想郷。

その名は——。

「『^{アザアロン}全て遠き理想郷』っ……！」

セイバーの前に立つ士郎の眼前に、黄金に輝く一つの鞘が投影された。聖剣の輝きに勝るとも劣らない、その美しい輝きは、まるで主を護らんとする光の盾のよう。

その場の全員が見惚れる中、迫りくる聖剣の刃が、鞘に衝突する。だが、その攻撃は鞘の持つ防御能力の前に、容易く防がれた。

「何っ……!？」

宝具による一撃を防がれ、偽者は激しく動揺する。

そして、決着の刃が彼女に迫った。

一瞬の攻防の後に、セイバーは神速の速さで踏み込み、間合いに入り込んだ。偽物が迎え撃とうと剣を振るうが、もう遅かった。セイバーの横薙ぎの一閃が、偽者の体に奔る。直後、二人の動きは静止した。

「がはっ……!」

短い沈黙を破ったのは、偽者の声だった。口から血を吐き、斬られた傷からは鮮血を噴き出し、うつ伏せに地面に倒れた。

意識を失った彼女の体は薄れていき、やがて消えた。

決着がつき、セイバーは振り返って士郎を見た。

「貴方は……」

「こっちじゃあ、初めましてになるな。俺は、衛宮士郎。隼樹に喚よばれてきたんだが、間に合って良かった……!」

「士郎……。ありがとうございます。貴方のお陰で助かりました」

礼を言った後、セイバーはハッとなる。

「そうだ……！ ジュンキっ……！」

振り向いてマスターの安否を確かめると、ガジェットの残骸に囲まれ、アリスの後ろで膝をついてる隼樹の姿が見えた。

隼樹もセイバーが助かり、勝ったを見届けて、緊張の糸が切れて項垂れる。

「間に合ったあ……！」

「ジュンキっ……！」

急いでセイバーは、隼樹に駆け寄った。
肩に手を置き、声をかける。

「ジュンキ？ 大丈夫ですか？」

「あ、ああ……！ セイバーは……？」

「私も大丈夫です。ところでジュンキ、彼は一体……？」

隼樹が無事な事に安堵しつつ、セイバーは士郎に目を向けて尋ねた。

「ああ……士郎はね、セイバーのもう一つの宝具を持つ、ある意味セイバーの本当のマスターだよ……！」

「私の……？」

怪訝そうに片眉を上げるセイバー。

衛宮士郎は、小さい頃に冬木市で起きた聖杯戦争による大災害で、生死の境をさ迷っていた。ソコに助けに現れたのは、彼の義理の父親となる衛宮切嗣である。当時、セイバーのマスターであった切嗣は、死の淵に立たされていた士郎の体に“ある宝具”を仕込み、命

を救った。士郎の命を救ったその宝具こそ、先ほど聖剣の一撃を防いだアヴァロンだ。

『全て遠き理想郷』。セイバーの聖剣・エクスカリバーの鞘にして彼女の失われた宝具。持ち主の傷を癒し、老化を停滞させるだけでなく、あらゆる物理干渉・並行世界からのトランスライナー、多次元からの通信もシャットアウトする事が出来る能力は、既に『魔法』の域に達している。抜き身の刃を護る鞘のように、持ち主を護るまさに無敵の盾なのだ。

「俺の『イメージ』じゃあ、セイバーの鞘は再現出来ない。だから、セイバーの鞘を作る人物を、『イメージ』で実体化させたんだ。あの鞘を作るのは、世界中で士郎だけだからね」
「そういう事でしたか……」

セイバーの手に支えられてる隼樹は、安心して半面、自分を情けなく思っていた。本当なら自分がセイバーを助けたかったが、力が足りずに不可能だった。

だから、セイバーを救ったのは自分では無く、士郎だ。彼女の本当のマスターである彼が。

そう思った時、セイバーが言った。

「ジュンキ。ありがとうございます」

「え……?」

隼樹が顔を向けた先には、セイバーの微笑みがあった。

「貴方が士郎を喚んでくれないければ、もしかしたら私は敗れ、最悪の場合消滅していたかもしれません。貴方が居たからこそ、私はこうして生きて、貴方の傍に居るのです」

「ああ、セイバーの言う通りだ」

士郎も歩み寄ってきて、笑顔で言う。

「隼樹が喚んでくれなきゃ、俺もセイバーを助ける事は出来なかった。アンタがセイバーのマスターで、良かったよ」

セイバーの感謝と士郎の嘘偽り無い言葉に、隼樹は不覚にも嬉し泣きしそうになった。気恥かしさと照れから、咄嗟に顔を逸らす。女の前で泣くのは恰好悪いと男の意地で、何とか涙を堪えた。すると、士郎が爽やか笑顔で挨拶をする。

「それじゃあ、また何かあったら喚んでくれ。セイバーを頼んだぞ……！」

「あ、ああ……！　ありがとう、士郎……！」

隼樹の礼を受け、士郎は消えた。最後まで爽やかな好印象で、本当^{アーチャー}に未来の自分と別人である。一体未来でどんな過酷な体験をしたのか、想像もつかない。

「残るは彼女達ですね」

真顔になったセイバーの視線の先には、ルーテシア達が居た。フオワード四人とギンガ同様に、自分の範疇を超えた闘いに面食らって固まっている。

「ジュンキ、彼女達はどうするのですか？」

「そうだな。……まあ、ココで捕まえるのは時期尚早だから、逃がしちゃおうか」

隼樹は立ち上がり、ルーテシア達に向かって声を上げた。

「あのー！ キミ達が探してるレリックは、いくつの番号なのー？」

本当は知っているのだが、ティアナ達が居る手前では下手な事は言えない。

地下空間に響く隼樹の声で、ようやく一同は我に返り、ルーテシアは口を開く。

「11番……」

「あー、じゃあ悪いけど、ルシエさんが持ってるヤツとヘリにあるのは、どっちも11番じゃないから、この場は引いてくれないかな？ 嘘だと思うなら、遠目からでも確認させてあげるよ？」

「ちよっ……ちよつと隼樹さん！？」

「ままままま、ティアナさん！ 俺等の今回の目的は、あくまでレリックの確保なんだから、大目に見てあげようよ」

逃がそうとする隼樹と局員として見逃せないティアナが、声の響く地下で口論を始める。

その間にルーテシアは、どうしようか迷っていた。もし、本当にキャロが持っているのが11番で無ければ、ココで無駄に戦闘を続ける必要は無い。それに、出来る事なら大切なガリューも傷つけない。

考えた末、ルーテシアは彼の言葉を信じて、撤退する事にした。

「ガリュー、アギト、行こうか」

「あっ！ ルーラー！」

ガリューとアギトを呼び、ルーテシアは転移魔法の魔法陣を足下に出した。

その事に気付いたギンガ達が、止めようと動く。

「待ちなさい！」

「ああああああ！ アレは何だっ！？」

「えっ……！！？」

突如響き上がった隼樹の声に、一同は足を止めて振り返った。

しかし、ドコにも声を上げるような異常は見られない。

訝る一同の中で、ハッとティアアナが振り向いた時には、ルーテシア達の姿が消えていた。

隼樹の行動が、自分達の注意を引き付ける演技だと気づき、ティアアナは顔を真っ赤にさせて詰め寄った。

「ちょっと、隼樹さん！ どういうつもりですか！？」

「いや、ゴメン！ ホントにゴメン！ 今回だけだから……！！」

「そういう問題じゃありません！」

ティアアナは完璧に怒り、隼樹に説教を始めた。最後の方で、今回の事は八神部隊長に報告する事を伝えたと、隼樹は頭を抱えて暗く高い天井を仰いだ。

まだ怒りが収まらないティアアナを、スバルやギンガ達が宥める一方で、セイバーはアリスに歩み寄った。

「アリス」

「何かしら？」

「ジュンキを護っていただいて、ありがとうございます」

「……別に」

照れ隠しするように、アリスはソッポを向いてしまった。

＊

「ほう……まだ、そのような宝具があったか……」

地下の闘いを観戦していた黒龍は、興味深そうに呟いた。セイバ
ーの鞘の防御能力には驚かされたが、すぐに顔に笑みを作った。

「あの力も、いずれ手に入れたものだ……！」

用は済んだと言わんばかりに、黒龍も廃ビルから姿を消した。

投影（後書き）

うゝん。戦闘描写を書いてる時に、いつも思うけど……コレ、ちゃんと書けてるのだろうか？　もし、よろしければ読者の皆さんからのご意見お待ちします。
では。

強化（前書き）

今回の話で、クアットロちゃんと悪っぽく書けてるかな？
書けてるといいな。意地悪くて、悪っぽいのが俺の大好きなクアットロだから。

強化

廃棄都市の上空を、ヘリが飛行していた。ヴァイスがパイロットを務め、シャマルと路地裏で発見した金髪の少女を聖王医療院に運ぶのである。ヘリの中にはレリックも積んであり、封印は施してあるが、万が一の事態に備えてなのはが側を飛んで護衛にしていた。そして案の定、航空型のガジェット？型の群が接近してきて、なのはが迎撃に向かう。

「アクセルシューター！」

複数の桜色の魔力弾を操り、襲い掛かるガジェットの機体に撃ち込む。エースオブエースの魔法は、AMFを突き破ってガジェット本体を次々と撃ち落としていく。相手のミサイル攻撃には、防御魔法を張って防ぎ、お返しとばかりに砲撃魔法を放ってガジェットを飲み込む。

順調に迎撃しているのはだったが、胸中には妙な胸騒ぎを抱いていた。何だか、敵の襲撃が本気で無いような気がするのだ。

空で戦闘が行われてると同時に、地上でもガジェットと交戦している者が二人居た。？型と？型の群れが、二人の騎士王と魔導師を取り囲んでいる。

先に動いたのは、黒い騎士王——セイバーオルタだった。素早くガジェットの群の中に踏み込み、

「消えろっ……！」

黒い線を走らせ、ガジェットの横一文字に切り裂く。断面から放電を起こし、斬られたガジェットは全て爆破した。

常人の目では捉えられない程の神速の速さで振り抜かれた剣は、

黒く禍々しい魔力を放っている。全体的に真っ黒に塗りつぶされ、刃の部分には血管のような紅い筋が見られ、とても同じエクスカリバーとは思えない外見をしている。

オルタに続いて、魔導師のアリシアも攻撃を仕掛ける。グローブ型デバイス『ポルトアラク二』を装着した指先から伸びた糸を、周囲に張り巡らせた。？型は勿論、ボデイの大きい？型も糸に絡まって身動きが取れなくなる。

その瞬間、

「ショックっ……！」

魔力変換で糸に電流を流し、ガジェットの機体に電撃を浴びせる。高圧電流を受けたガジェットは、ボデイの隙間から黒い煙を立ち昇らせ、ショートして動かなくなった。地上は、糸を張り巡らせて闘うアリシアにとって、自分の巣テリトリーそのものだった。

圧倒的強さを誇り、二人は難なくガジェットを哀れな鉄クズに変えていく。

あまりの歯応えの無さに、オルタは些か興奮めしたように溜め息をついた。

「つまらん……」

「あのー、仕事なんですけど……」

「ふんっ。この程度、王である私が直接手を下すまでも無い……。残りは、貴様と高町で片付けろ……」

「あはは……。まあ、オルタさんのお陰で、大分数が減ったから楽になったけどね」

オルタは剣を収め、後の事はアリシア達に任せた。

アリシアは、デバイスを装着した両手を構えて、残りのガジェットの一扫にかかる。隼樹が何か懸念を抱いていたようだが、この調

子なら問題無さそうだ。

それでも気を引き締め、アリシアはガジェットに挑んで行った。

＊

レリックと少女を搬送してるヘリから、かなり距離が離れた廃ビルの屋上に二つの人影が佇んでいた。

一人は、ISでフェイト達を海上に引き付けていたクアットロだ。陽動作戦を終えて、廃棄都市に移動してきたのだ。

もう一人は、また別のナンバーズである。茶色の長髪を黄色いリボンで一つに纏めて垂らし、同じデザインのボディースーツの上に茶色のマントを羽織っている。？10のディエチと言う。右手には、身の丈以上の高さを誇る布に包まれた棒状の物を持ち、無表情な顔で廃棄都市を見渡している。

傍に座り込んでるクアットロが、笑顔で尋ねた。

「ディエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

「ああ。遮蔽物も無いし、空気も澄んでる。良く視える……！」

戦闘機人の中でも、ディエチは特別視力が強化されている。目の中で機械音を鳴らし、内部に仕込まれたレンズによって遠く離れた標的を綺麗に、正確に捉える。

「でも、いいのクアットロ？　まとめて撃ち落としちゃって……。最悪、威力が強過ぎてケースも器も壊しちゃうよ……？　そうなの、あたし知らないからね」

確認するディエチの声には、表情と同じく感情がこもっていない。

彼女の中で、ヘリの搭乗者やレリックを犠牲にする事への不安や恐れは全く無かった。今のも、ただ単に事務的な確認を口にしたただけだ。

冷酷冷徹な妹に、クアットロは嬉しそうに笑って答える。

「ぜんぜん構わないわよ。ドクターとウーノ姉様曰く「あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、強化された砲撃でも死ぬ事は無いから大丈夫」だそうよ。それに、もし死んじゃっても所詮は失敗作だっただけの事だから、別に怒られはしないわ」
「ふん。なら、いいんだけど……」

確認を済ませたディエチは、マントと布を取り払った。彼女の右手に、黒光りする大きな砲身が現れる。砲撃手であるディエチの固有武装『イノームスカノン』だ。砲身を横に倒して、目標のヘリに砲口を向けて構える。IS『ヘヴィバレル』を発動させ、エネルギーチャージを開始する。

「『ディアブルチャージ』……!」

更にディエチは、黒龍から貰った能力を発動させた。

只でさえSランク並の威力のエネルギーに、更に禍々しく強大な力ちからを上乗せする。イノームスカノンも、強化されたディエチの能力に耐えられるように改造されていた。一応手加減はするが、それでも直撃すれば撃墜は免れない。

「後12秒……! 11……10……9……」

標的を見つめ、ディエチは静かに惨劇へのカウントダウンを始める。

後ろで座って見ているクアットロは、歪んだ快樂を表す笑みを浮

かべていた。ヘリ付近に管理局のエースオブエースが飛んでいるが、砲撃に気付いて防ぎに入ったところで、リミッターが付いてる状態では防ぎきれない。大切なモノを護れないかったのはが絶望する表情を想像するだけで、心が躍る。

チャージが完了して、ディエチは黒い引き金を引いた。

「『ディアフロア悪魔の咆哮』発射っ……！」

直後、轟音を鳴らして砲口から膨大なエネルギーが、極太の光線となって発射された。禍々しい黒い光線は宙を翔け、一直線に標的に向かう。

空中に居るなのはが、地上のアリシアとオルタが、迫りくる砲撃に気付く。

次の瞬間、砲撃はヘリに直撃して、空で大爆発を起こした。大気を震わせ、大音量の爆音を辺りに響き渡らせる。着弾地点に、濃い爆煙が立ち込めた。

「うふふのふふ。流石、黒龍お姉様が強化された砲撃ねっ！」

「黙ってて。今、命中確認中」

姉を静かにさせて、ディエチは強化された視力で立ち込める煙を見据える。

徐々に晴れていく煙の中から、黒い物が覗く。目を凝らすディエチが見たのは、無傷で飛行を続けているヘリの姿だった。

「あ。まだ飛んでる」

「あら、本当っ？」

特に驚いた様子も見せず、二人は暢気な声を出す。

クアットロもモニターを展開させて、自分の目で確認する。画面

に映し出されたのは、ヘリの前で砲撃を防いだと思われる高町なのはだった。砲撃が撃たれる前から嫌な予感を抱いていたなのは、はやてにリミッター解除の申請をした。着弾ギリギリのタイミングで限定解除の許可が降り、素早くエクシードモードに切り替えて全力防御したのだ。

ヘリ撃墜は失敗したが、モニターを見つめるクアットロの顔は笑っていた。

「流石は、不屈のエースオブエースと呼ばれる管理局最強の魔導師ね。うふふ……でも・そんな超エリート魔導師様も、ディエチちゃんの砲撃の威力は予想外だったみたいねえ！」

なのはは、確かに砲撃を防いだ。

ヘリには傷一つ付いてないが、彼女自身は無傷では無かった。前にかざしたレイジングハートにはヒビが走り、損傷してボロボロの白いバリアジャケットには所々に赤色の血が滲んでいる。レイジングハートを持つ左手からも血を滴り落とし、額にも傷を負って一筋の血を流していた。爆風を受けて、苦しい顔で息も乱れている。

ISのみのディエチの砲撃ならば、無傷で防げたかもしれない。だが、新たな力を得たディエチの砲撃の威力は、軽くSランクを超えていた。

ヘリを落とせなかった代わりに、負傷したなのはの姿にクアットロは愉快げに笑う。他人が傷付き、悶え、苦しむ姿を愉しむ、普通の人なら嫌悪感を抱く外道の笑顔だ。

「うふふ……！ 果たして、そんな状態で次弾も防げるかしら？ ディエチちゃん。次は少おし本気で撃っちゃいなさい……！」

次の砲撃を指示するクアットロだが、ディエチはかぶりを振った。

「あゝ、ゴメン、クアットロ。ソレ無理っぽい……」
「え……？」

クアットロが訝ると、屋上に細長い糸が張り巡らされた。

二人は呆気にとられた様子で、反応する間も無く身体を縛られて拘束されてしまった。試しに力を込めて脱出を試みるが、魔力が通されて強化でもされているのか、千切れそうにない。

「捕まえたっ……！」

身動きを封じた二人の前に、アリシアとオルタが現れた。

大切な仲間を傷付けられて、アリシアは端正な顔を怒りに歪めていた。オルタの表情に大きな変化は見られず、黙ってクアットロとディエチを見据えている。

鋭い眼光を二人にぶつけ、アリシアが告げる。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕しますっ……！」

「いやゝん！ そんな恐い顔で睨まないでゝ！」

わざとらしく恐いフリをして、アリシアの神経を逆なでするクアットロ。捕まっていると言うのに、随分と余裕な態度だ。

しかし、ソレが彼女の癪に障った。

瞬間、クアットロの頬を何かが掠めた。綺麗な肌色に薄い切り傷が出来て、赤い血を流す。顔を傷付けられ、動揺して目を見開いたクアットロにオルタが黒剣の切っ先を向ける。

「黙れっ……！ 貴様の声は、耳障り以外の何物でもない……！
次に王の機嫌を損ねれば、今度は腕を斬り落とすぞ……！」

低い声で威圧するオルタは、どす黒い殺気を放つ。隼樹からナンバーズは殺すな、と言われているが、傷付けるな、とは言われていない。ならば、腕の一本や二本ぐらい、斬り落としても平気だろう。サイボーグなら、後で修理でもして元通りに直るハズだ。

顔を傷付けられたクアットロは、怒りと恐怖の混じった表情で睨んだ。相手を虫けらのように踏みつけ、苦痛と恐怖を与えるのは好きだが、自分がやられるのは不愉快と屈辱の極みだった。

アリシアが二人を連行しようとした時、オルタが何かを察した。

「下がれっ！」

「えっ……！？」

強引にアリシアを後ろに押しやり、オルタは黒剣を横薙ぎに振るう。直後、金属同士がぶつかり合ったような甲高い音が鳴り、火花が散った。

すぐに後ろを振り向くが、糸に捕まっていたクアットロとディエチの姿は消えていた。まるで鋭利な刃物で切られたように、縛っていた糸は切断されている。目にも止まらぬ速さで新手が救援に入り、拘束してる糸を切り裂いて二人を連れ去ったのだ。オルタが接近に気付き、切り捨てようとしたが、手応えは無かった。

「ちっ……！ 逃げられたか……」

逃げた方向に目をやり、オルタは苦い顔で舌打ちした。

＊

捕まっていた廃ビルから離れた地点。

ソコに降り立ったのは、クアットロとディエチを両脇に抱えた救援者だった。長身の女性で、やはりボディースーツを着ている。紫色の短髪で、厳しい顔つきに金色の瞳を持つナンバーズは、？3のトーレだ。

床に降ろされた二人は、安堵の表情を浮かべる。

「はあ〜！ トーレ姉様あ、助かりました〜」

「感謝……！」

「バカ者共め……！ 油断するからだ……！ 監視目的だったが、来ててよかった」

呆れ顔で二人を叱り、トーレは腕を組んで溜め息をつく。

「地下の方は黒龍の兵が敗れ、お嬢も撤退されたそうだ。今日のところは、我々も引き上げるぞ……！」

指示を出すトーレの斜め後ろで、クアットロは頬の傷に触れた。顔を俯け、歯を覗かせて食いしぼる。

——あの黒騎士……！ この顔の傷と受けた屈辱、必ず倍にして返してやりますわあ……！ 私のISと黒龍お姉様から頂いた能力^{ちから}で、必ず……！

人知れずクアットロは、オルタへの復讐を誓う。

＊

激しい戦闘の末、少女もレリックも何とか護り切り、事件は一応決着がついた。傷を負ったなのは、ヘリに搭乗して、そのまま目的地の聖王医療院で治療を受けた。なのはの怪我は、二、三日安静

にしていれば完治するそうだ。路地裏で発見された少女の検査も一通り終わり、大きな問題も見られず、とりあえずメンバーは解散となる。

隊舎に戻った隼樹は、地下での勝手な行動の件で、部隊長のはやてから軽くお叱りを受けた。フォワードの四人は、報告書を書き、それぞれの部屋で休んでいる。

そして夜も更けた頃、隼樹はセイバー、オルタ、アリスの四人で今回の闘いの映像を見直す。クアットロの幻術、ディエチの砲撃、トーレと思われる乱入者の高速移動。巻き戻しをしながら、全ての記録映像を繰り返し観て確認する。

「違うね……。全然違う」

映像を止めて、隼樹は呟いた。

「俺の知ってるナンバーズじゃない。少なくとも、ディエチの砲撃の威力は、せいぜいSランク程度……リミッターを解除したなのはを負傷させる程じゃ無かった……。明らかに、何か別の力が加えられてる……！」

「やはり、防衛プログラムの仕業ですか？」

「まあ、そう考えるのが妥当かな……」

疲れたように深い溜め息をつき、隼樹は眉根を寄せて深刻な顔になる。

「こりゃあ、思ったより厄介な事になりそうだな……！ 今回の戦闘じゃあ、ディエチの砲撃しか強化されてないように見えるけど、実際は他のナンバーズも何らかの強化が施されてるハズだ……！」

映像を見つめる隼樹は、苦戦を予感した。

協力

聖王医療院は、普段以上に静寂だった。

原因は、昨日路地裏で発見され、院に収容されていた少女が個室から姿を消したからだ。聖王教会の騎士、シャツハ・ヌエラが特別病棟とその周辺の避難と封鎖を済ませた。飛行や転移、侵入者の反応が無い事から、少女はまだ院の敷地内に居ると思われる。シャツハと病院に訪れたシグナムと、その連れである二人が手分けして探す。

検査では危険反応は見られず、魔力量がそれなりに高かったが、普通の子供の範疇の数値だった。しかし、人造生命体である事は確かで、存在的な危険は否定出来ないらしい。そう考えた上での、避難と封鎖だが、子供相手に些か大袈裟であるとも思える。

シャツハとシグナムが建物内を搜索する一方で、連れの二人は外の敷地を歩いていた。草木が植えられ、緑が色付けされている中庭だ。歩きながら周囲を見回していると、近くで草を踏む音が鳴った。音の出所に二人が顔を向けたのとはほぼ同時に、少女が現れた。路地裏で発見された、あの金髪の少女だ。

「ああ、見つけた！ この子だね、プレシア？」
「ええ、そうよ」

少女を見つけて、二人は安心して微笑んだ。

オレンジ色の狼の耳を頭に、腰の辺りから尻尾を生やした女は、アルフ。フェイトの使い魔で、狼の体を素体としている。今は狼の姿ではなく、グラマラスな女性の姿だ。

彼女と並んで立っている女性は、名をプレシア・テストロッサと言いい、アリシアとフェイトの二人娘の母親である。ミッドでは珍しい黒髪の女性で、美しい容姿をしている。実際は見た目以上の高齢

者なのだが、隼樹の『イメージ』の効果で美貌を保っているのだ。ちなみに、隼樹本人も老化を止めていたりする。

二人は隼樹から連絡を受け、少女の面倒を見てくれないかと頼まれ、シグナムの案内で聖王医療院に訪れたのだ。

「見つかってよかったわ。心配したのよ？」

穏やかに笑い、優しい声音で少女に歩み寄るプレシア。

すると、少女は一步後ずさった。初対面の相手に対して、子供ながらに警戒してるようだ。

少女の様子を見て、プレシアは歩みを止め、屈んで同じ目線に合わせて声をかける。

「大丈夫よ。何もしないから、安心してちょうだい」

「あ……うう……」

プレシアの声に警戒心を解いたのか、少女はゆっくりと近付いてきた。

ふと少女の目に、アルフの尻尾が目に入った。興味を引かれたのか、フリフリと動く毛並みを凝視する。

自分の尻尾を見てる事に気付いたアルフが、踵を返して尻尾を差し出した。

「触ってみるかい？」

「ふえ……？」

最初は戸惑った少女だったが、好奇心が勝って恐る恐る小さな手を伸ばす。オレンジ色の毛並みを掴み、気持ちの良い感触を掌に受ける。

「わああ……！」

尻尾の毛並みを気に入ったようで、少女の顔に笑顔が生まれた。もうスツカリ警戒心を無くして、無邪気な様子で尻尾に抱き付く。フサフサの尻尾に、頬ずりまでした。

「あはは！　くすぐったいよう！」

アルフも笑い、プレシアは少女の頭を優しく撫でた。
和やかな空気に包まれるが、

「逆巻け！　ヴィンデルシャフトっ！」

院内でシャツハがセットアップを起こし、急いで中庭に駆け付けた。

「プレシア女史！　アルフさん！　その子から離れて下さい！」
「ひいっ……！」

大きな音を鳴らして現れたシャツハは、双剣型デバイス『ヴィンデルシャフト』を両手に構え、険しい顔で少女を威嚇する。

少女の方は、突然現れたシャツハに睨まれて怯えていた。涙目になり、短い悲鳴を漏らしながら、すがりつくようにアルフの尻尾にしがみつく。頬を赤くして、今にも大泣きしそうな様子だ。

シャツハの行動に、たまらずアルフは少女を庇い、声を上げた。

「ああ、大丈夫だよ……！　ちよつとシャツハ！　何してるんだい、こんな小さな子を恐がらせて！」

「いや、しかし……」

「シスターシャツハ」

プレシアが立ち上がり、シャツハと向き合う。

「まだ幼い子供相手に、些か大人気ないんじゃないかしら？」

「ですが、その子は……」

「貴女が仕事に真面目なのは知っているし、この子の事情も解っているわ。だけど、検査でこの子に危険が無い事は結果として表れている。それに、この子自身に敵意や殺意のような危険意識も確認出来ない。危険が確認されない以上、こんな幼い子を警戒する必要は無いわ。だから、武器は収めてちょうだい」

普段には無い威圧感を放ち、声にも凄みがあった。かつて大魔導師と呼ばれた肩書きは、伊達では無い。勿論、少女に威圧感を感じないような気を付けている。

今では仲の良い家族となっているが、プレシアは過去に自分の行き過ぎた感情から、まだ幼いフェイトに厳しく当たってきた。幼い少女がフェイトの姿と被り、自然と強い口調で反論していた。

「は、はい……。申し訳ありません」

プレシアの迫力に圧され、シャツハはデバイスを収めた。そうではなくとも、怯えた少女の様子を見れば、危険性が無いのは明白だ。シャツハが矛を収めたのを確認して、プレシアは安心させるように少女の頭を撫でた。

「恐い思いをさせて、ごめんなさい。でも、もう大丈夫だからね」
「うん……」

優しく接せられ、少女の不安と恐怖も、幾らか払拭された。落ち着いたところで、自己紹介を始める。

「初めまして。私は、プレシア・テストロッサ。貴女のお気に入り
の尻尾を持ってるお姉さんは、アルフよ。貴女の名前は、何て言う
のかしら？」

「ヴィヴィオ……」

「そう、ヴィヴィオって言うのね。可愛いお名前ね。それで、ヴィ
ヴィオは何をしてたのかしら？」

「ママ、搜してたの……」

顔を俯け、ヴィヴィオは寂しそうに呟いた。

母を求める姿に、プレシアは胸の痛みを憶える。かつて、自分が
拒絶していた事で、フェイトも母親の愛情を求めていた。振り向い
てもらう為に、どんなに過酷なおつかいでもこなしてきた娘に、プ
レシアは虐待と言う酷い仕打ちをした。散々酷い目に遭わせてきた
自分を、それでもフェイトは愛してくれた。自分の過ちに気付いた
プレシアは、これからはフェイトをアリシアと同じように目一杯愛
そうと決めたのだ。

プレシアは温かみある微笑みを浮かべ、ヴィヴィオを抱き上げた。

「それじゃあ、一緒に搜しましょう」

プレシアの肩に顔を埋めたヴィヴィオは、小さく、しかし確かに
頷いた。

＊

所変わって、ココは聖王教会。

部隊長のはやてに呼ばれ、隼樹とセイバーが訪れた。他にも、な

のはとフェイトの隊長陣に六課の後見人であるクロノも同席している。なのはの怪我は完治していないが、戦闘や激しい運動をしなければ日常生活に支障をきたす程では無いので、今回の招集にやってきた。

再び教会に訪れた隼樹は、部屋でカリムを見た途端に顔を赤くして思わず目を逸らした。前にカリムに迫られ、キスされた事を思い出し、恥ずかしくて直視出来ないのだ。そんな隼樹の様子を見て、カリムは微笑み、唯一事情を知っているクロノは苦笑した。

皆揃ったところで、はやての口から本題が出された。今日集めたのは、機動六課設立の本当の理由についてだった。小難しい話は抜きにして簡潔に説明すれば、カリムのレアスキルの『プロフエーティン・シュリフテン預言者の著書』にある不吉な預言が現れたのだ。記された預言の内容は、管理局地上本部の壊滅と、管理局システムの崩壊だった。その未来を回避する為には、地上で自由に動ける部隊が必要となり、機動六課が設立されたのである。本当の目的と今後の事を知ったなのは達は、決意も新たに協力する事を約束した。

先ほど聞いたカリムの預言の内容に、原作との違いは無かった。防衛プログラムの件は事件前に決着がつくのか、それともこれから新たな預言が追加されるのか。

ちなみに、地上部隊はカリムの預言を嫌っている。当たる当たらない云々では無く、実質のトップであるレジマス・ゲイズ中将がこの手のレアスキル自体を快く思っていないのだ。コレが、聖王教会と管理局の悪い仲の一端でもある。

機動六課設立の件が済むと、今度は隼樹とセイバーから防衛プログラム生存について話をした。地下でセイバーの偽者と闘い、ナンバーズが明らかに強化されてるのを観て、二人は確信したのだ。隠す必要は無いと判断して、丁度いい機会でもあるので皆に暴露する。最初は信じられなかった一同だったが、冷静に戦闘を振り返ると納得してくれた。とりあえず、今まで以上に気を引き締め、覚悟する事を決めた。

話が終わり、解散しようとしたところで隼樹が口を開いた。

「あ、すいません。ちょっとクロノ君とカリムさんの二人に話があるんですけど、いいですか？」

「ああ、僕も少しなら時間がある」

「私も構いませんよ」

二人の許しを得て、隼樹とセイバーは部屋に残り、六課の隊長陣は先に隊舎に戻った。

話の口火を切ったのは、カリムだった。

「それで、お話とは何ですか？」

「あゝ、実はですね……。まだ詳しくは話せないんですけど、今回の事件でお二人にお願いしたい事があるんです」

「お願い？」

「ああ。ただ……局員のクロノ君や管理局と関係が深いカリムさん達にとっては、ちょっと……いや、かなり危険と言うか、損をすると言うか……ロクな役目じゃないんですけど……」

怪訝そうに尋ねるクロノの問いに、隼樹は言葉を詰まらせ、選りながら答えた。

敢えて隼樹が、原作通りに事を進めるには彼なりの狙いがあった。ソレは、黒幕である最高評議会の存在と悪事を世間に晒す事だ。未来に起こる地上本部襲撃及び機動六課隊舎襲撃、更に『聖王のゆりかご』を起動させての大規模テロを指示したのも全て最高評議会のせいにして、全ての罪を押し付けてナンバーズを救うのが隼樹の計画である。イカサマをした者は必ずそのイカサマで自分の首を絞めるように、評議会の連中を自分達が犯した罪で破滅に突き落として生き地獄を味わわせてやる。その為には、管理局内部の者の協力が必要なのだ。

事実が公になれば、管理局への世間の批判は痛烈なモノになるだろう。だが、組織のトップが姿を現さない事に何ら疑問も抱かず、身内の犯罪に気付かなかった事を考えれば、当然の報いだ。それに、この事件をキツカケに管理局は内部改革をして、やり直せばいい。少しずつだろうが、徐々に信頼を取り戻せるだろう。

隼樹の目的は、あくまで最高評議会を蹴落とし、ナンバーズを理不尽な結末から救う事であって、管理局崩壊では無い。数多の次元世界を管理する管理局と言う組織は、必要な存在だからである。ソレに、なのは達は勿論、善良な局員も多く所属しているのだ。組織自体を潰すのは、どう考えてもやり過ぎだ。

頼みの内容が内容なだけに、この場では明かせない。虫のいい話なのは解っているが、それでもクロノ達の協力が必要なのだ。

「お願いします……!!」

頭を下げ、隼樹は二人に頼み込む。

すると、カリムから穏やかな声がかけられた。

「隼樹さん、頭を上げて下さい」

言われた隼樹は、ゆっくりと顔を上げた。

向かいの席では、カリムが微笑みを浮かべていた。

「最初に協力を願ったのは私達の方ですから、そちらの頼みを断る訳にはいきません。何より、他ならない隼樹さんの頼みです……ちから力になるとお約束します!」

「ああ。内容が何であれ、その時が来たら僕も協力しよう!」

カリムに続き、クロノも後の協力を約束してくれた。

「ありがとうございます……！」

隼樹は、心から二人に感謝した。

クロノとカリムは、頼みの内容について言い淀んだ隼樹の反応から、管理局にとって非になるような事、或いはソレに近い事なのだろうと察しはついていた。それでも二人は、隼樹への協力を約束してくれた。損得勘定を抜きにした感情で、二人は応えたのだ。

隼樹の後ろで事の成り行きを見守っていたセイバーは、結果に安堵して微笑んでいた。

二人の協力を得た事で、コレで計画実行の準備が整ってきた。後は、どうヴィヴィオを原作通りに誘拐させるかの選択、強化したナンバーズの対処等の問題を解決するだけだ。

用件を済ませた隼樹は、席を立ち上がった。

「それじゃあ、俺はこれで……」

部屋を出ようと、扉に向かう途中だった。

（待って下さい！）

「え……？」

不意に念話が届き、隼樹は歩みを止めて振り返った。

念話の送り主は、席を立ったカリムだ。若干頬を赤く染めて、念話続ける。

（あの、この後か明日くらいに空いてる時間がありますか？）

（え、えーっと、そうですね……今日は会う人達が居ますから無理ですけど、明日なら……）

（それでは明日、ココで私の相手をしていただけないでしょうか？）

カリムの頼みを聞いて、隼樹は自分の顔が熱くなるのを感じた。
コレは頼みと言うより、カリムからの“お誘い”だ。つまり、こ
の間の続きを御所望なのだろう。
少し戸惑いつつも、

(…：はい。分かりました)
(ありがとうございます)

隼樹は誘いを受け、カリムは嬉しそうに笑った。
念話のやり取りを知らないセイバーは訝り、クロノは肩を竦めた。

集結（前書き）

後半にエロ描写注意！

集結

聖王医療院でヴィヴィオを引き取ったプレシアとアルフは、シグナムが運転する車で機動六課隊舎にやってきた。二人共、今日から六課隊舎に着いて、ヴィヴィオの面倒を見るのだ。形式上では、隼樹達と同じく民間協力者と言う事になっている。

フォワードの四人や他の局員も、フェイトとアリシアの母親であるプレシアとは初対面だった。ただ、フェイトが保護者として面倒を見てきたエリオとキャロは、二人と面識があるので、再会出来て喜んでいる。スバルとティアナも最初は緊張していたが、穏やかな印象の女性で優しく接せられ、自然と緊張も解れた。アルフも明るく声をかけてきて、元気の良いスバルとはすぐに打ち解けた。

今は、プレシアが隊舎の一室で、ヴィヴィオの世話をしている。ヴィヴィオの方も彼女に懐いており、一緒に絵を描いて遊び、褒められて笑顔になる。

不意に、扉が開いてアルフが入ってきた。

「プレシア〜！ 隼樹達が戻ってきたよ〜！」

「隼樹が!？」

アルフからの知らせを聞いたプレシアは、弾かれたように立ちあがった。

彼女が六課に訪れたのは、ヴィヴィオの世話を頼まれた事もあるが、やはり隼樹に会いたい気持ちが大きかった。かなり年の差があるが、プレシアも隼樹と付き合っている恋人の一人なのだ。

ようやく愛しい人に会えると思うと、胸が躍って自然と顔も笑顔になる。そんなプレシアを、側に居るヴィヴィオは茫然と見上げていた。

部屋を出て隊舎のロビーに行くと、セイバーを連れた隼樹が居た。

「隼樹！ セイバー！」

「プレシアさん！ アルフ！」

隼樹とセイバーも、二人に気付いて返事をした。

プレシアは駆け出して、人目も気にせず隼樹に抱き付いた。大きな胸の膨らみを、無遠慮に押し当てる。

「会いたかったわ、隼樹……！」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なのですか！ 貴方、ここ最近ずっと六課にばかり籠りっきりで、私に会いにきてくれなかったじゃない……！ もう放置プレイはウンザリよっ！」

「いや、放置プレイってアンタねえ……」

胸を押し付けられ、詰め寄ってくるプレシアに隼樹は顔を赤くして、たじたじになる。

周りの局員からは注目の的になり、その中でも男性局員は嫉妬の念を抱いていた。数少ない男仲間であるが、セイバーやオルタ、リインフォースにプレシアと言った美女美少女と幅広い女性と付き合いをしてる隼樹は同時に敵でもあった。男の友情って脆いよね。

二人の傍で、セイバーもアルフと挨拶を交わす。

「アルフ、元気そうで何よりです」

「そっちも元気そうで良かったよ。まあ、こっちはちょっと大変だったけどね……」

「と言いますと？」

「プレシアの事に決まってるじゃないか。隼樹に会えないってんで、泣いたり喚わめいたり、落ち込んだり……しまいには、発狂寸前にまできた時だってあるんだよ？」

「どんな精神状態ですか!?!」

アルフが語るプレシアの状態に、思わずセイバーはツツコんだ。その時、アルフの尻尾にしがみついているヴィヴィオを見つけた。

「ほらっ、ヴィヴィオ。挨拶しな。あたしの知り合いだから、大丈夫だよ」

「……こんにちは」

「こんにちは。私はセイバーです」

「ヴィヴィオです」

セイバーは微笑み、ヴィヴィオと自己紹介を交わした。アルフの知り合いと聞いて、ヴィヴィオは警戒心を無くした。

「アルフお姉ちゃん。あの人は?」

ヴィヴィオが指差したのは、プレシアと話をしている隼樹だった。声が聞こえたらしく、二人はヴィヴィオに顔を向ける。逡巡した後、プレシアは隼樹に寄り添って微笑み、答えた。

「この人は葉谷資隼樹と言って、私の旦那さんよ」

「いや、結婚してないから。恋人ですから、まだ彼氏止まりですから」

プレシアの一段階飛んだ答えに、隼樹は即座にツツコんだ。

「プレシアっ……!」

「うおっ!?!」

突然ロビーに上がった鋭く大きな声に、隼樹は驚いて振り返る。

やってきたのは、リインフォースだった。急いで駆け付けたのか、額には汗をかき、肩で息をしている。しかし目は鋭く、紅い瞳でプレシアを睨んでいた。

恐る恐ると言った様子で、隼樹が訊いた。

「ちょっと……大丈夫ですか……？」

「デスクワークを……済ませて……駆け付けました……！」

「いや、汗だくですよ！？　どんだけの量の書類処理したんすか！

？　え？　そんなに大変なんですか、部隊長補佐って？」

声を上げる隼樹の前で、息も整わない内にリインフォースは興奮した様子で言った。

「プレシア！　隼樹は貴女一人のモノでは無いのですよ！」

「少し違うな、リインフォース」

そこへ、別の声が挟み込まれた。

一同が集まるロビーに現れたのは、オルタだった。他者を見下す侮蔑の笑みを浮かべ、女性陣に言い放つ。

「隼樹は王である、私のモノだ……！　誰にも渡しはしないぞ……！」

「オルタ……！　ソレは聞き捨てなりませんね！」

オルタの発言に、セイバーまで闘争心に火が点いた。

セイバー、オルタ、プレシア、リインフォースの女性四人が久しぶりに集まり、争奪戦に激しい火花を散らす。

四人の威圧感、迫力、凄みに気圧されて、周りに居る局員は顔を蒼ざめて離れていく。二人の騎士王と大魔導師、更に強力な融合騎の睨み合いともなれば、場は他を寄せ付ける事を許さない絶対領域

と化する。

「ヤバイヤバイヤバイ……！」

「ふええ……！」

「ヴィヴィオ！ こっち来なっ！」

危険を察した隼樹と怯えるヴィヴィオを抱えたアルフは、そそくさとロビーから退散した。

＊

「いやー、危ない危ない……！ 危うく、超人バトルに巻き込まれるところだった……！」

「っていうか、アンタが争いの種なんだけどね」

「……返す言葉もございません」

ロビーを出た隼樹とアルフ、ヴィヴィオの三人は隊舎の廊下を歩いていた。

建物の外から、言い争う声や激しい爆発音が聞こえてくるが、隼樹とアルフは努めて無視する。何にも聞こえないし、何にも知りません。

「いや、でも……何だかんだで、皆元気そうで良かったよ」

「まっ、そうだね」

隼樹の言葉には、アルフも同感だった。久しぶりに全員が揃って、騒がしくて、何だか嬉しくなってくる。妙に懐かしくさえ思う。

すると、三人の前にアリスが現れた。初めて彼女を見るアルフと

ヴィヴィオは、首を傾げる。

初対面の二人に、隼樹がアリスを紹介した。

「ああ、この娘はアリス。六課で保護してるんだ」

アリスは無言で会釈して、アルフもつられるように頭を軽く下げた。

改めて思うのだが、アリスは初対面の人は勿論、なのはやスバルと言った他の局員とも話をしない。唯一話をしてるのは、隼樹、セイバー、オルタの三人だけだ。単に多くの他人と接するのが嫌いなのか、それとも管理局員が嫌いなのか詳しい理由は解らない。

隼樹がアリスの事を考えていると、彼女が話しかけてきた。

「じゅんにーさま。地下での約束……」

「え……？ あ、ああ、そうだったな……」

地下での約束とは、地下空間で取り乱していたところをアリスに、自分がやるべき事を気付かされ、お礼に彼女が慕っている女版の自分に会わせると言ったのだ。アリスの要求に慌てて答えた隼樹は、決してド忘れしていた訳ではない、と信じてあげてほしい。

そこへ、隣でアリスの言葉を聞いたアルフが、怪訝そうに片眉を上げて訊いた。

「隼樹…… “じゅんにーさま” って何だい？ まさか、アンタ…… また新しい女を……」

「いや、それは、その……」

アルフの問い詰めに、隼樹はしどろもどろになる。女版とは言え一応は『隼樹』であり、奴隷と言う主従関係ではあるが、新しい女を作ったと言えば作った事になってしまう。何とも面倒で、答えに

くい関係である。

すると、アリスが隼樹の服を引っ張り、無理矢理連れて行く。

「あつ、ちょっ……！ ゴメン！ また後で……！」

されるがままに、隼樹はアリスに廊下の奥に連れて行かれた。

残されたアルフとヴィヴィオは、啞然とした顔で二人を見送った。
ややあつて、ヴィヴィオがアルフに言う。

「アルフお姉ちゃん。隼樹お兄ちゃん、人気者？」

「あ、ああ、そうだね……。人気者だね」

隼樹の現状を見て、アルフは笑顔を引き攣らせる。

——隼樹……。アンタ地味男のクセに、結構罪な男だよねえ……。
カリムの件まで知ったら、アルフはどう思うのだろうか。

＊

アリスに引っ張られ、隼樹は自分の部屋に連れ込まれた。

扉には鍵をかけ、誰も入れないように密室状態にする。セイバー達は隼樹を巡る争いを外の空間シュミレーターで行っているので、邪魔者が来る事も無い。思う存分、女版隼樹との時間を堪能出来る大チャンスだ。

「さあ、じゅんにーさま……！」

「ああ、分かっている。分かっているよ、アリス」

出来る事なら、女に変身するのは物凄く恥ずかしく、御免こうむ

りたいのだが、約束してしまったものは仕方ない。諦めたように溜め息をつき、隼樹は『イメージ』を発動させた。想像するのは、ホテル・アグスタで変身した金髪の美少女だ。

隼樹の体が一瞬光に包まれ、消えた時には女版隼樹に姿が変わっていた。お慕いする美女と再会して興奮するアリスの前で、女版隼樹は自分の姿を確認した。

「うん。問題無し！　ちゃんとおあたしになってるじゃん！」

「じゅんねーさま……！！　お会いできる日を、お待ちしてました……！！」

普段は無表情のアリスの顔が、頬を赤く染め、喜びと興奮を混ぜた笑顔になっている。

隼樹はニヤリと笑って、喜ぶアリスの顎に右手を添えた。

「地下では御苦労だったね。ちゃんと言いつけ通り、男のあたしを護ってくれてさ」

「いいえ。ソレが、じゅんねーさまのお望みでしたから……！！」

「くくっ……！！　ホント、アンタって可愛いねえ……！！　それじゃあ、言い付けを守ったご褒美をやるよ……！！」

妖艶な笑みを浮かべ、隼樹は顔を近付ける。

アリスは切なそうな表情で、迫る隼樹の綺麗な顔を受け入れ――

二人の唇が重なった。両肩を掴まれて、動けないよう固定される。

静かに目を閉じて、キスの甘い快楽に身を堕とす。

「ん……んんっ……！！」

口の中を舌で掻き回され、アリスは感じた事も無い快感を味わう。興奮の昂りと共に、身体が火照って熱を帯びる。

一方の女版隼樹は、キスだけでは物足りないのか、右手を肩から離してアリスの胸を乱暴に鷺掴みにした。

「んんっ……！ あんっ……！」

胸を掴まれたアリスは、塞がれた口の隙間から嬌声をもらす。身体が火照っている事もあり、普通よりも敏感に感じていた。

アリスの反応を楽しみながら、隼樹は胸を揉んで愛撫する。

「アンタ……んちゅ……ロリの、クセに……ん……結構胸、あるわよね……！ そのアンバランスさも、好きだけどさ……！」

「んああっ……！ じゅん、ねーさまぁ……！ はむ……んふっ……ああ、いいっ……！」

虚ろな目をするアリスは、口と胸の二重責めを受けて、快楽の海に溺れていた。刺激を受けて身体は熱くなり、切なそうに太股を擦り合わせ、今度は快楽で失禁してしまいそうだ。

次の瞬間、「んんっ！」とアリスの身体が跳ねた。絶頂に達したらしく、だらしなく濡れた舌を突き出し、切ない顔で天井を仰いでいる。快楽に堕ちた身体は、痙攣を起こしていた。

淫らな姿を晒すアリスに、隼樹はそそられて妖艶な笑みで舌舐めずりをする。

「アンタ、ホントに可愛いよ……！」

心ここにあらずな状態のアリスの頬を撫で、ふと隼樹はある事に気付いた。

「そう言えば、女のあたしの名前を決めてなかったわね……」

アリスを抱きかかえたまま、女版隼樹は考え込んだ。
ややあって、適当に名前を思い付いた。

「女だから、『隼子^{じゅんこ}』でいいか」

女版隼樹——隼子は隼樹以上に軽い奴だった。

自分の名前を決めた隼子は、今後の事も少し考えた。プレシアとアルフも機動六課に加わって、また戦力は強化された。フォワードの四人も成長しているが、ナンバーズが強化されている事を考えると、不安は拭い切れない。

もしもの時は、一時的にセイバー以外のサーヴァントや士郎にも協力を頼むかもしれない。だが、色々と問題がある。サーヴァントの再現は可能だが、戦闘となると膨大な魔力が必要になる。ソレが複数ともなれば、尚更だ。そして、サーヴァント自体にも問題はある。主に性格面で、約一名協力してくれるか怪しい者が居るのだが、どう扱ったらいいものか。コレ等の問題を解決しない限り、サーヴァントの助けを借りる事は出来ない。

「まっ、何とかなるでしょう」

隼子は、暢気な面もあった。

その夜、男に戻った隼樹は、四人の美女美少女と久々に熱く甘い夜を過ごした。

変更（前書き）

冒頭からのエロ描写に注意！
注意！

変更

プレシア達が機動六課に訪れた翌日。隼樹は、単身で聖王教会に居た。

昨日、教会での話が済んで部屋を後にしようとしたところで、騎士・カリムから今日のお誘いを受けたのだ。こちらも最高評議会を潰す為に、後から協力をしてもらうのだから、断る事も出来ない。ソレ以前に、また相手をするとか約束までしている。どちらにしても、隼樹の選択肢は一つのみだった。

教会に訪れた隼樹は、カリムの部屋に入り、彼女の相手をする。

「ん……ふう……！」

静寂な空間で、キスをしてるカリムが淫らな声を漏らす。隼樹と身体を抱き合い、二つの胸の膨らみを押し当ててキスを味わう。普段は絶対に見せない、カリムのもう一つの姿があった。

隼樹もカリムの背中に腕を回して、離さないよう抱き締めている。騎士でありながら女性としての魅力が高いのは、セイバーやシグナム達と同じだ。なんとも、けしからん身体をしている。

興奮が昂り、隼樹は我慢出来ずに右手をカリムの胸に持っていく。立派に膨らんでる胸を、服の上から掴む。その瞬間、カリムは弾かれたように顔を上げ、嬌声を漏らした。

「あんっ……！　じゅ、隼樹さん……！　あっ……ソコは……！」
「カリムさん……！」

唇を重ねて、無理矢理カリムの口を塞ぐ。接吻をする口の中では舌を絡ませ、右手で胸を揉む。カリムも胸のサイズは大きく、程良い弾力と柔らかさで抜群の揉み心地だった。口の中と胸を責めるの

は、昨日の隼子の手法だが、自分である事に変わりないから使っても構わんだろう。

二重責めに遭うカリムは、アリスのように切ない顔になり、快感に身を振よじらせる。

「んんっ……！ あむっ……！ あっ、ダメえ……ソコ、らめえ……！」

内と外からの刺激に、カリムの身体は熱く火照っていき、どんどん気持ち良くなっていった。

そして、

「んんんっ……！」

目をキツく閉じ、塞がれた口でぐもった声を上げ、身体が大きく跳ねた。全身に電流が走ったような感覚を味わい、口は涎まみれで濡れた舌を突き出して聖母のような顔からかけ離れた淫らな表情で、身体は痙攣を起こしている。快楽の海に身を堕として、興奮が最高潮に達したようだ。

「カリムさん……可愛い……！」

いけない事だと解っていないながらも、隼樹はカリムの誘いを受けて淫らな行為をした。どうしても断れず、彼女の誘惑に負けてしまうのだ。浮気をする男の心境は、こんな感じなのだろうか。

呼吸を荒げるカリムは、弛緩した身体を隼樹に預けた。

「はあ……はあ……気持ち、良かったです……！ こんな、初めて、です……！」

興奮混じりの荒い息遣いで、カリムは恍惚な表情を浮かべる。

「貴方と居る時、だけは……騎士でも無い、女の子でも無い……“女”になれるんです……！ その事が、とても嬉しいんです……！」

隼樹の耳に、カリムの荒くも甘い吐息が吹きかかる。

この時、隼樹は再び疑問に思った。果たしてカリムは、自分に好意を抱いているのだろうか。それとも恋愛は関係無く、“女”で居られる居場所として求めているだけなのだろうか。

結局のところ、いくら隼樹が考えても答えは見つからず、本心はカリムのみが知る。

＊

カリムの相手を終えた隼樹は、聖王教会を出て街に向かって歩いていた。『イメージ』で機動六課に跳ぶ事も出来るが、カリムとの行為を終えた後では、やはりすぐには帰り辛い。

このままカリムとの事を、セイバー達に黙ってるのは精神衛生上よろしくない。許してくれるか解らないが、なるべく近い内に正直に話そう。告白すれば、少なくとも半殺しは確定だな。

軽く憂鬱な気分になり、溜め息をついた時だった。

パッパー、とすぐ後ろから、車のクラクションが鳴った。自分には関係無いと思いつつ、隼樹は振り返る。

「隼樹」

「あ、フェイト」

黒い車から顔を覗かせたのは、フェイトだった。本局に用事があ

って、朝から隊舎を出ていたのだ。

「一人でどうしたの？」

「ああ……ちょっと用事で……」

「そうなんだ。あ、よかったら乗っていかない？ 丁度お昼ご飯の時間だし、どこかで一緒に食べない？」

「うん、そうだね。ありがとう」

厚意に甘えて、隼樹は車に乗り込み、隣の助手席に座った。

二人が向かった先は、隼樹も利用してるファミレスだった。このファミレスには、奥に他とは離れた席があって、静かに食事を楽しめ、他人に話を聞かれる心配も無い。隼樹のお気に入り席であり、今日も空いていたのでフェイトと向き合う形で座る。フェイトは軽めの料理を、隼樹はハンバーグを注文した。しばらくして、料理を運んだ店員さんがやってきた。注文した料理と伝票を置き、去っていく。

こうしてフェイトと二人っきりで食事するのは初めてだな、と長い付き合いの仲で新鮮な思いを抱きながら隼樹は頼んだハンバーグを食べた。

二人で雑談をして、食事を済ませた後だった。

「あら？ 今日はお一人ではないんですね」

「え……？」

聞き覚えのある声をかけられ、隼樹は顔を引き攣らせた。

フェイトも顔を向ければ、三人の女性が席の隣に立っていた。一人は、以前ココで話をした事のあるウーノだ。

驚いた様子で、隼樹は席を立ち上がった。

「ウ、ウーノさん！？ どうしてまた……？ しかも、増えてるし

……！」

「突然ごめんなさい。実は、貴方に相談をしに来たの」

隼樹と親しそうに話してるウーノを見て、フェイトはポカンとなる。知り合いのようだが、局内では見たことが無い。それに、凄く綺麗な女性だ。隼樹には失礼と思いつつ、正直釣り合わないと言うのがフェイトの感想だった。まあ、ソレを言ってしまったえば、セイバー達とも全く釣り合いが取れていないが。

そんな事を思っていると、フェイトは別の女に声をかけられた。

「すまない。相席をしても構わないか？」

「え？ ええ……どうぞ」

思わずフェイトは、相手に対して敬語で答えた。

断りを入れてきたのは、明らかにフェイトよりも年下の女の子だった。長い銀髪と右目を隠した黒い眼帯が特徴的で、顔は幼く背も小さい。私服の上には、灰色のロングコートを羽織っている。外見적으로는完全に子供だが、立ち振る舞いや雰囲気は妙に大人びている。コレが、フェイトが敬語を使った理由だ。

銀髪の少女の後ろには、三人目の赤髪の女の子が居た。こちらは平均的な身長で、何かイラついてるのか不機嫌そうに顔を顰めている。ふとフェイトは、彼女の顔に何か引つ掛かりを憶えた。初対面のハズなのだが、何処かで見た事があるような気がするのだ。

結局違和感が解けぬまま、フェイトは隣の空きスペースに二人を座らせた。

ウーノも隼樹の隣に座り、三人はそれぞれ飲み物を注文した。食器を引き下げられ、代わりに新しく注文された飲み物が置かれる。

コーヒーを口を含むウーノに、隣に座る隼樹が尋ねた。フェイトに聞こえないよう、声を抑えている。

「ちょっと、何考えてるんですか!？」　今は俺だけじゃなくて、局員のフェイトも居るんですよ!」

「ええ、解ってます。ですが、早い内に貴方に話したい事があるんです。細かくタイミングを図ってる余裕は無いんです」

ウーノの顔は、何か思いつめたような険しい表情をしていた。

何か事情がある事を察した隼樹は、とりあえず話を聞く事にした。本題に入る前に、ウーノはフェイトに自己紹介を始める。ぶっちゃけ、この瞬間が隼樹が一番緊張した。

「初めまして、フェイト・テストロッサ執務官。私は、ジェイル・スカリエッティの秘書をしております、ナンバーズの?1、ウーノです」

「スカリエッティ……!？」

名前を聞いた瞬間、フェイトは血相を変えて立ち上がった。

ジェイル・スカリエッティは、フェイトが長年追いつけてきた広域次元犯罪者でもある。自分を造り出した『プロジェクトF』の基礎論理を組み立てた男で、母を狂わせた要因の一つにもなっている。それ故に、彼を捕まえようと追いつけているのだ。ソレがまさか、こんな形で間接的に接触する事になるとは、思わなかった。

感情を昂らせるフェイトの反応を予想して、すぐに隼樹が宥める。

「フ、フェイト、落ち着いて!　お願いだから、ココは抑えてウーノさんの話を聞いてくれないかな?」

「でも……!」

「お願いだ!　今回だけでいいから……!」

隼樹が必死に頼むと、フェイトは逡巡した。

ややあって、心を落ち着かせるように、溜め息をついた。

「分かった……」

フェイトは席に座ってくれた。

彼女が引いてくれて、隼樹は安堵した。ココでフェイトが敵意を消してくれなければ、話が進まない。原作のフェイトだったら、おそらくウーノ達を逮捕しようと動いただろう。しかし、この世界では彼女の事情が大分違う。本来ならアリシアの遺体と共に虚数空間に身を落としたプレシアだが、隼樹と言うイレギュラーな存在の介入で、最悪の未来は回避されている。凶らずも、スカリエッティに対する憎しみを薄めているのだ。

フェイトが落ち着いたのを見て、隣に座っている二人のナンバーズも名乗る。

「?5のチンクだ」

「……?9、ノーヴェ」

銀髪の少女がチンクで、赤髪の少女がノーヴェだ。

「それで、話とは何ですか？」

警戒心は解かず、険しい顔でフェイトが話の内容を尋ねる。

彼女の問いに、ウーノが答えた。

「ホテル・アグスタ襲撃の前日に、黒龍と名乗る女性が私達のアジトに訪れました。強大な力ちからを提供する代わりに、自分と同盟を結んでほしいと……。彼女の力に興味を抱いたドクターは、同盟を結んで仲間に迎えました。そして、協定通りに妹達に力を分け与え、結果、能力向上と共に新たな能力ちからを得ました」

話を聞いた隼樹は、内心に舌打ちした。

思った通り、ナンバーズの強化には防衛プログラムが関わっていた。しかも、話を聞く限り、防衛プログラムは姿を女に変えているらしい。女と闘い辛い隼樹にとって、厄介な事この上ない。

「その黒龍と言う女は、もしかして防衛プログラム……？」

フェイトも同じ結論に達したらしく、ウーノに問うた。

ウーノは頷き、話を続ける。

「そうです。彼女の協力で、確かに妹達は強化されました。ですが、“防衛プログラムの力”を得た妹達に能力以外の変化が現れました。性格がより残忍に、残酷になったのです……！ その時、私は黒龍に対して恐怖と危機感を抱きました……！ このまま黒龍と手を組んでいていいのか……？ もしかしたら、私達はとんでもない怪物を招き入れてしまったのではないのか……？ そう思えてならないのです……」

廃棄都市の戦場で、ヘリを狙って砲撃したディエチは、標的の姿を見る前なら平然とトリガーを引けるが、決して命を軽んずる悪党では無い。だが、防衛プログラムの力を得たディエチは、更に冷酷で冷酷な面が増して、ただ標的を撃ち落とすのみの砲撃マシンと化していた。その他の力を得たナンバーズも、影響の大小こそあるが、変化が生じている。

妹達の変化を目の当たりにして、ウーノとチンクは言い知れぬ危機感を抱き、面識があり、話を聞いてくれそうな隼樹に相談する事を決めたのだ。

チンクがウーノの話を引き継いだ。

「防衛プログラムの力を得てないのは、私とウーノにノーヴェ、そ

れから別行動をしている？2の四人だけだ。力の会得は、強制では無かったのだな。黒龍は危険だが、私達はドクターの手で生み出された戦闘機人だ。ドクターや姉妹を裏切る訳にもいかないが、私達の力では黒龍をどうする事も出来ない」

「なるほど……」

事情を聞いた隼樹は、険しい顔で考え込む。

どうやら、自分が思っていた以上に事態は深刻そうだ。おそらく、力を得たナンバーズは黒龍に従う兵士に変えられているのだろう。性格の変化も、その影響だと思われる。

しばしの沈黙の後、チンクが口を開いた。

「隼樹……敵対しているお前に、こんな相談をするのはおかしいだろう。だが、私は自分の姉妹が利用されるのが、悔しいのだ……！」

一体私達は、どうすればいい……？」

チンクは膝の上で拳を固め、自分の力不足に憤る。

そんな彼女の心情を察して、隼樹は言った。

「いや、皆は何もしない方がいいです。黒龍が皆を利用してらなら、少なくともその間は向こうも手は出さないハズです。だから、黒龍に関してはこっちで何とかします……！」

元より、黒龍こと防衛プログラムとは決着をつけるつもりだ。

「それに、ナンバーズの皆も悪いようにはしませんし、スカリエツティに関しても出来るだけ努力します……！」 約束します……！」

ウーノ達の前で、隼樹は断言した。事実、ナンバーズもスカリエツティも犠牲者なのだ。

フェイトが何か言おうとしたが、言葉を飲み込んで黙った。

「すまない……！」

チンクが頭を下げ、ウーノも感謝の気持ちを抱く。

ノーヴェだけが、話の間ずっと黙り込んで、隼樹を見つめていた。

＊

「隼樹……どうして、あんな約束をしたの……？」

ウーノ達が立ち去った後、フェイトが尋ねた。

真相を知らないフェイトは、隼樹の考えが理解出来なかった。執務官として、犯罪者を庇う事は納得がいかない。

そんなフェイトに、隼樹は困り顔で答えた。

「……ゴメン。今は、まだ言えない。でも、そう遠くない内に嫌でも知るよ」

今、真相を局員であるフェイト達に教えるのは、動揺を与えるだけで得策ではない。

意味深に言う隼樹に、更に迫及しようとしたフェイトだったが、すぐに止めた。疑問は残るが、自分や母親、姉——ブレンシア アリシア家族を救ってくれた隼樹を、信じようと思ったのだ。

フェイトの前で、隼樹は顔を上げて天井を仰ぐ。

そして、フェイトに聞こえないように、小さく呟いた。

「計画変更、だな……！」

黒龍の介入で、隼樹は計画変更を決断した。

公開意見陳述会で、決着^{ケリ}をつける。ミッド地上の護りの象徴である地上本部襲撃だけでも、充分に住民に恐怖と不安を与える事になる。それに、実質な被害を受けるのは、管理局だけだ。ある意味で自業自得な形であり、ヴィヴィオを攫われる必要も無いから、全てに決着をつけるには最高のタイミングだ。何より、地上本部襲撃では無血制圧が目的だが、豹変した今のナンバーズでは以降に人を殺してしまう恐れがある。ソレを避ける為にも、公開意見陳述会で決着をつけるのが、ベストであり、最高の形なのだ。

上等だよ。向こうがそう来るんなら、返り討ちにしてやるよ。

「勝ってやるよ……！ 今度こそ……！」

変更（後書き）

エロは、ギリギリグレーゾーン……のつもりです。
セーフ！ セーフ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360z/>

IMAGE～ラストイメージバトル～

2011年12月10日18時14分発行